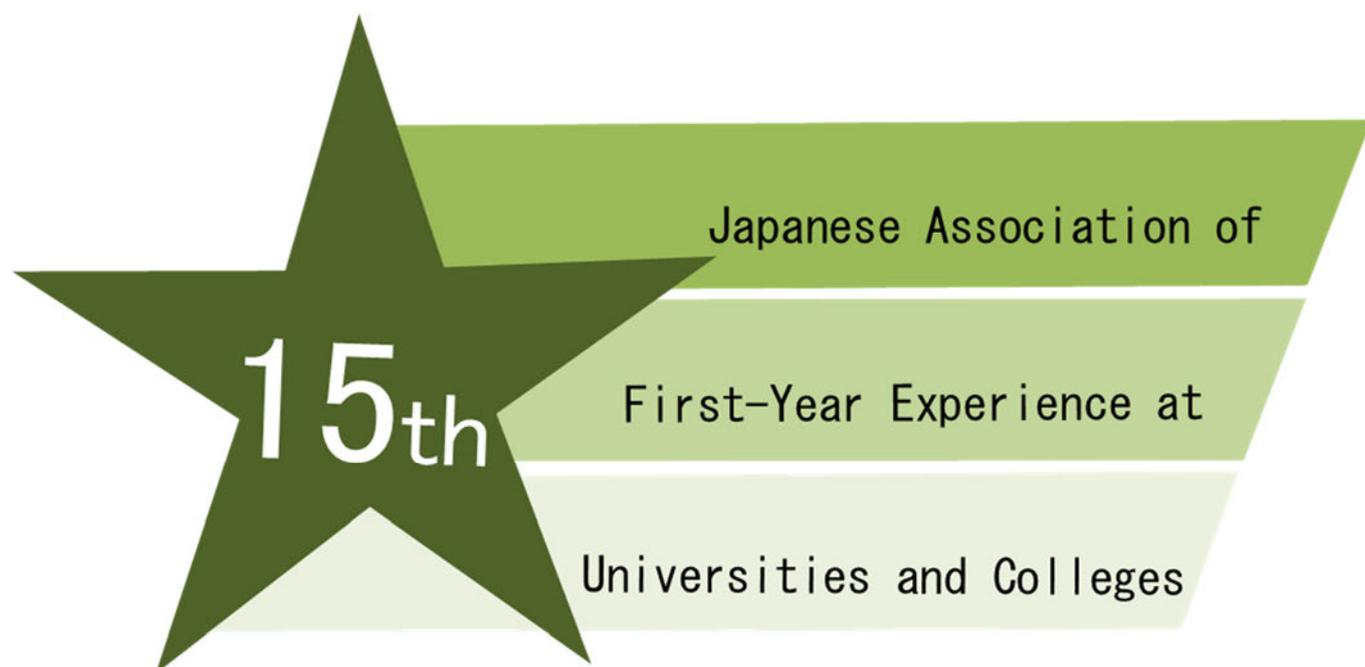


# 初年次教育学会 第 15 回大会発表要旨集



2022 年 9 月 5 日(月)～6 日(火)

多摩大学多摩キャンパス

主催：初年次教育学会

共催：多摩大学



## 目 次

ご挨拶	.....	p.	2
大会日程	.....	p.	3
大会参加のご案内	.....	p.	4
大会概要	.....	p.	5
会場へのアクセス	.....	p.	7
会場案内図（全体図）	.....	p.	10
大会プログラム			
大会校企画シンポジウム	.....	p.	13
課題研究活動委員会企画シンポジウム	.....	p.	18
企画セッション I	.....	p.	23
企画セッション II	.....	p.	24
自由研究発表	.....	p.	26
発表要旨			
ワークショップ	.....	p.	28
ラウンドテーブル	.....	p.	31
自由研究発表	.....	p.	39
賛助会員			
広告一覧	.....	p.	73
広告	.....	p.	74

## ご挨拶

初年次教育学会第15回大会を、2022年9月5日(月)～6日(火)の2日間、多摩大学多摩キャンパス(東京都多摩市)にて開催するにあたり、一言歓迎のご挨拶を申し上げます。

本学のある多摩市は、自然豊かな環境と閑静な住宅街が同居する多摩ニュータウンに位置します。昭和46年に多摩ニュータウンへの入居が始まり、急速に都市化が進みますが、多摩大学すぐそばにある桜ヶ丘公園内にある「旧多摩聖蹟記念館」など、貴重な歴史的文化財も多く残されております。「旧多摩聖蹟記念館」は、大学から徒歩圏内ですので、お時間があれば是非お立ち寄りください。

さて、2020年春からのコロナ禍により、卒業式や入学式の中止や延期など、節目の学校行事への影響はもちろん、ほとんどの教育機関において2020年度の学期開始を延期するなど、教育機関における困難は計り知れないものとなりました。そして多くの教育機関で、それまでほとんど経験したことがない「オンライン授業」の実施に向けて、準備を進める一方、どのようにして対面授業を再開するかを模索した、最初の1年であったと記憶しております。こうした中、多摩大学では、2020年秋学期から全授業で対面(ハイブリッド形式)を再開し、2021年度から現在まで、全授業完全対面(ハイブリッドなし)で実施しております。そして、本学の対面授業への熱い思いが、今回、初年次教育学会の対面実施に向け、最も前向きな大学として検討されたものと承知しております。初年次教育学会第15回大会が、多摩大学にて実際に対面にて実施されるとしたら、それは望外の喜びでございます。

本大会のテーマは「アフターコロナに向けた高大接続教育～持続可能なプログラム形成に向けて～」としました。現状としましては、アフターコロナとは決して言いきれない状況ではありますが、コロナ禍において様々に工夫された(オンラインを活用した)教育プログラムを活用し、高大接続教育がコロナ禍以前よりも増して、持続可能なものとして展開していくことを願ってということになります。例えば、地理的に離れた高校と大学のキャンパスを、オンラインでつなぐ高大連携プログラムなどは、今後その重要性が増していくものと承知しております。

今回は、例年通り2日間のプログラムとなりますが、学会の会員数と本学の教室等のファシリティのバランスが良いことも、本学で大会を開催する根拠ともいえると思います。時節柄、残暑が厳しいこととは存じますが、全国から多くの会員の皆様が対面での実施を楽しみにお越し頂けるものと承知し、関係者一同しっかりとした運営に取り組んで参ります。何卒よろしくお願い申し上げます。

初年次教育学会 第15回大会実行委員会  
委員長 小西 英行(多摩大学)

## 初年次教育学会 第 15 回大会 日程

### 9 月 5 日 (月)

9 : 0 0 ~	受付開始	A 棟 1 階エントランス
1 0 : 0 0 ~ 1 2 : 0 0	企画セッション I (WS①~WS③・RT①)	B 棟 1 階・2 階
1 2 : 0 0 ~ 1 3 : 0 0	昼休み	
1 3 : 0 0 ~ 1 4 : 3 0	自由研究発表 I (自由研究発表 1 ~ 3)	B 棟 1 階・2 階
1 4 : 4 0 ~ 1 5 : 2 5	総会・学会賞表彰式 ※ 会員の方のみの参加となります	別棟 001 教室
1 5 : 3 0 ~ 1 5 : 4 0	開会式	別棟 001 教室
1 5 : 4 0 ~ 1 7 : 4 0	大会校企画シンポジウム アフターコロナに向けた高大接続教育	別棟 001 教室
1 8 : 0 0 ~	情報交換会	B 棟 4 階学食

※賛助会員出展：A 棟 1 階エントランス

### 9 月 6 日 (火)

9 : 0 0 ~	受付開始	A 棟 1 階エントランス
1 0 : 0 0 ~ 1 2 : 0 0	企画セッション II (WS④~⑥・RT②)	B 棟 1 階・2 階
1 2 : 0 0 ~ 1 3 : 0 0	昼休み	
1 3 : 0 0 ~ 1 5 : 0 0	課題研究シンポジウム ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育	別棟 001 教室
1 5 : 1 5 ~ 1 7 : 1 5	自由研究発表 II (自由研究発表 4 ~ 5)	B 棟 1 階
1 7 : 2 0 ~ 1 7 : 3 0	閉会式	B 棟 1 階 112 教室

※賛助会員出展：A 棟 1 階エントランス

# 大会参加のご案内

## 1. 大会の実施について

- (a) 第15回大会は、可能な限り、感染症対策を講じて対面での開催を目指して準備を進めております。
- (b) なお、さまざまな事情によりご来場が叶わない方には、Zoomによるオンラインでの参加が可能なように準備を進めております。詳細は、大会プラットフォームをご覧ください。
- (c) 事前申込の際にお支払いいただいた大会参加費については、当日ご参加いただけなかった場合でも返金しませんので、悪しからずご諒承下さい。
- (d) なお、大会参加費をお支払いいただいた方には、当日の参加の如何を問わず、大会校シンポジウムと課題研究シンポジウムの動画を、大会終了後に配信いたします。
- (e) その他、大会に関する最新情報は学会ホームページ上でご連絡いたしますので、最新の情報をご確認ください。
- (f) 大会への参加に際しましては、ご自身のご体調に十分ご注意くださいようお願いいたします。37.5度以上の発熱、体調不良等の際には、大会への参加をお控えくださいますようお願い致します。なお、受付時に検温を致しますので、ご了解ください。

## 2. 参加費（いずれも1人当たり）

	事前申込	当日申込
(a) 大会参加費		
会 員（個人・機関・賛助）	4,000 円	5,000 円
会 員（在学中の方）	2,000 円	3,000 円
非会員	5,000 円	5,000 円
非会員（在学中の方）	3,000 円	3,000 円

(b) 弁当代（事前申込のみ） 1日当たり 1,000 円（飲み物代を含む）

### (c) 事前申込みのお願い

8月17日（水）までに大会ホームページから申込みいただいた上で、参加費等をお振込みください。それ以降については、当日受付での登録・お支払いとなります。

※ 会場の円滑な運営と受付の混雑回避のため、できるだけ事前申込にご協力くださいますよう、お願い致します。

※ 在学中の方は、受付において学生証をご提示ください。

※ 情報交換会は、大会初日の18時から、A棟4階の学食で開催いたしますが、飲食の提供はございません。

### (d) 注意

機関会員は5名までが申し込み可能な人数です。6名以上で参加を希望される場合は、予め5名分の参加について事前申込をした上で、参加費をお振込みください。残りの参加者については、非会員枠での参加申込となりますことをご確認ください。

3. 学会年会費 大会会場では納入できません。持参されても領収書の発行は致しかねますのでご注意ください。

4. 名札 会場内では常に名札をご着用ください。

なお、名札ケースは、大会終了後にお持ち帰りください。

5. 休憩コーナー 大会開催中、B棟2階の221～223教室を休憩室として開放しております

- す。随時、ご利用ください。
6. クローク A棟1階のエントランスに開設いたします。受付にてご確認ください。
  7. Wifi 接続 無料wifiスポット「TENFREE」をご利用ください
  8. 昼食について 会場周辺には食堂・レストランなどはございません。会場内にセブンイレブンがございますが、購入できる数に限りがございますので、できるだけ大会HPからお弁当の事前申込をしていただいたほうが安心かと思えます。営業はしておりませんが、サブ会場（B棟）4階の食堂を開放いたしますのでそこで昼食をお召し上がりください。
  9. 喫煙について 喫煙所をご利用ください(場所はスタッフまでお声掛けください)。
  10. 駐車場 参加者が利用可能な駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。
  11. 会場での写真撮影について 発表風景などの記録としての撮影にとどめ、SNSへの掲載等、外部への公開はお控えください。また、報告中にシャッター音を鳴らさない等、撮影マナーにご協力ください（報告者が要望された場合は撮影をご遠慮ください）。なお、学会・大会校としての記録作成のために担当者が会場風景などの撮影をおこないますので、予めご了承ください。
  12. コピーサービス セブンイレブンの有料コピー機をご利用ください。
  13. 発表用PCの接続について 本大会は原則として対面で開催いたしますが、オンラインでも同時配信する可能性があるため、発表時には大会校で設置したPCを使っていただくことになります。プレゼンテーション用のデータはUSBメモリに入れてお持ちくださいますようお願いいたします。
  14. 会場について 教室等は変更になることがありますので、ご承知おきください。

# 大会概要

9月5日(月)

時間帯		A棟	別棟	B棟				C棟			
		1階		001教室 (600席)	1階		2階	221～223教室	3階	4階	231教室
		エントランス	111教室 (90席)		112教室 (120席)	113教室 (110席)	211教室 (120席)		ラウンジ 教育サポート室	学食	
09:00～	受付	受付 クローク 展示						会員用 控室	大会校 実行委員会 控室	編集 委員会 控室	理事 控室
10:00～12:00	企画セッションⅠ		WS① 「協働実践力の育成をめ ざした初年次からの教育 指導」 (企画者:安永悟)	WS② 「2030年代の初年次教育 を構想する」(企画者:成 田秀夫)	WS③ 「入学前教育をデザイン する」 (企画者:森朋子)	ラウンドテーブル① 「コロナ禍における初年次 教育の試みと失敗、そし てその再構築(第2報)」 (企画者:藤本元啓)					
12:00～13:00	昼休み										
13:00～14:30	自由研究発表Ⅰ			自由研究発表1 学士課程教育① (座長:藤本元啓)	自由研究発表2 入学前教育 (座長:藤波潔)	自由研究発表3 学生支援・ピアサポート (座長:清水栄子)					
14:40～15:25	総会 学会賞表彰式		総会 学会賞表彰式								
15:30～15:40	開会式		開会式								
15:40～17:40	大会校企画 シンポジウム		大会校企画 シンポジウム								
18:00～	情報交換会						情報交換会				

9月6日(火)

時間帯		A棟	別棟	B棟				C棟			
		1階		001教室 (600席)	1階		2階	221～223教室	3階	4階	231教室
		エントランス	111教室 (90席)		112教室 (120席)	113教室 (110席)	211教室 (120席)		ラウンジ 教育サポート室	学食	
09:00～	受付	受付 クローク 展示						会員用 控室	大会校 実行委員会 控室	編集 委員会 控室	理事 控室
10:00～12:00	企画セッションⅡ		WS④ 「演劇的手法とコミュニ ケーションデザインによる 初年次教育の授業設計」 (企画者:蓮行)	WS⑤ 「初年次×オンライン× キャンパス」 (企画者:田中岳)	WS⑥ 「モデル授業公開討論会 (1)」 (企画者:藤田哲也)	ラウンドテーブル② 「「双方向型の授業」を問 い直す」 (企画者:垣花渉)					
12:00～13:00	昼休み										
13:00～15:00	課題研究 シンポジウム		課題研究 シンポジウム								
15:15～17:15	自由研究発表Ⅱ			自由研究発表4 学習意欲・学習成果 (座長:藤田哲也)	自由研究発表5 学士課程教育② (座長:西村秀雄)						
17:20～17:30	閉会式			閉会式							

## 会場へのアクセス

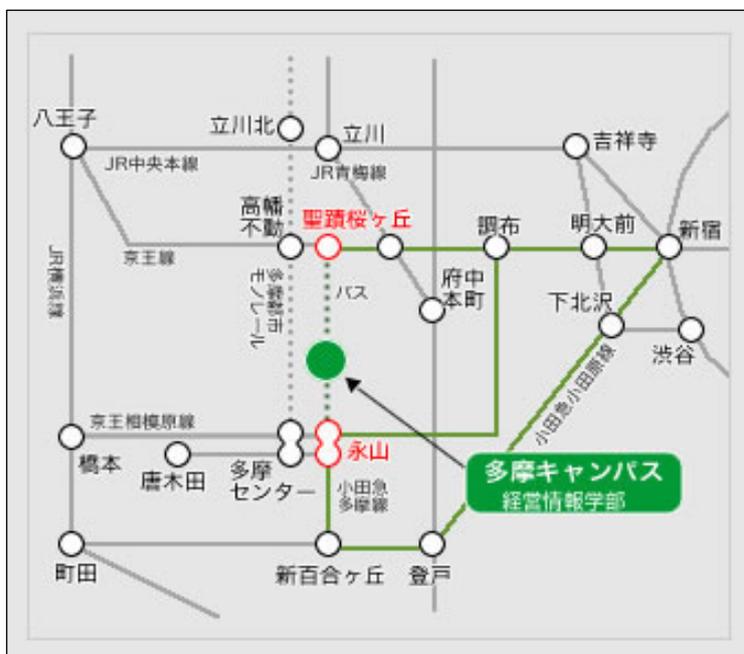
1. 会場：多摩大学 〒206-0022 東京都多摩市聖ヶ丘 4-1-1

2. アクセス方法

最寄りの路線・駅



Web版はQRコード  
もしくは[こちら](#)から



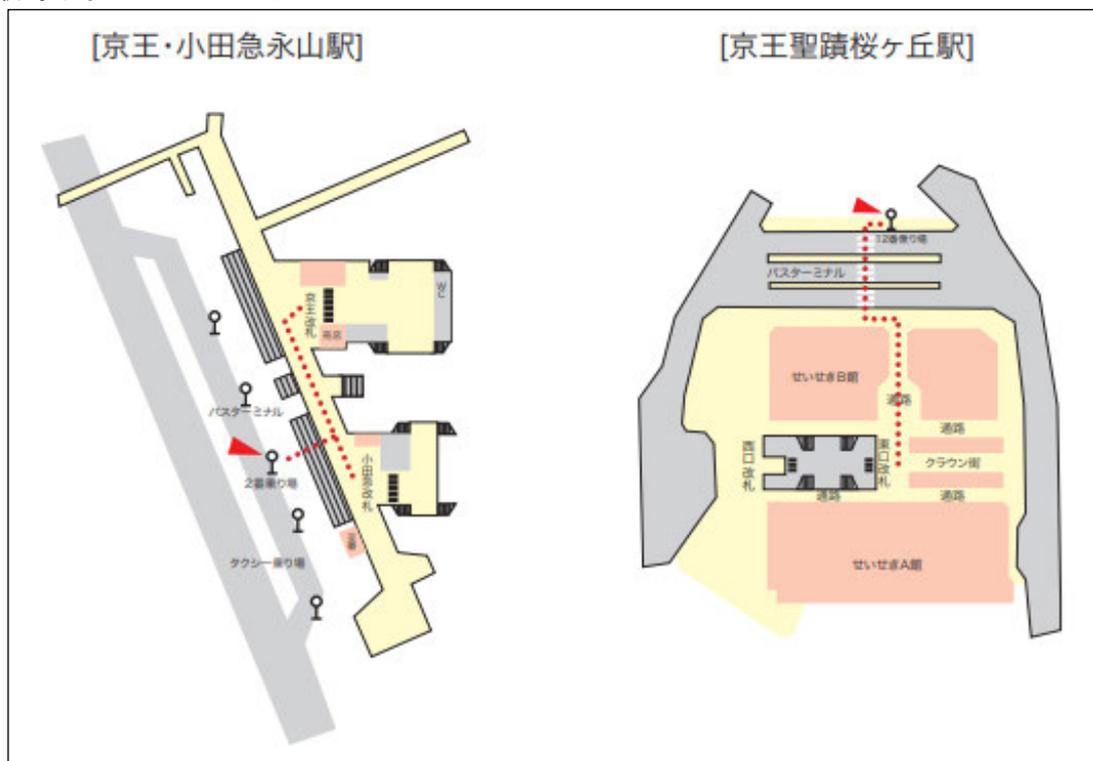
◎京王線

- ・新宿→聖蹟桜ヶ丘  
【特急】25分
- ・新宿→永山  
【特急・急行】26分

◎小田急線

- ・町田→永山  
【急行】17分
- ・表参道→永山  
【多摩急行・東京メトロ  
千代田線直通】36分

最寄り駅からのアクセス



◎小田急線・京王線永山駅バス乗り場2番「系統永34 聖ヶ丘団地行」  
「系統桜06 聖蹟桜ヶ丘駅行」(10分)、「多摩大学」下車

◎京王線聖蹟桜ヶ丘駅バス乗り場12番「系統桜06 永山駅行」(12分)  
「多摩大学」下車。

## バス時刻表(行き・最寄り駅から多摩大学)

### 【小田急線・京王線永山駅 → 多摩大学】

永山駅		根06 永34	
時	平日	土曜	日曜・祝日
05			
06	16 25 32 <sup>※</sup> 39 46 <sup>※</sup> 53	45 <sup>※</sup> 57 <sup>※</sup>	45 <sup>※</sup> 57 <sup>※</sup>
07	00 <sup>※</sup> 07 14 <sup>※</sup> 21 28 <sup>※</sup> 35 42 <sup>※</sup> 49 56 <sup>※</sup>	10 <sup>※</sup> 25 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup> 55 <sup>※</sup>	10 <sup>※</sup> 25 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup> 55 <sup>※</sup>
08	03 10 <sup>※</sup> 17 <sup>※</sup> 24 <sup>※</sup> 31 38 <sup>※</sup> 52 <sup>※</sup>	05 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 29 <sup>※</sup> 49 <sup>※</sup>	05 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 29 <sup>※</sup> 49 <sup>※</sup>
09	10 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 50 <sup>※</sup>	09 <sup>※</sup> 29 <sup>※</sup> 49 <sup>※</sup>	09 <sup>※</sup> 29 <sup>※</sup> 49 <sup>※</sup>
10	10 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 50 <sup>※</sup>	09 <sup>※</sup> 29 <sup>※</sup> 49 <sup>※</sup>	09 <sup>※</sup> 29 <sup>※</sup> 49 <sup>※</sup>
11	10 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 50 <sup>※</sup>	09 <sup>※</sup> 29 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup>	09 <sup>※</sup> 29 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup>
12	10 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 50 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup>
13	10 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 50 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup>
14	10 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 50 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup>
15	10 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 50 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup>
16	10 <sup>※</sup> 30 <sup>※</sup> 40 <sup>※</sup> 50 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 12 <sup>※</sup> 24 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 48 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 12 <sup>※</sup> 24 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 48 <sup>※</sup>
17	00 <sup>※</sup> 10 <sup>※</sup> 21 <sup>※</sup> 32 <sup>※</sup> 42 <sup>※</sup> 52 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 12 <sup>※</sup> 24 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 48 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 12 <sup>※</sup> 24 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 48 <sup>※</sup>
18	05 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 25 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup> 55 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 12 <sup>※</sup> 24 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 48 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 12 <sup>※</sup> 24 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 48 <sup>※</sup>
19	05 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 25 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup> 55 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 12 <sup>※</sup> 24 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 48 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 12 <sup>※</sup> 24 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 48 <sup>※</sup>
20	05 <sup>※</sup> 15 <sup>※</sup> 25 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 45 <sup>※</sup> 55 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 12 <sup>※</sup> 24 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 48 <sup>※</sup> 58 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 12 <sup>※</sup> 24 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 48 <sup>※</sup> 58 <sup>※</sup>
21	02 12 <sup>※</sup> 22 32 <sup>※</sup> 44 54 <sup>※</sup>	08 18 <sup>※</sup> 28 41 <sup>※</sup> 48 58 <sup>※</sup>	08 18 <sup>※</sup> 28 41 <sup>※</sup> 48 58 <sup>※</sup>
22	04 16 <sup>※</sup> 25 34 <sup>※</sup> 44 55	08 18 28 38	08 18 28 38
23	20 39		
00			
01			
02			

黒色 : 聖ヶ丘団地行 永34  
 赤色(板) : 聖蹟桜ヶ丘駅行(聖ヶ丘団地経由) 根06  
 (赤字) : 深夜バス  
 2022年7月16日 現在

### 【京王線聖蹟桜ヶ丘駅 → 多摩大学】

聖蹟桜ヶ丘駅		根06 根07	
時	平日	土曜	日曜・祝日
05			
06	18 46	50	50
07	00 14 28 42 56	02 14 26 38 50	02 14 26 38 50
08	10 24 38 52	02 14 26 40 52	02 14 26 40 52
09	06 20 34 52	12 32 52	12 32 52
10	12 32 52	12 32 52	12 32 52
11	12 32 52	12 23 <sup>※</sup> 32 52	12 23 <sup>※</sup> 32 52
12	05 <sup>※</sup> 12 32 52	10 25 40 55	10 25 40 55
13	12 32 52	10 25 40 55	10 25 40 55
14	12 32 52	10 25 40 55	10 25 40 55
15	12 32 52	12 27 42 57	12 27 42 57
16	12 32 42 52	12 27 42 54	12 27 42 54
17	04 15 25 35 45 55	06 18 30 42 54	06 18 30 42 54
18	05 15 25 35 45 55	06 18 30 42 54	06 18 30 42 54
19	05 15 25 35 45 55	06 18 30 42 54	06 18 30 42 54
20	05 15 25 35 45 55	06 18 30 42 54	06 18 30 42 54
21	15 35 55	05 25 45	05 25 45
22	15 35 56	05 25 45	05 25 45
23	08		
00			
01			
02			

黒色 : 永山駅行(聖ヶ丘団地経由) 根06  
 青色(連) : 永山駅行(蓮光寺経由) 根07  
 2022年7月16日 現在

バス時刻表(帰り・多摩大学から最寄り駅)

【多摩大学 → 小田急線・京王線永山駅】

多摩大学		桜06 永34		
時	平日	土曜	日曜・祝日	
05				
06	00 08 15 19 26 33 40 47 54	28 39 49	28 39 49	
07	01 08 15 22 29 36 43 50 57	05 17 29 41 53	05 17 29 41 53	
08	04 11 19 26 40 47 54	05 17 29 41 55	05 17 29 41 55	
09	08 22 36 50	07 27 47	07 27 47	
10	08 28 48	07 27 47	07 27 47	
11	08 28 48	07 27 47	07 27 47	
12	08 28 48	07 25 40 55	07 25 40 55	
13	08 28 48	10 26 41 56	10 26 41 56	
14	08 28 48	11 26 41 56	11 26 41 56	
15	08 28 48 52	11 28 43 58	11 28 43 58	
16	08 28 48 58	13 28 43 58	13 28 43 58	
17	08 20 31 41 51	10 22 34 46 59	10 22 34 46 59	
18	01 11 21 31 41 51	11 23 35 45 57	11 23 35 45 57	
19	01 11 20 30 40 50	09 21 33 45 57	09 21 33 45 57	
20	00 10 20 30 40 50	09 21 33 45 57	09 21 33 45 57	
21	00 10 20 30 40 50	09 20 30 40 50	09 20 30 40 50	
22	00 10 20 30 50 59	00 10 20 40	00 10 20 40	
23	11 23	00	00	
00				
01				
02				

黒色 : 桜06、永34  
2022年7月16日 現在

【多摩大学 → 京王線聖蹟桜ヶ丘駅】

多摩大学		桜06 永34		
時	平日	土曜	日曜・祝日	
05				
06	25 34 43 <sup>※</sup> 48 57 <sup>※</sup>	56 <sup>※</sup>	56 <sup>※</sup>	
07	02 11 16 25 <sup>※</sup> 30 39 <sup>※</sup> 44 53 <sup>※</sup> 58	08 <sup>※</sup> 21 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 46 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	08 <sup>※</sup> 21 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 46 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	
08	07 <sup>※</sup> 12 21 <sup>※</sup> 28 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 40 49 <sup>※</sup>	06 <sup>※</sup> 16 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 40 <sup>※</sup>	06 <sup>※</sup> 16 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 40 <sup>※</sup>	
09	03 <sup>※</sup> 21 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 20 <sup>※</sup> 40 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 20 <sup>※</sup> 40 <sup>※</sup>	
10	01 <sup>※</sup> 21 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 20 <sup>※</sup> 40 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 20 <sup>※</sup> 40 <sup>※</sup>	
11	01 <sup>※</sup> 21 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 20 <sup>※</sup> 40 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	00 <sup>※</sup> 20 <sup>※</sup> 40 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	
12	01 <sup>※</sup> 21 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	
13	01 <sup>※</sup> 21 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	
14	01 <sup>※</sup> 21 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	
15	01 <sup>※</sup> 21 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	
16	01 <sup>※</sup> 21 <sup>※</sup> 41 <sup>※</sup> 51 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 23 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 47 <sup>※</sup> 59 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 23 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 47 <sup>※</sup> 59 <sup>※</sup>	
17	01 <sup>※</sup> 11 <sup>※</sup> 21 <sup>※</sup> 32 <sup>※</sup> 43 <sup>※</sup> 53 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 23 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 47 <sup>※</sup> 59 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 23 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 47 <sup>※</sup> 59 <sup>※</sup>	
18	03 <sup>※</sup> 16 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 46 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 23 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 47 <sup>※</sup> 59 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 23 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 47 <sup>※</sup> 59 <sup>※</sup>	
19	06 <sup>※</sup> 16 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 36 <sup>※</sup> 46 <sup>※</sup> 56 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 23 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 47 <sup>※</sup> 59 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 23 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 47 <sup>※</sup> 59 <sup>※</sup>	
20	06 <sup>※</sup> 16 <sup>※</sup> 26 <sup>※</sup> 34 46 <sup>※</sup> 54	11 <sup>※</sup> 23 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 47 <sup>※</sup> 59 <sup>※</sup>	11 <sup>※</sup> 23 <sup>※</sup> 35 <sup>※</sup> 47 <sup>※</sup> 59 <sup>※</sup>	
21	06 <sup>※</sup> 11 23 <sup>※</sup> 31 43 <sup>※</sup> 53	09 <sup>※</sup> 17 29 <sup>※</sup> 37 52 <sup>※</sup> 57	09 <sup>※</sup> 17 29 <sup>※</sup> 37 52 <sup>※</sup> 57	
22	05 <sup>※</sup> 13 27 <sup>※</sup> 34 45 <sup>※</sup> 53	09 <sup>※</sup> 17 27 37 47	09 <sup>※</sup> 17 27 37 47	
23	04 [29] [48]			
00				
01				
02				

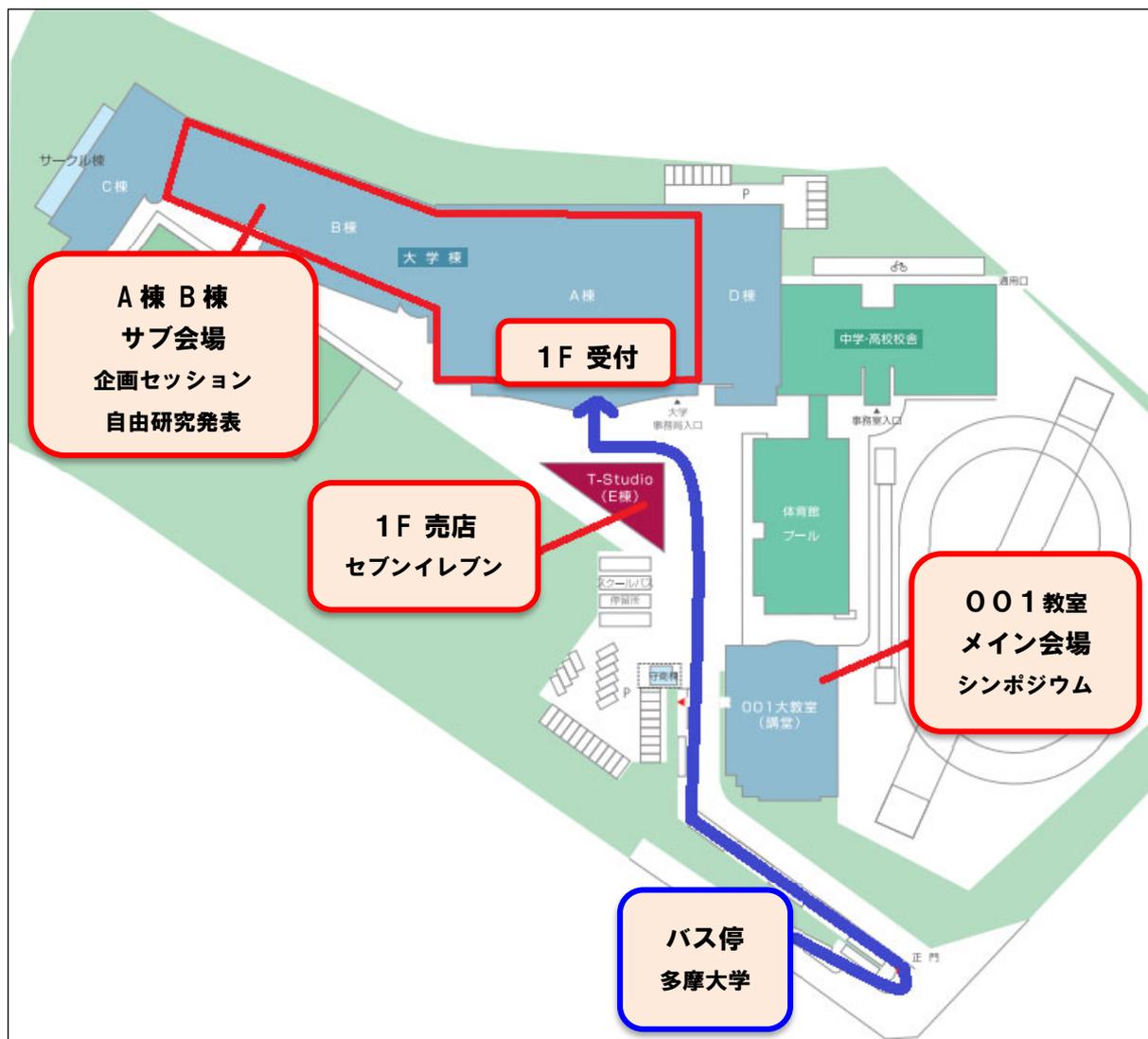
黒色 : 聖ヶ丘団地行 永34  
赤色(※) : 聖蹟桜ヶ丘駅行(聖ヶ丘団地経由) 桜06  
[赤字] : 深夜バス  
2022年7月16日 現在

# 会場案内図

## 1. 全体案内図

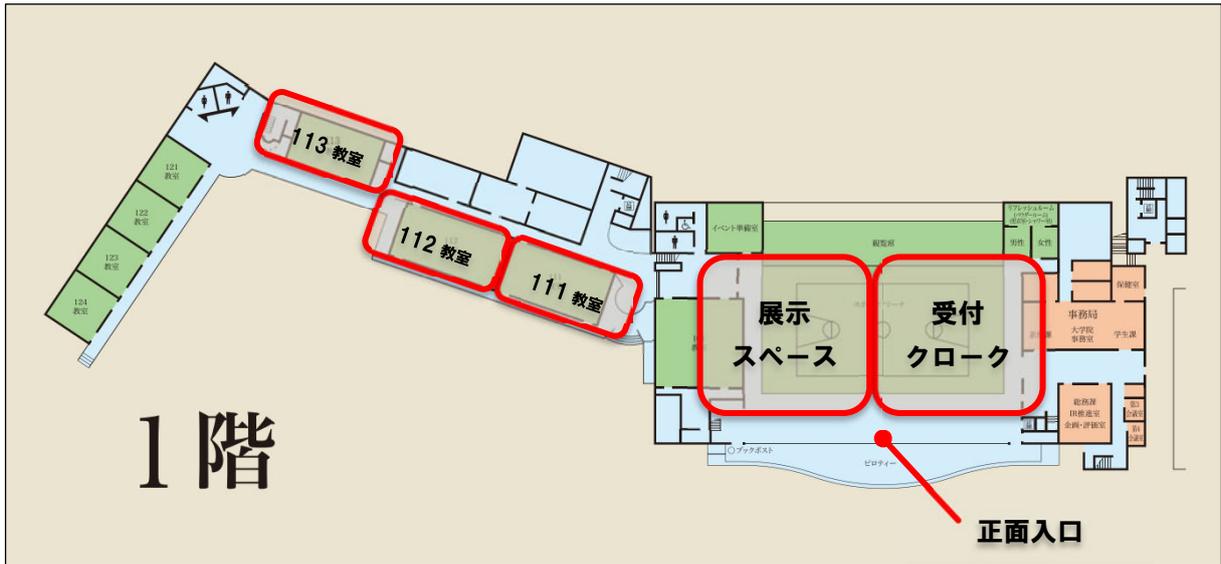
- ・バス停「多摩大学」下車後、スロープを登り、守衛室、白い建物の「T-Studio」の前を通過して正面の建物までお進みください。
- ・正面の建物は「A棟」です。1階入り口を入れてすぐに、受付がごさいます。

## 【キャンパスマップ】



## 2. A棟 B棟会場案内図

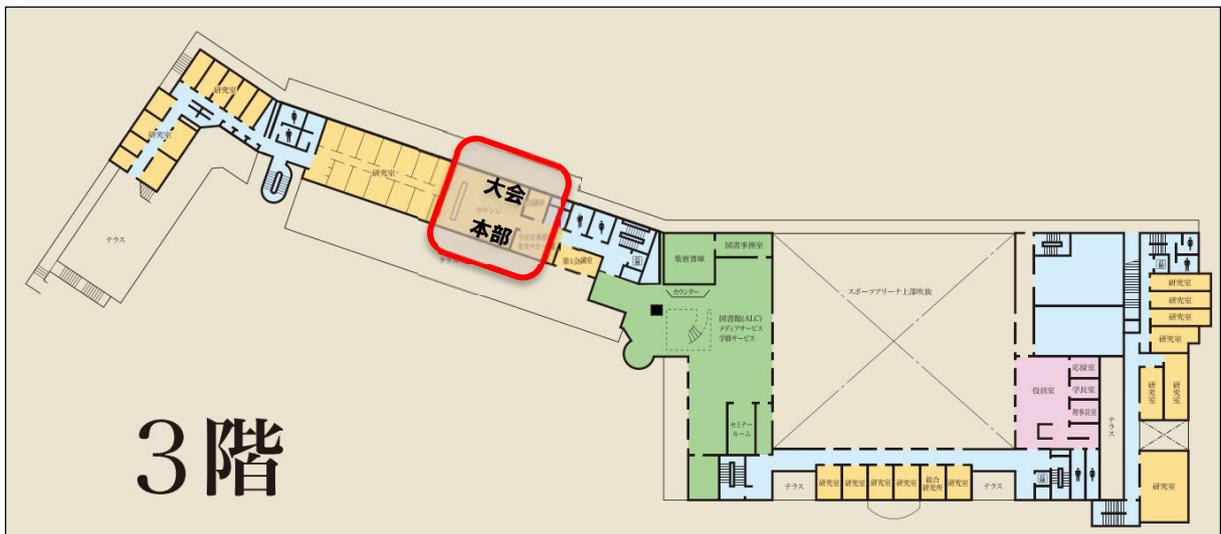
### 【1階】



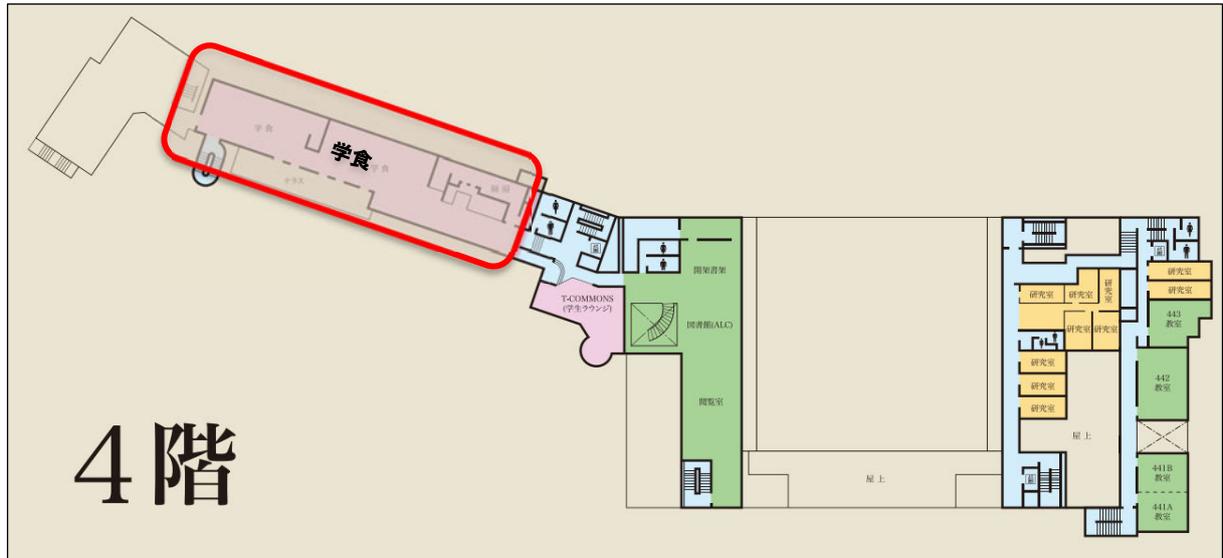
### 【2階】



### 【3階】



【4階】



4階

---

# 大会校企画シンポジウム

## アフターコロナに向けた高大接続教育 ～持続可能なプログラム形成に向けて～

---

【日 時】 2022年9月5日（月）15:40～17:40

【会 場】 多摩大学多摩キャンパス

【タイム・スケジュール】

### ○事例報告・総括討論

15:40～15:50 大会校挨拶

15:50～16:10 趣旨説明

16:10～16:30 報告1「湘南工科大学附属高等学校技術コース  
～高大一貫7年教育を目指す取り組み～」

木枝 暢夫 氏（湘南工科大学）

16:30～16:50 報告2「高大接続は大学教育改革から

～探究・社会に開かれた学び・カリキュラムマネジメントを見据えて～」

大森 昭生 氏（共愛学園前橋国際大学）

16:50～17:10 報告3「探究は、教員が楽しむことからはじめよう

～A知探Qの夏から、多摩聖独自の探究カリキュラムまで～」

出岡 由宇 氏（多摩大学聖ヶ丘中学高等学校）

17:10～17:40 総括討論

### 【司 会】

総合司会： 加藤 みずき（多摩大学）

趣旨説明・総括討論進行： 小西 英行（多摩大学）

## 【趣旨説明】

# アフターコロナに向けた高大接続教育 ～持続可能なプログラム形成に向けて～

小西 英行（多摩大学）

今回の大会校企画シンポジウムは、多摩大学（高大接続AL研究会）との共催として実施します。多摩大学の高大接続AL研究会は、2017年より、附属系列の多摩大学目黒中学高等学校・多摩大学聖ヶ丘中学高等学校と連携し、無理なく・無駄なく・持続可能なプログラムの開発・実施を行ってきました。基本方針としては、新しく特別なものとして始めるのではなく、大学や高校で既に実施されているプログラムに、相互にただ乗りすることから始め、その後、大学や高校でそれぞれ新たに計画される教育プログラムの開発段階で、相互に協力しながらそれを進めるといいうもの。具体的には、第一段階として大学のプログラムに中学高等学校生が参加することから始め、第二段階として中学高等学校のプログラムに大学生が参加し連携を深めました。その後、第三段階として現在は、高校の新たな探究プログラムの開発に大学が、大学の新しい教育プログラムに高校が参加を予定しています。この連携のプロセスを中心に、多摩大学聖ヶ丘中学高等学校の出岡出宇先生に、事例報告頂きます。

一方で、こうした大学と附属系列の中学高等学校などでの連携で先進的な事例として、湘南工科大学学長の木枝暢夫先生に、事例報告頂きます。湘南工科大学では、附属高等学校からの入学が1桁であったものが、現在では100人を超えるといいます。具体的には、高大7年一貫教育を謳ったプログラムの開発や、そのプロセスから、貴重なお話をお伺いできるものと承知しております。

また、地域の公立私立の高等学校との高大接続プログラムを多数実施している先進事例として、共愛学園前橋国際大学学長の大森昭生先生にご報告頂きます。大森先生からは、地元の高校から相次いで高大接続の打診を受けている状況に対し、大学での教育改革の必要性について、貴重なお話をお伺いできるものと承知しております。

さらに、こうした高大接続プログラムが、コロナ禍においてどのように継続実施してきたのか、事例報告を通して学び、アフターコロナに向けた持続可能な高大接続プログラムについて検討したいと思います。

## 【プロフィール】

小西 英行（こにし ひでゆき）氏

多摩大学経営情報学部教授・教務委員長。秋田経済法科大学経済学部専任講師、富山国際大学現代社会学部準教授を経て、現職。専門分野はマーケティングで、特にeビジネスや電子マネーなどを研究。2020年度からのコロナ禍において、オンライン授業への移行や、その後の対面授業の再開などを、教務委員長として計画・実施している。

## 湘南工科大学附属高等学校技術コース

### ～高大一貫7年教育を目指す取り組み～

木枝 暢夫（湘南工科大学）

湘南工科大学附属高等学校は、入学定員480名と神奈川県では3番目に生徒数が多く、附属中学校を持たない私立高校である。従来からの進学コースと体育コースに加えて、2015年度に湘南工科大学への進学を前提とし、高大一貫7年教育を謳った技術コースが新たに設置された。この講演では技術コース設置の背景から実際の運営、大学側の関わりとそこで得られた成果などを紹介し、今後の高大接続の進め方を考える際の参考にしていただければと考えている。

技術コースは、当初定員80名で3クラス編成を想定して始まった。カリキュラムは普通科としての編成であるが、学校設定科目として高大連携科目である「工科大学講座」が2年生に4単位、3年生に8単位、全部で12単位含まれている。これまで実際におこなわれてきた高大連携活動の概要を以下に示す。

- ・1年生：大学図書館とICTルーム利用講習。大学6学科1回ずつの体験講座（※総合学習の時間を利用して実施）。
  - ・2年生：毎週金曜日午前中1～4時限に、各学科4回ずつの体験講座および大学施設見学などの全体プログラム。
  - ・3年生：毎週木曜日1～6時限に、進学予定の学科に分かれて様々な講座。加えて、毎週金曜日の5～6時限にグループワークとプレゼンテーションの講座。2月に最終発表会。
- コンセプトとしては、1年生は技術コースでの学びのイメージづくり、2年生で進学する学科を決め、3年生で大学進学後の学修に向けた基礎づくり、となっている。

技術コース設置の背景となった大学側の1つの課題は、大学入学者の専門分野の学修に対する関心や意欲の低下であった。2018年に大学に入学した最初の技術コース出身者は、入学時の学力レベルをプレースメントテストで測ると推薦入試やAO入試入学者と同程度かやや低く、一般入試入学者とはかなりの差があった。しかしながら、大学の授業への適応が早く様々なオプションに積極的に取り組むなど期待を裏切らない様子が見られ、2022年3月の卒業時には他の学生と比べて優れた進路決定状況となった。一方で、高校の教科の学習に技術コースならではの特色を出すことや、連携講座の内容や大学入学後の対応をより高大一貫にふさわしいものにする等、未だ十分にできていないことも多い。これらを改善するため、2022年度から高校のカリキュラムが変更されており、大学側でも対応を進めている。

#### 【プロフィール】

木枝 暢夫（きえだ のぶお）氏

湘南工科大学学長、工学部人間環境学科教授。東京工業大学工学部助手、湘南工科大学工学部助教授、教務部長、工学部長を経て、2022年4月より現職。専門分野は無機材料工学、機器分析学。著書：「セラミック技術」日本セラミックス協会編（2014年）、「福祉ものづくり物語」田坂さつき編、ひみつの出版（2022年）など。

## 高大接続は大学教育改革から

### ～探究・社会に開かれた学び・カリキュラムマネジメントを見据えて～

大森 昭生（共愛学園前橋国際大学）

私たち大学は、2012年の質転換答申以来、アクティブラーニング、グローバル教育、社会連携教育等々、学びの在り方を大きく転換し、予測困難な時代に生きる学生たちの資質能力の向上に注力してきました。そして、2018年のグランドデザイン答申においては、学修者本位の学びへの転換と学びの質保証の重要性が述べられ、教学マネジメント指針も策定されました。すなわち、大学教育改革のトレンドは、質転換から質保証へと推移してきたといえるでしょう。

一方、高等学校では新学習指導要領のもと、探究、アクティブラーニング、社会に開かれた教育課程、何ができるようになるかを踏まえたカリキュラムマネジメントが動き出しており、いわば、これまで大学が取り組んできたことが、一気に押し寄せてきている状況にあります。大学教育改革の動きは、そのまま高校教育改革に接続しているともいえるでしょう。

このように考えると、高大接続の学びを展開するためには、まず、大学自身の教育改革がなされている必要がありはしないでしょうか。そのことにより、高校の半歩先を行く先輩としての信頼を得られ、また高校が直面する教育課題から生まれるニーズに応えることができるのではないかと思います。

もちろん、地域には多様な高校があり、そこには多様なニーズがあります。さらに、高校生の進路も多様です。ゆえに、接続の在り方も一様ではありませんし、「高大接続は学生募集にあらず」という原則も押さえておかなければいけないでしょう。

本事例報告では、共愛学園前橋国際大学の教育改革が、どのように高校生との学びに結びついていくのかを柱に、これまで実施してきた様々な高大接続の取組を報告します。特に、ある公立高校で展開している高校の授業を大学が担当するという試みや別の公立高校で展開している社会に開かれたキャリア教育プログラムへの本学の関わり、いくつかの高校における成果の可視化へのチャレンジへのアドバイザーとしての関わりなどを中心にお話させていただく予定です。

#### 【プロフィール】

大森 昭生（おおもり あきお）氏

共愛学園前橋国際大学・同短期大学部学長。1996年に共愛学園女子短期大学に講師として着任。共愛学園前橋国際大学国際社会学部長、副学長等を経て、2016年より現職（短大部学長は2021年より兼務）。専門はアメリカ文学で特にヘミングウェイを研究。中央教育審議会教育振興基本計画部会、同大学分科会等文科省、内閣官房等の各種委員の他、群馬県青少年健全育成審議会会長、前橋市デジタル田園都市アーキテクト統括等地域における各種公的委員を多数務める。群馬県総合表彰（男女共同参画社分野）。全国の学長が注目する学長ランキング1位（大学ランキング2023）

## 探究は、教員が楽しむことからはじめよう

### ～A知探Qの夏から、多摩聖独自の探究カリキュラムまで～

出岡 由宇（多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校）

本校は1学年120名で編成される都内でも最小規模の共学中高一貫校で、平成元年の多摩大学開校以来、附属校として大学と連携しながら教育活動を行っている。

2018年度より探究型夏期講座「A知探Qの夏」を開始。今年で5回目の開講となる。これは従来の教科学習指導型の夏期講座に疑問を感じた教員たちが中心となり、学校全体で1年間の議論と対話を続け実現したものである。コンセプトは「大人(教員)が教えて本当に楽しいことをやる」とし、初年度はほぼ全専任開講の32講座が出そろった。趣味の釣りや角度を絡めて教えた数学科の教員、甘科学的に美味しいプリンのレシピを考え、実際に調理した甘党の理科教員。宿泊を伴う講座も3講座実施された。生徒の受講を促すため、各講座のCMも教員自ら作成した。今思えば若手からベテランまで、全員が楽しみながら夏の講座を過ごしたことが、多摩聖の探究のスタートであったと言える。

生徒の学習効果という点では未だ検証中ではあるが、多くの高校が課題とする「教職員が新たなことに挑戦するマインドの共有」という点において、丁寧な対話と全員で楽しむという方向づけによりクリアしたと言える。これは非常に大きなことであると感じる。

その結果2022年度はこのA知探Qの夏のスキームを活かし、都内でも稀な時間割を編成。隙間を作った水曜午後に高校1年生以外の生徒を全て帰宅させての「探究ゼミ」が開始されている。このゼミでは外部教材に依存せず、本校の立地、生徒の特色、教員の資質を加味した独自教材を作成。探究での学びのすべては、学校のある『多摩市』に行動として還元するカリキュラムとなっている。また、多摩大学から学生・教授陣も参加してもらい、高大接続的な学びの場としても機能している。

探究を紐解こうとした時に、私のような弱卒には理解しきれないような難しい言葉や理念が並ぶ。もちろんこの理解は重要であるが、果たして本質はそこにあるのだろうか。どうあっても学校教育はそこにいる教職員と生徒の向き合いから始まるはずである。であれば、学ぶことを楽しんでいる教職員があふれる環境づくりこそが一番重要なのではないか。本日はお時間頂いてここに至るまでのプロセスや、多摩聖の探究カリキュラムを簡単に紹介させて頂こうと思う。

#### 【プロフィール】

出岡 由宇（いずおか ゆう）氏

多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校教諭。教科は国語。2004年に本校を卒業。大学進学後、TV番組製作幹事会社に就職。アニメや子供向け生放送番組のプロデューサーを歴任後、2015年に教員として母校に戻る。2018年に学校に新しい価値創造をするため教育企画部を新設。3年間部長職を務めた後、本年度より探究初年度学年の高校1年学年主任をしている。

---

## 課題研究活動委員会企画シンポジウム ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育

---

【日 時】 2022年9月6日(火) 13:00~15:00

【会 場】 多摩大学多摩キャンパス

【タイム・スケジュール】

13:00~13:05 趣旨説明

13:05~13:25 話題提供1 ウィズコロナ・ポストコロナにおける全学共通初年次教育科目  
—「まなぶる▶ときわびと」について—

光成研一郎・伴仲謙欣・高松邦彦・中田康夫(神戸常盤大学)

13:25~13:45 話題提供2 看護学生を能動的な学習へ導く探究学習の実践研究

垣花 渉(石川県立看護大学)

13:45~14:05 話題提供3 キャリア教育型の入学前教育「桐蔭プレアド」への参加が入学  
前後の学生の学びと成長に与える影響

溝口 侑(桐蔭横浜大学)

14:05~14:20 指定討論

14:20~15:00 総括討論

司会： 山田剛史(関西大学)

コメンテーター： 濱名 篤(関西国際大学)・山田礼子(同志社大学)

## 課題研究委員会企画シンポジウム

### 「ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育」

2019年以來、新型コロナウイルス感染症（以下 COVID-19）が世界中で拡大してきたが、2022年春以降学校・高等教育も従来のオンライン授業一辺倒から対面授業へと戻りつつあることを契機に、私たちはコロナ以前の日常生活を取り戻しつつある。とはいえ、高等教育機関へのこの未曾有のコロナパンデミックの影響は甚大かつ計り知れない。2021年度大学生協調査においては、コロナ禍における大学生が不安を抱えている状況、とりわけコロナ世代の2年生の25%が人間関係に悩んでいるといった回答がみられるなど、大学関係者が注視していくべきことは多いと思われる。

従来、初年次教育は、高校から大学への円滑な移行を支援するための教育として、学業面での移行のみならず、新入生の自己肯定感を向上させ、大学というコミュニティへの帰属意識を持たせることで、人間関係を円滑化することをも目的とし、実際に寄与してきた。それゆえ、初年次教育がほとんどの高等教育機関において、普及し、プログラムとして構築されてきた理由でもあった。しかし、COVID-19の拡大による状況において、従来対面型でこうした機能を充実させ、貢献してきた初年次教育が、果たしてオンラインが中心となる状況において、どれだけこうした機能を果たし、新入生を導いているかについての研究やグッドプラクティスの蓄積もほとんどみられない。また、オンラインテクノロジーやDXの発達によりこうした初年次教育の機能をどれだけ果たしているかというデータも提示されていない。

現在のウィズコロナの状況において、いかに新入生の自己肯定感を支え、心理的安定に寄与し、将来への確実なプランを立てるなどの内容を展開している初年次教育は、今後の新入生が充実した大学生活を送るうえでの鍵となるのではないかと考えられる。

そこで研究としての蓄積にもなるような内容を深めていくことを目的として、課題研究委員会は、テーマ「ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育」を設定し、サブテーマとして、

(1) 自己効力感、自己肯定感、心理的安全性、帰属意識（所属感）、(2) DX・オンラインとリアルな体験、グループワーク、(3) キャリアプラン、ライフキャリア、(4) 入学前教育 (5) 教育過程や学修成果の分析や評価の方法という5つを立てた。そのうえで、課題研究委員会として、2年間にわたってこのテーマを扱い、初めての試みとして会員から公募を行うことにした。学会としてこの課題に取り組むことにより、グッドプラクティスだけでなく、課題研究の深化へつなげ、同時に今後の学会活動を担っていく人材の発掘に貢献することも目的としている。課題研究委員会による応募者の書類審査と面接審査、発表内容をベースにした打ち合わせを経て、次の3名が登壇する。

光成 研一郎（神戸常盤大学）、垣花 渉（石川県立看護大学）、溝口 侑（桐蔭横浜大学）  
当日の司会は山田剛史委員、指定討論者は濱名篤委員、山田礼子委員の二人が行う。

課題研究委員会委員 山田礼子（同志社大学）

## ウィズコロナ・ポストコロナにおける全学共通初年次教育科目

### 「まなぶる▶ときわびと」について

光成研一郎・伴仲謙欣・高松邦彦・中田康夫（神戸常盤大学）

神戸常盤大学は、保健科学部と教育学部 2 学部 5 学科からなる専門職養成に特化した大学である。本学は、全学共通初年次教育科目として、【まなぶる▶ときわびと I・II】を開講している。

「まなぶる▶ときわびと I」（1 年次担当：前期 60 時間 30 コマ、以下【I】）と「まなぶる▶ときわびと II」（1 年次担当：後期 30 時間 15 コマ、以下【II】）のシリーズ開講である。本科目は、学部・学科（5 学科）を超えた混成チームによる協働型学修法を採用し、運営についても、学科の枠を超えた教員（少数の職員）が協働で行う。約 30 名の教職員がペアとなり、5 学科約 400 名の学生を担当する。授業デザインは、〔開講直後からの十分な時間をかけたチームビルディング〕〔各授業単元（テーマ）〕〔ふりかえり・分かち合い〕〔事前事後学修〕等で構成される。これにより、授業内容の定着と、「チーム医療」「チーム学校」の実践者養成を目指す観点からチームビルディングの促進を目指している。

【I】では、協働学修によるコミュニケーション力の向上と、大学生としてのリテラシーの核となる論理性を重視し、【ロジカルコミュニケーション】を主要テーマに据えている。ロジカルに思考するためには、情報を正しく受け入れ、自らの考えを説得性（根拠）をもって、共有・発信する力が求められるからである。

続く【II】においては、それぞれの（大学生としての）学びのスタイルの確立のために、数理的教材の活用による【計画的学修】と【学生相互による教え合い】を主要テーマとする。これは、【I】で学んだ内容の実践場に位置づけられる。

上記の授業内容について、2020 年度からはコロナ禍により従来の対面授業に加え、一部のコンテンツをオンデマンドの遠隔授業にせざるを得なかったが、それでもなお大学共通の授業評価は上昇し、なおかつ科目独自の授業評価もコロナ前に比べてよい結果が示された。

本発表では、本学におけるブレンド型初年次教育の授業内容と本科目に対する授業評価の結果を示しつつ、ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育のありかたについて報告する。

#### 【プロフィール】

光成研一郎（みつなりけんいちろう）氏

神戸常盤大学教育学部こども教育学科教授。京都大学学際融合教育研究センター地域連携教育研究推進ユニット特任教授。専門は教育学。担当科目は、「教育原理」・「教育方法技術論」など。著書『教育のアイデア』（昭和堂）、『教職をめざす人のための教育用語・法規改訂新版』（ミネルヴァ書房）など。防災教育学会理事、初年次教育学会会員、日本教育学会会員など。

## 看護学生を能動的な学習へ導く探究学習の実践研究

垣花 渉（石川県立看護大学）

看護系大学の特徴の一つに、当面のゴールが明確（国家資格の取得）を挙げることができます。そのために、カリキュラムの選択肢は必然的に少なくなります。そのなかで、大学独自の DP を達成するため、初年次教育の位置づけにはそれなりの相違工夫を要します。

石川県立看護大学では、これまで初年次教育の目標を「高校までの受動的な学習から、能動的で自立的・自律的な学習態度への転換」に据え、既存の授業科目の有機的な結びつき（以後、科目間連携）による探究学習の推進へ取り組んできました。ところが、コロナ禍で突如導入された遠隔授業への対応を余儀なくされたために、科目間連携は急速に弱まり、初年次教育の目標達成は困難な状況に陥りました。

このような中、「授業の双方向性が学生の能動的な学習態度を育む」ことを改めて認識しました。そして、対面または遠隔の授業形態にかかわらず、教師—学生間、または学生同士のより良いコミュニケーションを構築するように工夫しました。発表者の授業において学生のふり返りを質的に分析したとき、学生の授業へ臨む姿勢は、「不安または期待」から「協同への前向きな意識」へ変化しました。学生のこのような変化は、特殊の自己効力感や協同認識に関する量的データにも反映されました。今後の課題は、探究学習を継続的かつ複合的に展開するための科目間連携を再構築することです。

そのことが、看護系高等教育の達成すべき本当のゴールへ学生を導くことになるものと考えています。

### 【プロフィール】

垣花 渉（かきはなわたる）氏

石川県立看護大学看護学部教授。2001 年早稲田大学大学院人間科学研究科後期博士課程修了。博士（人間科学）。早稲田大学助手、国立身障者リハビリテーションセンター流動研究員、石川県立看護大学准教授を経て、2020 年 4 月より現職。専門は体力科学、応用健康科学。共書『看護職としての社会人基礎力の育て方 第 2 版』（日本看護協会出版会）。日本体力医学会評議委員、初年次教育学会理事。

## キャリア教育型の入学前教育「桐蔭プレアド」への参加が 入学前後の学生の学びと成長に与える影響

溝口 侑（桐蔭横浜大学）

桐蔭横浜大学では、総合型選抜及び学校推薦型選抜での合格者のうち、希望者を対象に全学共通の入学前教育を実施している。2022年度入学生からは、初年次の必修科目であるキャリア教育科目の先取りプログラムとなり、修了すれば入学後にその単位を認定することになる。全7回のプログラムは、前半5回はハイフレックス型、後半2回は全員対面で開催することで、地方からの参加者やコロナの状況にも配慮をしている。教育研究開発機構が中心となり、若手職員や有志の学生のピア・サポーターとともにプログラムを運営している。

本プログラムは、高校までの学びや経験をふりかえって自分や身近な社会について理解することを通して、ライフキャリアを明確にすることを目的としている。それによって入学前から大学で学ぶ目的を明確にし、入学後の学習を動機づけること目指している。またプログラムを通して、学部を超えた仲間と出会うことも重要な狙いである。

プログラムの第一の目的は、キャリア教育ではあるが、入学前教育に参加することは桐蔭横浜大学が目指す学びの形に適應するうえでの重要な意味がある。そこで本報告では、単なるキャリア意識の醸成に対する効果に留まらず、次の3点から入学前教育の効果について検討することを目的とする。

- 1) 入学までの学ぶ意欲とキャリア意識にどのような影響を与えるのか
- 2) 参加していない学生と入学時点で差があるのか
- 3) 1年間の成長に影響を与えるのか

本発表では、本プログラムの具体的な内容と入学後の初年次教育科目への連携を示すとともに、2021年度の試行実施時の効果検証の結果も含めた入学前教育の効果について報告する。

### 【プロフィール】

溝口 侑（みぞぐちゆう）氏

桐蔭横浜大学教育研究開発機・IR推進室特任講師。2021 京都大学大学院教育学研究科研究指導認定退学。修士（教育学）。専門は青年心理学。日本青年心理学会会員、大学教育学会会員、初年次教育学会会員、日本教育工学会会員など。

## 企画セッションⅠ 9月5日(月) 10:00~12:00

ワークショップ (WS①~WS③)				
	担当者	所属	題目	会場
WS①	安永 悟	久留米大学	協同実践力の育成をめざした初年次からの教育指導—LTD 授業モデルを中心に—	B棟 1階 111 教室
WS②	成田秀夫 山本啓一 吉村充功 菊地滋夫 垣花 渉	山梨学院大学 北陸大学 日本文理大学 明星大学 石川県立看護大学	2030年の初年次教育を構想する～初年次教育の再定義を通じて	B棟 1階 112 教室
WS③	森 朋子 溝口 侑 常浦光希 岡田航平	桐蔭横浜大学 桐蔭横浜大学 環太平洋大学 京都大学大学院	入学前教育をデザインする—ライフキャリア型初年次教育との接続の観点から—	B棟 1階 113 教室

ラウンドテーブル (RT1)				
	担当者	所属	題目	会場
RT1	藤本元啓 大嶋康裕 藤波 潔 東 俊之	崇城大学 崇城大学 沖縄国際大学 長野県立大学	コロナ禍における初年次教育の試みと失敗, そしてその再構築 (第2報)	B棟 2階 211 教室

## 企画セッションⅡ 9月6日(火) 10:00~12:00

ワークショップ (WS④~WS⑥)				
	担当者	所属	題目	会場
WS④	蓮 行	京都大学経営管理 大学院	演劇的手法とコミュニケーションデザインによる初年次教育の授業設計	B棟1階 111教室
WS⑤	田中 岳 立石慎治 宮浦 崇 大嶋康裕	岡山大学 筑波大学 九州工業大学 崇城大学	初年次教育×オンライン×キャンパス	B棟1階 112教室
WS⑥	藤田哲也 井上晴菜	法政大学 法政大学大学院	モデル授業公開検討会(1):初回イントロダクション	B棟1階 113教室

ラウンドテーブル (RT2)				
	担当者	所属	題目	会場
RT2	垣花 涉 西村秀雄 大嶋康裕 渡邊淳子	石川県立看護大学 金沢工業大学 崇城大学 熊本保健科学大学	「双方向型の授業」を問い直す ーコロナ禍での遠隔授業の経験を きっかけとしてー	B棟2階 211教室

# ワークショップ (WS) と ラウンドテーブル (RT) について

## 1. ワークショップ (120 分)

初年次教育に関連する重要なテーマを初年次教育学会理事会が設定し、それに合った担当者を理事会から依頼して成立するセッションです。個人ワークやグループ・ディスカッション、グループ別プレゼンテーションなどの活動から構成されるこのセッションへの参加によって、参加者の初年次教育に対する知識や実践的スキルを向上させることを目的としています。言い換えれば、各テーマに対する初学者を主たる対象としていますので、自らの「知識・スキルの向上」を期待したいテーマのワークショップを選ぶことをお勧めします。

## 2. ラウンドテーブル (120 分)

ワークショップとは異なり、会員が企画するセッションです。申込者が設定したテーマについてまず自ら話題を提供した後、参加者全員が円卓（ラウンドテーブル）を囲み、報告者とオーディエンスといった区別なく、テーマに沿って自由に意見を交換する場であり、このセッションを通じて参加者間の相互作用によって有意義な結論を導き出そうとするものです。

自由研究発表 I 9月5日(月) 13:00~14:30

自由研究発表① 学士課程教育①			座長：藤本元啓 会場：112 教室
登壇者	所属	発表題目	
長谷川隼人 中島 紀子	大正大学	統合型教養教育とチュートリアル教育による課題解決型授業の設計－協働的な学習をベースとする「地域戦略人材」の育成の模索－	
絹川 直良	文京学院大学	リーダーシップ教育4年間の歩み	
和田 重雄 齋藤 博 田端 健治 西尾 信一 福嶋 仁一 安田 高明	日本薬科大学	基礎学力および学修意欲の向上を目指す科目内自由選択型講義の実践－薬学部での形成的評価を活用した理系科目統合型基礎教育科目－	

自由研究発表② 入学前教育			座長：藤波 潔 会場：113 教室
登壇者	所属	発表題目	
黄 若白 野崎 雅子	東京工業大学	学士課程新入生入学時ガイダンスに期待される役割－マインド醸成のためのガイダンス実践から－	
溝口 侑 森 朋子	桐蔭横浜大学	入学前教育への参加動機が取り組み態度を媒介して成長実感に与える影響	
川崎 弘也	株式会社ラーニングバリュー	オンラインチームビルディングプログラムを入学前教育に活用する－実践内容とその成果の報告－	

自由研究発表③ 学生支援・ピアサポート			座長：清水栄子 会場：211 教室
登壇者	所属	発表題目	
伊東 幸子	東京工業大学	初年次教育と学生支援－学生支援の枠組みで出来ること－	
竹内はるか 近藤 裕子 佐藤 壮広 佐野 正子	山梨学院大学	山梨学院大学ライティング・サポートデスクの取り組み－SA、サポーターの学びの場づくりの現状と課題－	
関 智子	玉川大学	短時間の初年次交流プログラムを担当する上級生のグループ体験とリード体験とは－上級生の大学適応への効果－	

自由研究発表Ⅱ 9月6日(火) 15:15~17:15

自由研究発表④ 学習意欲・学習成果			座長：藤田哲也	会場：112 教室
登壇者	所属	発表題目		
福留 誠 日置 和人	神戸学院大学	薬学生の成績とジェネリック・スキルの関係についての検討ー 専門科目 GPA と GPS-Academicー		
井上 晴菜 藤田 哲也	法政大学大学院 法政大学	能動的先延ばしと班活動等の授業外学習に対する受け止め方 との関連ーリーダーシップ行動・達成目標志向との関連を含め た検討ー		
小西 英行	多摩大学	ポストコロナの授業評価に関する考察ーオンライン授業と対 面授業の授業比較からー		
村瀬 博昭	奈良県立大学	初年次教育で実践するプロジェクト活動の学習効果ーグルー プワークで期待される学びと成長の差異ー		

自由研究発表⑤ 学士課程教育②			座長：西村秀雄	会場：113 教室
登壇者	所属	発表題目		
		本発表は発表要件を満たさなかったため削除されました		
近藤 裕子 佐藤 壮広 竹内はるか 佐野 正子	山梨学院大学	初年次生を対象とした「言語技術」教育の取り組みー生きるた めのスキル習得を目指してー		
寺島 哲平	常盤大学	初年次教育科目で文系学生を対象に行った統計学の実践報告		
高松 邦彦 伴仲 謙欣 光成研一郎 中田 康夫	神戸常盤大学／ 東京工業大学  神戸常盤大学	初年次教育をデジタルトランスフォーメーション (DX) の視 点で捉え直すー教育の質保証のためのリフレクションー		

## ワークショップ (WS①～WS⑤)

WS①	協同実践力の育成をめざした初年次からの教育指導 - LTD 授業モデルを中心に-
担当者	安永 悟 (久留米大学)
概要	<p>主体的・対話的で深い学びができる積極的なアクティブラーナー (ALer) を育てるには、質の高い AL 型授業が求められます。本 WS では協同教育の理論と技法を基盤とする LTD 授業モデルに沿った授業づくりの一部を体験的に理解し、質の高い AL 型授業の実現に向けた授業づくりと実践方法を、参加者全員で吟味します。その際、ALer に求められる一連のコンピテンシーを「協同実践力」として仮定し、協同実践力の育成をめざした初年次からの教育指導のあり方を手がかりとして議論を深めます。</p> <p>具体的には、協同実践力と LTD 授業モデルを説明した後、LTD 授業モデルに沿った授業づくりを紹介します。実践例として、医学生や看護学生や心理学生を対象とした初年次教育科目や専門科目への適応例、さらには臨地実習に関する事例などを取り上げる予定です。そこには Web による遠隔授業も含まれています。</p> <p>体験的理解を重視する本 WS では、4 人グループを中心に活動し、傾聴・ミラーリング、ラウンドロビンなど、協同学習の基礎基本を体験できます。また特派員、ジグソー学習法、LTD 話し合い学習法などについても概要を理解できます。</p>
キーワード	協同学習, LTD 授業モデル, LTD 話し合い学習法, 協同実践力, Web 授業

WS②	2030 年の初年次教育を構想する～初年次教育の再定義を通じて
担当者	成田秀夫 (山梨学院大学)・山本啓一 (北陸大学)・吉村充功 (日本文理大学)・菊地滋夫 (明星大学)・垣花渉 (石川県立看護大学)
概要	<p>現在の大学教育においてはアフター・コロナを見すえつつ、Society5.0 時代に向けた転換が迫られている。その影響は初年次教育にも及んでおり、令和 2 年 1 月 22 日に公表された「教学マネジメント指針」を踏まえると、今後の初年次教育は大学のカリキュラム全体と有機的に連動して再構築することが求められている。</p> <p>昨年度のワークショップにおいて明らかになったのは、本学会が設立された 2008 年から現在の初年次教育が大きく変貌を遂げたことである。初年次教育が学士課程教育全体から見て位置づけられる一方で、高大接続も進み、初年次教育のアップデートが求められている。さらには、2030 年を見すえると DX 推進等の多くの課題も明らかになった。</p> <p>そこで本年度は、初年次教育の「来し方・行く末」を俯瞰するために、①2008 年の初年次教育、②初年次教育の現在地、③2030 年の初年次教育、④初年次教育の通時的変化(俯瞰)という 4 つのテーマを設定し、それぞれのテーマについての企画者の報告を踏まえつつ、参加者が自由にテーマを行き来しながら自由にディスカッションする場を設けたい。初年次教育の出発点を再度確認することで、2030 年を見すえた初年次教育を見通していきたい。</p>
キーワード	共通教育と専門教育, 教学マネジメント, アフター・コロナ, 自律的学修者, 高大接続

WS③	入学前教育をデザインするーライフキャリア型初年次教育との接続の観点からー
担当者	森 朋子（桐蔭横浜大学）・溝口侑（桐蔭横浜大学）・常浦光希（環太平洋大学、非会員）・岡田航平（京都大学大学院）
概要	<p>本ワークショップでは、初年次教育に接続する入学前教育の役割とその成果について検討を行う。前半は、これまで展開されている各種入学前教育に関して、一定の整理を行った上で、大学の学びへの動機づけに効果があるとされているライフキャリア型初年次教育へ接続するプログラムに焦点を絞る。その上で、入学前教育単体ではなく、初年次教育への接続するプログラムとして得られる効果について、参加者とともに共通認識を構築する。具体的には、学習理論、学士課程教育としてのカリキュラム論、そして非学力選抜入試に絡む高大接続の観点から多面的に検討を行うことを予定している。そして実際に展開している桐蔭横浜大学、環太平洋大学の 2 大学の事例について担当者からそれぞれ報告（溝口、常浦、岡田）する。その際、各種アセスメントの結果についても共有することで、エビデンスベースの報告を試み、その上で効果について全体での議論を行っていく。</p> <p>後半では実際にライフキャリア型初年次教育に接続する入学前教育のデザインを企画者らが用意したワークシートに沿って参加者がデザインすることをチャレンジする。そしてその意図や考え方について全員で意見交換を行い、改めて初年次教育に接続する入学前教育の効果について参加者全員で新しいイメージを構築していきたい。</p>
キーワード	入学前教育、ライフキャリア型初年次教育、学士課程教育、アセスメント

WS④	演劇的手法とコミュニケーションデザインによる初年次教育の授業設計
担当者	蓮 行（京都大学経営管理大学院）
概要	<p>本ワークショップは、「演劇的手法」を用いた授業設計について、コミュニケーションデザインの解説を踏まえて体験的に理解してもらおうことを目指す。担当者（蓮行）が実際に大学で実施している演劇ワークショップを模擬授業的に体験してもらい、その後、参加者の皆様とワークショップデザインや初年次教育への応用可能性について意見交換する。</p> <p>コミュニケーションの良し悪しは、個人の属人的な能力だけでなく、その場のルール、参加者の関係性、部屋の広さ・設備といったハード等、様々な環境の要素に影響される。「コミュニケーションデザイン」とは、コミュニケーションをより良い状態に近づけるために、多種多様な要素を広い視野で捉えて、環境をデザインしようとする考え方である。</p> <p>演劇は、人と人との関わりやそこに発生する感情の揺れ動きを作品として立ち上げて観客に伝えてきた芸術であり、コミュニケーションに関わるシミュレーションと理論を積み重ねてきた。また、演劇の作品創作プロセス自体にも、演出家、劇作家、俳優等、多様な役割のスタッフの集合知生成が含まれる。すなわち、演劇ジャンルに蓄積された知見は、アクティブ・ラーニングの授業デザインにとって非常に有効である。</p> <p>担当者（蓮行）は 10 年以上にわたり、演劇的手法を活用したワークショップの企画・実践に取り組み、大学教育においても活用してきた実績がある。本ワークショップで担当者の授業を体験いただくことで、参加者の皆様と共に新たな集合知を立ち上げたい。</p>
キーワード	演劇的手法、ロールプレイ、表現活動、アクティブ・ラーニング、コミュニケーションデザイン

WS⑤	初年次教育×オンライン×キャンパス
担当者	田中 岳 (岡山大学)・立石慎治 (筑波大学)・宮浦 崇 (九州工業大学)・大嶋康裕 (崇城大学, ICT 技術協力)
概要	<p>大学等の様相を一変させたコロナ禍の影響が静まらないまま、新しい様式の模索をスタートさせていることが窺えます。コロナ禍での生活スタイルを理解できてきたのかもしれませんが。授業、入試、正課外活動など、地域による差はあったものの、オンラインを中心としたリモート化や、延期、代替措置など 2020 年以降の緊急避難的な措置が、いつの間にか新たな習慣となり、コロナ禍以前の風景に戻すことの対応に苦慮する大学等の状況も散見されるようになりました。これまでにない高等教育へと前向きな変化が進んだのはコロナ禍の困難による、という見方もありましたが実際にはどうでしょう。</p> <p>本ワークショップでは、これまでを振り返り、それらを踏まえて、これからの初年次教育について参加者の皆さんと考えてみたいと思います。「2 年程度のハビトゥスがコロナ禍以前を忘れさせている」「前向きな変化といっても、実は質向上の検討が薄い」「否、DX はじめ進歩的な未来へと進む」といった紋切り型でもなく、この時期だからこそ考えられる初年次教育の先行きについて知恵を出し合ひましょう。</p> <p>〔目標〕ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、それぞれ課題解決への道筋を自身の言葉で語るができるようになる。〔役割〕担当者は参加者間の相互作用を活性化する進行に努めますので、御参加の皆さんには主体的な活動をお願いいたします。〔過程〕ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に参加者全員での共有までを計画しています。</p>
キーワード	コロナ禍, オンライン, キャンパス, ハビトゥス, DX

WS⑥	モデル授業公開検討会 (1) : 初回イントロダクション
担当者	藤田哲也 (法政大学)・井上 晴菜 (法政大学大学院)
概要	<p>本ワークショップでは、担当者(藤田)が実際に法政大学で行っている初年次教育科目である「基礎ゼミ」に基づき、もう一人の担当者(井上)が実際に模擬授業を行い、授業後に参加者と授業内容や授業運営上の工夫等について意見交換をする。各参加者が、自分自身の授業計画を見直したり、授業の進め方について工夫するための観点を豊富にすることが、本ワークショップの目的である。今回は、ワークショップの前半の時間を使って、年度初めの第一回目の授業を想定した「イントロダクション」を行う。後半では、どのようにすれば受講生に対して初年次教育科目の教育目標を適切に伝えることができ、授業に参加することの重要性を実感してもらえるかについて、理論と実践の双方から議論を行う予定である。参加者の皆様には、前半は受講生の視点を持って授業を受けていただきたい。授業の冒頭のアクティビティが極めて重要であるため、本ワークショップにはできるだけ遅刻をせずに参加していただければと願っている。後半の議論においては、授業をよりよくするための論点をいくつか提示し、全参加者で意見交換をしたい。その後、参加者からの自由な質疑応答も行う予定である。</p>
キーワード	初年次教育モデル授業, 授業検討会, 気づき, シラバス

## ラウンドテーブル (RT1)

### コロナ禍における初年次教育の試みと失敗, そしてその再構築 (第2報)

【企画者】藤本元啓 (崇城大学)

【司会者】大嶋康裕 (崇城大学)

【話題提供者】藤本元啓 (崇城大学)

藤波潔 (沖縄国際大学)

東俊之 (長野県立大学)

#### 1. 話題提供① 藤本元啓「with コロナ, Post コロナでの初年次教育のあり方」

昨年度のラウンドテーブルにおいて、コロナ禍における初年次学生への支援や教育手法などで、思うような成果が上がらなかったこと、失敗した事例を話題提供とし、その原因の共有と経験が2021年度に生かされているのかどうか、参加者と語りあった。

以下に整理すると、①90分の対面授業未経験での遠隔授業の受講、②大学と学生双方の通信設備・環境の不備、ICT操作活用の不慣れ、③学生同士でのチョットした会話、教え合い、学び合いの喪失、④教員とのコミュニケーション不足、⑤自発的な学修に向けた動機づけの難しさ、⑥「課題地獄」、⑦演習、実技、実験における理解度不足、などが挙げられた。なかには⑧教員の自助に完全に依存したため、非常勤講師が辞職間際まで追い詰められたケースも紹介された。つまり、初年次教育における遠隔授業の問題点が山積することが明らかになったのである。

これらの問題は「学生生活不適應・修学意欲低下」をもたらし、中退・休学者に占める割合が増加傾向にあるという報告もある(文部科学省「学生の修学状況(中退者・休学者)に関する調査:2021年12月末」)。そのため文部科学省は本年3月「対面による学生同士や学生と教職員の間の人的な交流」を重視し、「多様な人々の関わる授業や、少人数のグループワークによる質の高い学修など、相互に切磋琢磨することのできる環境を整備するこ

と」、つまりコロナ感染対策を徹底した上で、可能な限りの対面授業実施を要請した(「令和4年度の大学等における学修者本位の授業の実施と新型コロナウイルス感染症への対策の徹底等に係る留意事項について(周知)」)。そもそも初年次教育は対面授業によって効果が上がるものと考えているが、すべての問題が対面授業の復活で解決するわけでもなく、また2019年度以前の大学教育に戻れるわけでもない。

そこで本ラウンドテーブルでは、今後の初年次教育に関する以下の2項目について、組織的側面と担当者個人の側面から話題提供をおこない、参加者一同と意見・情報の交換を試みたい。

①2021年度後期～22年度前期の実態はどうだったのか。いまだに、昨年度までの問題・課題を引きずっているか、新たな問題が生じているか、あるいはどのように解決できたのか、また解決しようとしているのか。

②2022年度は対面授業に戻す大学が多くなか、どのような授業プログラムを実施しているのか。遠隔授業で効果を上げた手法を生かしているのか、あるいは遠隔での授業プログラム自体を放棄しているのか。

初年次教育に携わる参加者各位が、本ラウンドテーブルにおいて勤務先の現況を本音で披露し、そこから新たな知見と手法のヒントを得ることができればと考えている。

## ラウンドテーブル (RT1)

### 2. 話題提供② 藤波潔「沖縄国際大学社会文化学科のコロナ禍への対応」

報告者の勤務校が所在する沖縄県は、新型コロナウイルスの感染者数が全国的にも多く、非常事態宣言や蔓延防止等重点措置の適用期間も長期化している。こうした社会状況は、勤務校の教育活動の展開にも大きく影響してきた。そこで、本報告では、企画者の企画意図に則りながら、所属学科の状況について話題提供しつつ、今後の初年次教育のあり方について私見を述べたい。

#### ① 2020年度の課題認識

2020年度の授業は、原則として「特例授業」形式で実施され、担当教員からの申請に基づき「危機管理対策本部」が認めた科目（演習、実習等が中心）に限って、教室収容定員の50%未満であることを条件に对面授業が実施された（ただし、緊急事態宣言発令時等は危機管理本部の指示により全面的に「特例授業」となった）。

この結果、報告者の所属学科の初年次教育科目は、ゼミ科目が対面とリモートの併用、前期3科目、後期6科目存在している必修講義科目のほとんどが特例授業となった。

所属学科は「沖縄と人にこだわって学ぶ」ことを標榜し、異学年集団による多様な正課外活動を提供することで初年次生の大学生活と学びへの適応を進めてきたが、2020年度はこうした活動がまったくできなかった結果、初年次学生の適応についての問題が多く見られ、成績不良学生や休退学学生が例年よりも増加する結果となった。

#### ② 2021年度後期～2022年度前期の実態

2020年度の状況を踏まえ、勤務校では、2021年度の授業形態について「可能な限り多くの科目で对面授業の開講を模索」とし、可能な限り履修定員を教室収容定員の50%以下としたうえで、初年次教育科目や2年次配当科目等を優先して对面授業で実施する方針を示した。しかし、新型コロナウイルスの

感染拡大に伴い、学生・教員双方からの不安の声に押される形で「特例授業への転換を検討」するよう「依頼」が出された。

所属学科では、2020年度の課題認識を受けて、大学が全面的に特例授業への指示を出さない限りは、初年次教育科目については对面授業で実施することを方針とした。加えて、「異学年集団による多様な正課外活動」を再開すべく、コロナ禍でも実施可能なフィールドワーク活動を企画した。

しかし、勤務校はこうした学外での「正課対面活動」の実施について、危機管理対策本部への申請と許可を義務付けたため、所属学科の実施計画について許可が下りないという状況が続き、結果としてフィールドワークの実施期間がプログラムによって相当離れてしまい、フィールドワークの成果共有等が事実上できなくなるという結果となってしまった。

しかし、学内で実施する「正課対面活動」であれば危機管理対策本部の許可が不要という点を踏まえ、1月には初年次ゼミの時間を利用して、3年生が各ゼミを回りながら専門ゼミの周知をするなど、実施可能な方策を模索しながら異学年集団の関係性構築に取り組むなど、勤務校総体として対応できないことを学科としてどのように対応するのかを検討する雰囲気醸成された。

#### ③ 2022年度実施プログラム

勤務校は2022年度の講義形式を「对面授業を原則」として実施し、「特例授業」での実施は厳格な条件をつけて、危機管理対策本部の許可案件となった。しかし、新規感染者数が減少しない状況のなかで、徐々に「特例授業」への転換条件が緩和されてきている。

本稿を執筆している5月上旬現在で、所属学科の初年次教育科目はすべて对面授業として実施している。しかし、「正課対面活動」は年度初めから「原則禁止」であるものの、「教務部長が教学上必要と判断した場合には、(中略)活動を認めること」があると規定され、

## ラウンドテーブル (RT1)

その実施にとって大きな制約となっている。

### ④ 所属学科の初年次教育の今後

所属学科では、「高大接続改革」を契機として、従来の「入学前教育」と「新入生オリエンテーション」「MT (メンバーシップ・トレーニング: 新入生キャンプに相当)」から構成された「正課外教育」と初年次配当科目の「正課科目」によって構成していた初年次教育を見直し、「接続教育プログラム」として再構成した。これは、①学科での学びの内容を早期に理解できること、②学科での学びの方法に早期に慣れること、③学科の多様な構成員(同学年生、上級生、教員等)との関係を早期に構築すること、④学科学生としての将来像を描くことを到達目標として掲げ、入学直前期から約1年間かけて実施するものである。

このプログラムの開始がコロナ禍と重なったことから、当初計画の見直しを余儀なくされたこともあり、学科の初年次担当教員間では、その時々状況のなかで、上記の到達目標を実現するための方策を継続的に協議している。勤務校全体として発せざるを得ない規制、学生・教員の感染に対する不安感等の制約を前提として、初年次学生の大学生活と大学での学びへの円滑な移行・適応の実現のために必要なことを、対面と遠隔の二者択一に陥らずに不断に検討することが、現下の初年次教育にとって必要なことだと考える。

【学科接続教育プログラム】

ステージ	実施時期	実施内容	到達目標			
			1	2	3	4
第1段階	入学前期	入学前オリエンテーション	○	○	○	○
		入学前課題	○	○		
第2段階	入学時期	新入生オリエンテーション	○			○
第3段階	入学早期	初年次教育科目(FS)	○	○	○	○
		初年次教育科目(入門)	○	○		
		ミニ・フィールドワーク		○	○	
第4段階	入学後期	後期オリエンテーション	○			
		初年次教育科目(FS)	○	○	○	○
		初年次教育科目(概説)	○	○		
		インターンシップ報告会			○	○
		卒業生講話				○
		領域演習履修に関するオリエンテーション	○		○	○

### 3. 話題提供③ 東俊之「長野県立大学初年次科目『発信力ゼミ』でのコロナ禍対応」

筆者(東)は、長野県立大学(以下、本学)における初年次教育科目である「発信力ゼミ」を担当している。「発信力ゼミ」は、1クラスあたり16~20名程度で15クラスを編成している。全学部の1年生必修科目であるが、2018年度は通年科目で同一クラス、2019~2021年度は通年科目ではあるが前半と後半で別のクラスに再編して授業を実施した。前半クラスは主としてアカデミックスキルの涵養を行い、後半クラスは各担当教員の定めたテーマに基づく探求学習がメインである。

また、本学は2018年に開学し昨年度(2021年度)に完成年度を迎えた新設大学である。そのため、十分な教育基盤が整っていないまま、まさに「手探り状態」でコロナ禍の対応に追われることになった。

以下では、2020年度および2021年度の「発信力ゼミ」での実態と2022年度の活動を、一担当者の立場から報告したい。

#### (1) 2020年度の状況

2020年度は、前期(本学の場合4学期制を採用しているので、1・2学期)は全面オンライン、後期(3・4学期)は長野県の感染状況を踏まえて、一部の授業(少人数授業・演習・実習科目が中心)は対面で実施した。「発信力ゼミ」も前半クラスは全面オンライン、後半クラスは対面で実施したが、新型コロナウイルス陽性者が確認された際はオンラインでの授業実施を余儀なくされた。

2020年の対応を振り返ると、後手後手であったと考えている。まず1学期の開始延期が決定されたのが、2020年3月27日であった。その後、再度授業開始を延期した上で、5月13日に全面オンライン(主として「Zoom」での双方向型授業)で授業が開始された。「発信力ゼミ」もオンラインで実施することになったが、筆者の場合、これまで対面で用意していたコンテンツをそのままZoomで授業す

## ラウンドテーブル (RT1)

るに留まっていた。その結果、教員と学生、あるいは学生間のコミュニケーションは十分に取れてはいなかった。

後期(3・4学期)からは、「発信力ゼミ」は基本的に対面授業を行うことになった。ただし、課外活動は制限されたため、筆者も含めPBL型の授業デザインを行っていたクラスの多くがフィールドワーク等の活動ができず、授業内容を見直す必要があった。

なお担当クラスでは、前期がオンライン授業であったためか、後期のグループ活動(対面)に積極的に参加する学生が多かった。一方で、課題の多さや授業への集中力不足、対面への億劫さなどを述べる学生もいた。加えて、図書館を利用した経験がないなど学内施設を活用していない実態も発見された。

### (2) 2021年度前期の課題

2021年度前期は、前年度よりも対面の授業が増え、「発信力ゼミ」も基本的に対面による授業が実施された。ただし、英語科目および履修者数が多い科目がオンライン化されたため、実習等のないグローバルマネジメント学部では「発信力ゼミ」を含め週に1~2コマだけが対面授業という1年次生も多かった。

また2021年度に顕著であったのは、学生間のコミュニケーションに差が生まれていたことである。本学は1年次全寮制を実施しており、寮での学びも初年次教育の一翼を担っていると考えられる。しかし、感染症対策のために2021年度は約半数の入寮にとどめた。その結果、寮生同士では授業開始前に関係性が構築されたが、寮生以外の学生がそのネットワークに入りづらい状況となっていた。

初年次ゼミである「発信力ゼミ」で“仲間づくり”の場を提供すべきであったが、アカデミックスキルを指導するという前半クラスのプログラムがあったため、担当クラスでは十分な機会を提供できなかった。

### (3) 2021年度後期の取り組みと課題

2021年度になって露見した問題に対し、

後期になっても担当クラスでは残念ながら必要な策を講じることができなかった。2021年度後期の「発信力ゼミ」も同様に対面で実施したが、学生間のネットワークを一授業で構築することが難しかったというのが率直な感想である。

なお2021年度入学生では、休学者および退学者、また留年者が例年よりも多く発生した。それは、①教員によるサポート・指導の不十分さ、②オンライン授業による学習意欲の低下、③スチューデントスキル涵養の不徹底、が理由であると推察している。コロナ禍特有の事由もあるが、本学の制度上の制約や不備に起因する事由があることも留意したい。

### (4) 2022年度の取り組みと予定

2022年度からは、対面授業を主として実施するように大学の方針が変更された。また「発信力ゼミ」は、2022年度からのカリキュラムの改変に伴い、「発信力ゼミⅠ」(1・2学期)と「発信力ゼミⅡ」(3・4学期)に分け、別科目として実施している。特に「発信力ゼミⅠ」は以下の変更を行った。

まず、教授方法の見直しである。これまで各回の授業内容は統一し、教授案は共有していたが、教授方法の詳細は担当教員任せであった。2022年度からはオンライン授業で培ったノウハウを生かし、担当教員が一つの教室から配信し、それを各クラスの教室で視聴する方式に変更した。加えて、「仲間づくり」のために、早めのグループ活動を実施するように授業プログラムを変更した。例えばグループ単位でのキャンパスラリーを実施し、仲間づくりの場を提供している。

また、「発信力ゼミ」を取りまとめている教員の属人的な部分が大きかった授業内容や教授案を、セッションごとにチームを作り検討する形式に改めた。

なお「発信力ゼミⅡ」では、前年までと同様にクラスごとにテーマを掲げて、探究型の学修を行う予定である。

## 「双方向型の授業」を問い直す ーコロナ禍での遠隔授業の経験をきっかけとしてー

【企画者】垣花渉 (石川県立看護大学)

【司会者】西村秀雄 (金沢工業大学)

【話題提供者】垣花渉 (石川県立看護大学)

大嶋康裕 (崇城大学)

渡邊淳子 (熊本保健科学大学)

### 1. 問題提起

「双方向型の授業」という文言は、中央教育審議会答申「学士過程教育の構築に向けて」(2008年12月)の中で登場した。「双方向型の授業」は、従来の「知識伝達型の授業」に代わり、学生の主体的・能動的な学びを引き出す教授法として期待された。しかしながら、今もなお、日本の大学の大半は伝統的な「知識伝達型の授業」を展開している。

くしくも、コロナ禍で始まった遠隔授業化は、このような「知識伝達型の授業」を変える可能性を秘めているものと考えられる。たとえば、「教師は遠隔授業の経験をどう活かすか」(金子、2021)の調査では、「メールでの質問」、「毎回での授業で課題を出す」など学生の観点からも授業内容を検討する可能性を示す意見が多数を占めている。学生が授業へ参加する、あるいは授業へ関わるという環境を全国の大学が検討するなか、教師は学生の興味と参加をいかに引き出せるかが問われている。学生の興味と参加を引き出し、自発的・自律的な学習へ動機づけるためには、教師と学生との双方向的なコミュニケーションをはかることが不可欠となる。

本ラウンドテーブルでは、教師と学生の間で展開される「双方向型の授業」の持つ意義や課題を問い直したい。そのために、教師と学生が同じ場にいることが望ましい演習や実技の初年次科目を取り上げ、コロナ禍で「双方向型の授業」を試行錯誤した話題を提供する。

本ラウンドテーブルのゴールを、「教師と学生との双方向的なコミュニケーションは、いかに学生を動機づけるのか」という問いに対する答えの模索としたい。

### 2. 話題提供① 大嶋康裕「理数系科目での演習における学び合いの場の再構築」

著者は理工系学部主体の勤務先大学において、1・2年生対象の数学系科目を担当している。扱うテーマは1変数の微分積分、多変数の微分積分、もしくは微分方程式と科目により異なるが、1コマ90分の中で講義と演習、つまり教員からの知識伝達の時間帯と学生が問題演習に取り組む時間帯を組み合わせで実施していることは共通している。

解答者が特定の学生達に偏ることがないように、解答に応じて付与される点数の条件を年度によって調整し、問題の難度に応じて付与される点数の変更や複数人で一つの問題を解答することを認めるなどして、特に履修者数が50人を超えるクラスにおいては工夫を重ねてきた。

2020年度はコロナ禍に突入し、勤務先大学の方針で数学系科目は全て遠隔授業、オンデマンド方式による非同期での実施となった。この年度の取り組みの詳細は前年度のラウンドテーブル「コロナ禍におけるオンライン初年次教育の試みと失敗、そしてその再構築」にて報告しているが、従来の演習の方法を3種類の目的に応じた手段を用意することにし

## ラウンドテーブル (RT2)

た(図1 2020年度の手段)。非同期型となるため自動採点されるオンラインテストや共通の平易な問題回答を作成するレポート課題に切り替えたため、学び合いの要素を演習自体に含めることができなかった。

2021年度は勤務先大学と調整し数学系科目を全て対面授業に戻すことになったものの、従来実施してきた多数の学生が黒板前に集まり問題演習に取り組むという方法は三密を避ける点からも実施が困難と判断した。前年度に演習の目的に応じた手段を用意していたため、効果が良いものは残し、それ以外は対面授業の場に合わせて手段を再設計することとした(図1 2021年度の手段)。

演習の目的	2020年度の手段	2021年度の手段
学生自身の理解度確認	単元ごとに基礎的な問題についてオンラインテストの実施と自動採点結果の確認(効果有)	前年度と同じ
論理の飛躍のない解答の作成	LMS上に教員が用意した問題解説とノート解答との比較(効果不明)	演習問題を解答しLMS上に教員が用意した問題解説と比較
他者との理解の差異への気づき	過去の授業内演習の板書写真と自身のノート解答との比較(効果無)	上記解答の補足として他者視点でのコメントを指定用紙に記入し提出

図1 遠隔授業での演習の代替手段

黒板での演習の代替手段として、授業開始時に用紙を配布し指定された問題セットから学生が好きな1問を選び解答を作成したものに、「ふりかえり」の記載を加えさせ提出させることとした。「ふりかえり」については教員から指示をしておき、「黒板での板書解答後にクラス内へ自身が解説する場面を想定」した補足記入を行うこととしている。

問題セットは10問以上を含んでおり難度に応じて付与される点数が異なるため、学生達は周囲の学生と協力して相談しつつ自身の希望に合う問題を探る行動がそここで見られるようになった。

理想をいえば、この演習の解答について授業時間内に取り上げて解説を行いたいところ

であるが、鉛筆などの筆記用具で書かれた細い線をプロジェクター投影した際の視認性の悪さの課題もあり、2021年度は実現できなかった。2022年度は著者の科研採択課題の成果を利用して、即時性のあるフィードバックを実現する計画である。



図2 演習解答作成時に相談する学生ら(2022年度)

### 3. 話題提供③ 渡邊淳子『共に学ぶ経験者』の投入による双方向性授業の模索

熊本保健科学大学において筆者が担当する「アカデミックスキルⅡ」は、全学初年次生約360人を対象とした必修科目である。ライティングとプレゼンテーション指導の2つの柱からなる。初めて開講された2019年度以来、筆者は教員1人で大人数の学生と対する授業において、いかに双方向性を担保するかに腐心してきた。

同科目の最大の特徴は、授業内容を熟知した「学生指導員」「リーダー学生」と呼ばれる学生たちが受講学生の学修支援にあたる点である。授業そのものは、筆者が運営・指導にあたる「アカデミックスキル支援センター(ASSC)」が全面的に支援する形で成り立っており、「学生指導員」は学科、学年、科目を問わず日常的にライティングやプレゼンテーションを中心に学修支援にあたるセンターの一員である。一方、「リーダー学生」は事前に受講学生から希望者を募って養成した科目限定の支援要員である。指導員同様、先行して文献講読、文章作成(コラボラティブ・ライティング)とポスター作成に取り組み、その経験を一般受講生に還元する役目を負わせた。

## ラウンドテーブル (RT2)

2020年度の授業へ臨むにあたり、指導・介入の方向を担当教員から学生指導員、学生指導員からリーダー学生、学生指導員・リーダー学生から受講生と、上から下へ各階層の役割を明確にしたピラミッド型システムを考案した。これらは全て対面での授業や指導を想定し、底辺の受講学生からのさまざまな情報も、リーダー学生らを通し、教員にもたらされることを期待した。しかし、コロナ禍により授業や指導の形態を「遠隔」へと変更せざるを得なくなると、教員、学生を問わず不慣れた遠隔関連機器の操作や半強制的な隔離生活等への戸惑いも加わり、ピラミッド型システムそのものが機能しなくなってしまった。このため、教員と学生指導員やリーダー学生との心理的な距離が予想以上に離れてしまうという結果に終わった。

前年度の反省を踏まえて臨んだ 2021年度は、学生指導員3人、リーダー学生16人にセンタースタッフ3人を加えた陣容で、3クラス計64班のグループ指導に臨んだ。事前準備における前年度との大きな違いは、教員がリーダー学生養成も担うことで介入・指導の質の平準化を図った点である。開講後は、リーダー学生らの要請に応じて受講生のグループ討議にも遠隔で介入するなど、全ての階層に目配りし、逆にグループ作業の現場からの情報が直接、間接を問わず教員に届く形を整えた。教員を頂点としたピラミッド型システムから、教員が全階層の学生に柔軟にかかわることができる「網の目システム」への変更である。これにより、学生の「つまずき」を中心とした現場情報をほぼリアルタイムで学生指導員、リーダー学生と共有することができ、その都度、検討会を開いて対応を協議していった。

上記の現場情報は、①介入の成功あるいは失敗事例、②受講学生の反応、③受講学生のつまずき、に大別される。このほか、学生指導員からはリーダー学生の習熟度や負担感と

いったメンタル面の報告も上げられた。こうした情報の多くは、教員を含む全員で共有され、随時開催する検討会で対応策を協議したほか、授業コンテンツや作業指示の内容も柔軟に変更していった。

こうした情報の中で特に受講学生の「つまずき」として明らかになったのは、「書く」「話す」以前の問題として、多くの学生が与えられた文献を読めていないという点であった。つまり、文字を辿ることはできても内容を読み取ることができていないということである。これを受け、以後のリーダー学生らに対する教員の指導やグループへの介入も文献講読を通じて内容を共有し、それらを根拠に議論するというやり方が主となっていった。結果として、グループ活動が単なる感想を出し合う“井戸端会議”的なおしゃべりから、本格的な議論へと進展していった。自分たちの議論が、文献を媒介とし本質を外さない内容のあるものへと向かっていることが意識されるようになると、学生の間からは「初めての経験で面白い」という声上がるようになった。

リーダー学生らの介入は、受講学生の興味を引き出し、積極的な授業参加という形でも効果を現した。クラスメートであるリーダー学生の活躍ぶりを目にし、活動がスムーズに行っている班の情報がクラス内あるいは親しい仲間内で流れると、クラスの中に「自分たちも頑張らなくては置いていかれるかもしれない」という空気感が醸成され、自主的に活動の時間を設ける班が目立つようになってきた。リーダー学生の存在が一般受講生にとってなにがしかの刺激になるという予想はあったが、期待していた以上に自主性の萌芽が見られた。

一方、学生指導員・リーダー学生の間では「みんなで作る授業」という意識が共有され、介入を通じて得た情報の交換やフィードバックも円滑に行われた。リーダー学生の中から学生指導員への昇格を希望する者も現れ、

## ラウンドテーブル (RT2)

2022 年度は新たに 2 人の学生指導員が誕生している。「共に学ぶ経験者」である学生指導員、リーダー学生による授業支援は、受講学生の自主性を引き出すだけでなく、人数に関係なく双方向性を帯びた学びの連環へとつなげることができると考えられる。

### 4. 話題提供③ 垣花 渉「双方向的なコミュニケーションによるスポーツ実技の授業改善」

スポーツの実技科目を担当する著者は、運動をとおして学生の自律性を育みたいと考えている。そのために、授業を実践する大事な要素として、①「自己を表現する」、②「仲間と協同する」、③「場を共有する」を掲げている。「自己を表現する」は、実技の動きの理解を表現するとともに、他者の上手な動きをまねて自己の動きを洗練することである。「仲間と協同する」は、チームでのプレー・ワーク・コミュニケーションにおいて、自己と他者がつながり、互いに切磋琢磨することである。

「場を共有する」は、出会いの場、コミュニケーションの場、心身を自由に開放できる場など他者と関わる空間や場所を活かし、新しい自己を発見することである。

新型コロナウイルスの感染拡大に見舞われた 2020 年度、遠隔授業に十分適合できなかった著者は、上記の授業を実践する大事な要素をすべて失うことになった。その結果、「授業は教師と学生がともにつくるもの」という認識を改めて持つとともに、試行錯誤で獲得した遠隔授業のノウハウを対面授業へ活かす機会を得ることになった。

2021 年度の授業実践にあたり着目したことは、①教師の問いかけ、学生の応答を繰り返すこと、②思い切って失敗できる関係性の構築、③学問的な問いの共有、の 3 点であった。具体的には、①では「運動時の心拍数と運動強度の感じ方の間には関連性がある」という知識の理解を促すために、遠隔手段を使

い実技の前と後に心拍数と運動強度の感じ方を回答させ、それらの関係性を図示して解説した。②では、初回の授業で教師と学生、または学生間のコミュニティを形成する仲間づくりを行った。そのうえで、少しの努力で越えられるパフォーマンス課題から与え、だんだんと課題の量や質を上げるようにした。③では、初回の授業で「身体活動は、人が健康的な生活を送るうえで、どのような存在なのか」という問いを投げかけ、その後の授業ではその問いに答えるための要素となる問いを複数にわたり与えた。学生は、授業の内と外で身体活動に取り組みながら問いの答えを模索し、教師は学生の答えに返答したものを、授業用のホームページへ公開した。

その結果、学生の授業へ臨む姿勢は、コロナ禍以前と比較して、興味と参加を示すものへ変容した。最終回の授業での学生のふり返りにおいて、「授業を通して、工夫すれば健康生活は思ったより楽しく、有意気で続けた結果が身体に現れてきて、それが嬉しくて続けられた」、「効果的な運動のやり方を学ぶことができたことから、運動不足を解消しようという意識がとても高まった」、「授業でストレッチをした時は心が穏やかになり、筋トレをした翌日は筋肉痛など、運動を通して心身の変化を感じることができました」など、授業への興味や参加を示す意見が多く現れた。教師と学生との双方向的なコミュニケーションが学びの場で成立した時、教師と学生の双方に切磋琢磨の雰囲気醸成され、学生を学習へ動機づけるきっかけが作られるものと推察された。

## 統合型教養教育とチュートリアル教育による課題解決型授業の設計

### —協働的な学習をベースとする「地域戦略人材」の育成の模索—

○長谷川隼人（大正大学）・中島紀子（大正大学）

#### 1. はじめに—本学の初年次教育の特色

大正大学総合学修支援機構 DAC<sup>i</sup>では、クォーター制を導入した 2020 年より初年次教育（Ⅰ類）において、旧来の教養教育やキャリア教育を統合した「統合型教養教育」のもと、教職協働のチームティーチングによって教育と学修支援を融合した「チュートリアル教育」を展開している。特に、学生の自律的な学びを支えるために、学生自身の学びと経験の統合を促すリフレクション（ふり返し）を重視している。

Ⅰ類は、人間の探究、社会の探究、自然の探究、データサイエンス、総合英語から構成される。各探究科目は、1年生全員（約 1300 名）を学科横断 12 クラス（70 名から 180 名）に編成し、共通パート教員 1 名、専門パート教員 1 名、チューター 1 名から 4 名のチームで運営している。また、1・2・4QT（クォーター）に開講され、全クラス同一内容の共通パートとクラスごとにサブテーマの内容で構成される専門パートから成り、各 QT に各パート 7 コマずつ授業をおこなっている。この間、チューターは、授業内支援のみならず、学生の自律的な学びを支えるために授業後に e-ポートフォリオに提出されるリフレクションにコメント返却を実施している。

本稿は、「統合型教養教育」と「チュートリアル教育」による初年次教育体制における社会の探究の「共通パート」の授業設計を紹介して、今後の展望と課題について報告する。

#### 2. 全学カリキュラムと社会の探究

Ⅰ類の教育目標は、本学のディプロマ・ポリシーを念頭に、9 つの資質・能力の育成をかかげている（主体的学修態度、知識理解・活用力、表現力、課題探究・解決力、情報・データ活用力、対人力、セルフマネジメント、チャレンジ精神、地域密着力）。

社会の探究は、「表 1」の資質・能力に重点を置いて設計されている。特に、地域密着力は、本学が 2020 年度に文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業」に採択されたことを受けて、「地域戦略人材」（多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて異なる専門分野の多様な人材を統合し調整する新しいリーダー）の育成という全学的目標の一環となっている。また、2 年次以降のリーダーシップ、学融合ゼミなど学科専門（Ⅱ類）科目、アントレプレナーシップ育成など資格（Ⅲ類）科目への接続の起点に位置づけられる。

Ⅰ類の教育目標	Ⅰ(1QT)	Ⅱ(2QT)	Ⅲ(4QT)
主体的学修態度	**	**	**
知識理解・活用力	***	**	**
課題探究・解決力	**	***	***
情報・データ活用力	*	**	***
対人力	***	**	**
表現力	**	***	***
チャレンジ精神	*	**	***
地域密着力	**	***	***

表 1 社会の探究で重視する資質・能力と QT ごとの比重

#### 3. 社会の探究共通パートの授業設計

社会の探究Ⅰ（1QT）では、知識理解・活用力とチームビルディングのための対人力の涵養を重視している。協働的な学習では、年間固定の学科・男女の混成 6 名 1 グループをベースにして、SDGs、若者と選挙といった基礎知識、課題解決のトレーニングとしてデザ

## 学士課程教育①

イン思考の基本を学ぶ。あわせて、出身地域紹介のスライド作成による PowerPoint の基本操作の習得や図書館職員と協働した図書館活用法の紹介を実施する。

社会の探究Ⅱ（2QT）では、課題探究・解決力と表現力に重点を置いてグループ単位でミニプロジェクトに取り組む。テーマは、学園祭（鴨台祭）の「隠れた魅力」を発見して地域の人々がより魅力を感じるための解決案をプレゼンする、というものである。

ミニプロジェクトの狙いは、1）大学の構成員としての意識を養い、仲間と協働しながら課題を発見・解決する姿勢を実践的に会得すること。2）地域に開かれた学園祭というコンセプトを念頭に学園祭を体験・観察することで大学周辺地域との連帯感を育むことにある。また、調査対象を大学構内に制限することには、学生が一定期間に集中的に周辺地域に繰り出すことによる「調査地被害」を抑制する含意もある。なお、並行して人権問題の事例、Society5.0時代の労働・働き方、プレゼンテーションスキルを学ぶことで課題探究力を磨き、表現力の向上を図る。2QT 最終回では、クラス単位でプレゼン大会を実施して発表の相互評価をおこない、他チームの成果から自ら学ぶことを期待している。

社会の探究Ⅲ（4QT）では、情報・データ活用力とチャレンジ精神に重点を置いてファイナルプロジェクトに取り組む。テーマは、地域の範囲を豊島区全域に広げ、地域の課題を解決するために大学としてどのような連携が可能なのか、具体的な企画を立案して大学にプレゼンする、というものである。

4QT は、課題探究力の深化とデータ活用力、そしてモチベーションを維持するために以下の3点の工夫を取り入れている。1点目は、4QT 開始までの事前学修として文献や資料調査、課題発見を目的とする観察中心のフィールドワークを課すことである。2点目は、元豊島区職員をゲストスピーカーに招いて行

政課題を学生向けに語ってもらう機会を設けることである。3点目は、最終のプレゼン大会を各クラスの予選を経た12クラス代表によるコンペ方式として、審査を学長・副学長はじめ学科などの教員に依頼することである。これらの工夫によって、自らの取り組みが大学を拠点とする地域の発展に関わるリアリティを持たせて、提案内容の具体化、実現可能性、説得力のある発表、調査の質の向上を促すとともに、仲間と協働しながら創造的に活動するチャレンジ精神を喚起して、2年次以降のリーダーシップや学融合ゼミなどに接続することを期待している。

協働的な学習をベースとする社会の探究は、以上の授業設計と授業後の学生自身のリフレクションによる経験の言語化、学びの統合を通して、I類の教育目標の実現と「地域戦略人材」の育成を目指している。

## 4. 今後の展望と課題

現時点の学生の授業に対するエンゲージメントは、出席率や課題提出率の平均が90%を超えているように高い。これは、「チュートリアル教育」の効果と考えられる。今後、協働的な学習が本格化するなかでメンバー間のコミュニケーションやフリーライド等の問題の発生が予想されるが、チューター制度を活かしてきめ細やかな学修支援を展開していくことが肝要となろう。また、今年度の授業内容を検証するためにも、e-ポートフォリオに蓄積される学生のリフレクションを分析することで学修成果を可視化し、教育目標の到達度を測ることが大きな課題となる。

---

<sup>i</sup> DACとは、大正大学独自の組織で Diversity Agency Community（学内外を問わず多様な人々が共に学ぶ共同体）の頭文字を取っている。本報告に関しては、神達知純先生（DAC機構長）、星野壮先生（DAC トランジションチーム長）、君島菜菜氏（総合学修支援部部長）のご協力とご助言をいただいた。

## リーダーシップ教育 4 年間の歩み

○絹川直良（文京学院大学）

### 1. はじめに

本務先経営学部では、2019 年度より、権限によらないリーダーシップを身につけることを狙い、関連授業科目を 1 年次、2 年次の前期・後期に設定した。ただ、当初計画していた外部委託を行うことが難しく、教員がプログラムを維持し改善を進め、2022 年度に最終年度を迎えた。ここでは、特に 2021 年度から 2022 年度にかけての試みを紹介したい。

### 2. 「権限によらないリーダーシップ」

授業化に先立ち、2017 年および 2018 年は、(株)イノベストの支援を受け、トライアル的な内容で権限によらないリーダーシップを導入した。日向野幹也教授が整理されている「権限によらないリーダーシップ」の 3 要素、すなわち、①目標設定と共有、②率先垂範、③同僚支援を中心に据えた。

授業科目化にあたっては、期待される効果として以下の点を重視した。

(1)モチベーションの向上 多くの大学で入学後 1 ヶ月程度の間モチベーションが急低下するといわれている。入学直後さらには入学前から、楽しく仲間で過ごす時間を加えることで、モチベーションの向上を図る。

(2)「(権限によらない) リーダーシップ」についての理解向上と実践 高度成長時代であればともかく、チームの全員が発揮するリーダーシップを発揮することが求められている。米国の大学では一般的なプログラム。

(3)アクティブ・ラーニングや PBL を受け入れる素地を学生の側に創出 教員だけが踊っても学生はついてこない。学生が積極的に授業、ゼミ、委員会活動に参加する素地を作

ることが重要。

(4)履修者が指導者となって後輩の指導に参加(新入生特別研修、初年次教育を通しての SA 活躍を視野)。

1 年次前期、後期にそれぞれ「新しいリーダーシップ」「チームワーク実践」を、2 年次前期、後期には「ビジネスリーダーシップ開発実践」「ビジネスリーダーシップ開発応用」をおいた。

2019 年度前期は、最終的に学内の改善事項の提案をもとめ、後期は、いくつかの課題を与えてグループでの成果発表を求めた。

2020 年度は、COVID-19 感染拡大で対面での授業が困難となる中、この科目群についてはライブオンラインで開講し、COVID-19 の経済への影響についての話し合いなどをテーマに進めた。

以前、ジェイフィール社が日本で展開している Reflection Roundtable を経営学部のキャリア委員会で 17 回にわたって実施した際の経験があったことから、「マネジメントハブニングス(略称マネハブ)」を真似て授業冒頭の時間を使って学生達に話し合いを促したが、特に 2020 年前期は、数少ない学生同士のオンラインでの会話の場にもなったようである。

### 3. 企業よりの「課題」に代わるものを求めて

企業をお願いして課題テーマを学生達に提示してもらうという方法が、学生達のモチベーション向上を促すことは、FSP をはじめ、他大学の先進例から理解していた。2018 年後期には、前出のイノベストと協力企業のご厚意で、2, 3, 4 年生 20 数名向けに、その機会を提供いただくことができた。しかし、

## 学士課程教育①

2019年以降は独力で進めることとなった。

その中で、コモンズ社会起業家フォーラムの視聴と登壇者向けの短いレポート作成、インナー大会（プレゼン、ディベート）の見学は、COVID-19感染拡大下でもオンラインでの学びの機会であった。

中原淳・田中聡（2021）「チームワーキング」は、権限によらないリーダーシップを別の角度から展開しており、掲載された3つのケーススタディも参考になる。

ヘンリー・ミンツバーグ教授は、日本では、「MBAが会社を滅ぼす」「マネジャーの仕事」などの訳書を通じて知られるが、経営組織論や経営戦略論専攻とのイメージが強い。同教授が、自らのライフワークを、社会のリバランシング(rebalancing society)の推進に置き、政府セクター、民間セクター、多元セクターのうち、政治、民間の2つのセクターが強大になりすぎると社会全体のバランスが崩れるとして、多元セクターの役割の重要性を強調している。強大な民間企業が利潤追求と株主を最重視する経営を行い続けた結果、民間セクターが強大化したとし、社会のリバランシングの必要性を強く訴える。ここで、多元セクター(Plural Sector)は、市民社会(Society)セクターと言い替えることが可能であるが、コミュニティ組織やさまざまな非営利法人がここに入るものと思われる。

昨年7-9月に、ジェイフィール社の重光直之氏が、ミンツバーグ教授とこの考え方に興味をもつ人々（約70人、含む複数の大学生）の間の対話を企画し、これに参加する機会を得た。ミンツバーグ教授と重光氏の対話をベースに展開される動画視聴を授業に組み込むこともできた。

ミンツバーグ教授は、この動画の中で、改めて企業のmiddle managerの役割を強調し、企業外の顧客などとの接点を持つmiddle managerが企業の姿勢に変化をもたらすと主張する。この問いを少し変形させ、「企

業であなたの上司が環境問題等に理解を示さない場合、あなたはどうか」という問題提起を行ってみた。

## 4. リーダーシップ教育への示唆

「チームワーキング」は、社会人向けに書かれているが、大学生がこれを学び疑似体験し考えることの有効性は高いと思われる。

並行して、より主体的に考え、取り組むことの重要性を理解することも重要である。

4月最終週に5日間延べ23時間あまりにわたって行われた Roundtables for experienced managers（ミンツバーグ教授に近いジョナサン・ゴスリング教授が中心となって開催）にオンラインで参加する機会を得た。4-5人単位でのグループワークが複数組み込まれていた。ごく短時間の間にそれぞれが持つ仕事の上での壁を話し合い、これに他の参加者がグループでコンサルティングを行うセッション他を体験したが、TEAMを作り設定、共有された目標に向かって短時間で濃い話し合いを進めていく様子は圧巻であった。言葉の壁だけでなく、こういった姿勢や経験を乗り越えてさまざまな背景をもつ人々が協働していくことが、必要になってきている。

現在、ミンツバーグ教授の rebalancing society のHPを日本に紹介する活動が立ち上がっている。一人一人に主体的な変革をもとめる rebalancing society の考え方は、次代を担う人々が市民としてどうあるべきかを考えさせる機会を与えるものでもあり、大学生が挑戦する意味は大きいと思われる。

（参考）

日向野幹也（2019）「高校生からのリーダーシップ」（ちくま新書）

日向野幹也（2022）「大学発のリーダーシップ開発」（ミネルヴァ書房）

ヘンリー・ミンツバーグ著・池村千秋訳（2014）「エッセンシャル版ミンツバーグマネジャー論」（日経BP）

## 基礎学力および学修意欲の向上を目指す科目内自由選択型講義の実践

—薬学部での形成的評価を活用した理系科目統合型基礎教育科目—

○和田重雄・齋藤博・田端健治・西尾信一・福嶋仁一・安田高明（日本薬科大学）

### 1. はじめに

薬剤師育成の目的を持つ6年制の薬学部では、コアカリキュラムが示されていることもあり、大学での履修内容（履修科目）が大変多い。そのため、専門科目を学習する上で基盤となる数学、物理、化学、生物などの教養系理系科目を1年生前期にほぼ全ての学習を終える必要がある。

一方、医療系学部の多くの大学において、卒業時の学生の学士力の担保などのために、履修しているほぼ全ての科目において合格しないと進級できない、あるいは条件付きの仮進級的な制度をとっている大学が少なくない。本学においても、数科目の自由選択科目を除く全ての科目に合格しないと進級できない。

すなわち、学修意欲が低い、あるいは基礎学力が低い学生であっても、前期に開講される科目の全てにおいて合格できる基礎学力を身につける必要がある。しかし、様々な背景の学生がおり、全員が入学直後から全力投球的に学習に励み、効率的に成果を上げることができるとは限らない。事実、本学において1年生の前期終了時に、2年生への進級ができないことが決まってしまう学生が少なくなかった。

そこで、学生の基礎学力を身につけるとともに、意欲を持って学習に取り組み、かつ、前期終了時に進級不可とならないために、1年生前期の5科目の理系基礎教育科目を統合した新たな科目として総合薬学科学を2021年度に設けた。ここでの教育実践の様子を報告する。

### 2. 「総合薬学科学」の講義内容

#### (1) 概要

2020年度まで開講されていた基礎薬学数学、

基礎薬学物理、基礎薬学化学、基礎薬学生物、基礎薬学特論の各1単位の5科目を統合し、総合薬学科学という名称の5単位の科目を立ち上げた。

総合薬学科学は、基礎学力の定着と学修意欲の向上を目指して、以下の5種類の講義を合わせて95講義準備し、74コマの中で開講し、学生は自分の希望に応じて自由に50（以上）の講義を選択受講することにした。なお、後述の③と⑤は同一コマの中で複数講義を同時開講とした。

#### (2) 講義の種類

①基礎レベル（物理、化学、生物各2講義、有機化学4講義）：各科目の学習の基礎となる知識、技能、考え方などの講義。有機化学を独立させて設定したのは、高等学校で有機化学の単元を未学習の学生への対応を行うためである。

②標準レベル（数学、物理、化学、生物各10講義）：将来の専門科目の学習にも通じる基礎学力を身につけられるような内容を講義した。以前の基礎薬学〇〇の講義内容に近いもの。

③発展レベル（数学、物理、化学、生物各6講義、有機化学2講義）：ワンランク上の基礎学力の定着を図る、標準で講義しきれない、薬学に結びつく、学問的に掘り下げるなどの、学生の知識・技能や思考力、応用力を向上させるような講義。

④専門レベル（14講義）：専門科目担当の教授が研究内容や薬学に関するトピックなど初年次生が通常受講できない専門的な内容の講義。

⑤体験型講義（5講義）：物理、化学、生物の実習型講義。学生が実際に実験を行い簡単なレポートにまとめさせた。テーマは、学生が興味関心を示しそうなものを選んだ。実習のため受講人数制限をしており、学生は0～2講義を受講した。

## 学士課程教育①

### 3. 総合薬学科学の評価方法

評価は、完全習得学習(mastery learning)<sup>\*1</sup>の考えに基づく形成的評価を講義ごとに行い、その合計点を評価点とした。詳細を次に示す。

#### (1) 確認試験による評価(①～③の講義)

①～③の講義は、学生の基礎学力および学士力のベースとなる一定水準の知識・技能・思考法を身につけさせるため、小テストに該当する確認試験で評価した。確認試験は、個々の講義内容で解答できる問題を提示し、全問正解で2点、半分以上の正解で1点とした。形成的評価を行うために満点が取れるまで合計5回解答できるようにした。1回目を授業時間中に解答させるため、講義を早めに終了させ、確認試験の解答時間を確保した。1回目で満点が取れない学生は、その日の講義全て終了後の午後5時以降に2回目以降を受験させるようにした。ただし、2回目の確認試験を受験する前に、1回目の確認試験の解説動画を視聴することを推奨した。この方法により完全習得学習の基本的な実施方法である《教授(講義)→試験→再教授(解説動画)→試験》というサイクルでの学習を可能とし、学生の基礎学力の定着を図れるように配慮した。また、①～③の授業は録画し、随時オンデマンド式に視聴可能とし、復習に役立つよう配慮した。

#### (2) レポートによる評価(④、⑤の講義)

④、⑤は、学修意欲を高めるための講義であり、その講義で習得した内容を元にまとめるレポートで評価することとした。なお、一定の評価基準に達していないレポートには、再提出を求めた。

#### (3) 総合薬学科学としての評価

科目としての評価は、2点満点の各講義での確認試験またはレポートの評価点の合計とした。50以上の講義に出席して100点を超えた場合は100点と評価した。

### 4. 結果と考察

本取り組みの成果を客観的に評価するのは容易ではない。入学直後の4月に行った基礎学力試験を、同一問題で7月の前期定期試験最終

日に実施した。平均点は上昇したが、半期の学習後であり基礎知識が増加しているのは当然で、成果に結びついたとは言い切れない。しかし、学生アンケートの中で基礎学力向上に関してやや興味深い結果が得られた。以下の質問3項目(Q1～Q3)についてそれぞれ10点満点で回答させた結果を図に示して考察する(有効回答114名)。Q1:本科目の受講により、入学時と比較して基礎学力はつuitaと思いますか(基礎学力)、Q2:確認試験の解説動画は役に立ちましたか(解説動画)、Q3:録画された講義動画を復習のために視聴しましたか(授業動画)。



Q1とQ2の平均値がそれぞれ  $7.3 \pm 1.7$ 、 $8.4 \pm 1.9$  であり、おおむね確認試験の解説動画の利用が基礎学力の向上と結びついており、完全習得学習の授業プランが良い効果を導いたと考えられる。この傾向は基礎学力が大きく向上したと回答した学生(Q1を8以上と評価:47.3%)に顕著であり、Q2の平均値が  $9.2 \pm 1.2$  であった。Q1が7以下と答えた学生(52.7%)のQ2の平均値  $7.6 \pm 2.1$  と大きく差が出た( $P < 0.01$ )。しかし、Q3の値では両方で差がみられなかった。

確認試験の最終解答期限を授業実施日の23:59と設定しており、確認試験の解説動画を活用しても授業内容をその日のうちに消化し切れない学生がいると考えられ、今後の対応を検討しなければならない。しかし、そのような学生も授業後に復習する意欲は削がれていないことが、Q3の平均値に差がないことから窺える。

### 5. 参考文献

<sup>\*1</sup> Bloom, B.S. (1968). Learning for mastery: Evaluation comment, 1 (2), 1-5

## 学士課程新入生入学時ガイダンスに期待される役割

### —マインド醸成のためのガイダンス実践から—

○黄若白（東京工業大学）・野崎雅子（東京工業大学）

東京工業大学では、カリキュラムの仕組み、履修や学修の手続きや諸制度について教務部門や各学院が紹介するオリエンテーションとは別のものとして、現役学生と卒業生が講師を務める「学修コンシェルジュによる学士課程新入生ガイダンス」（以下「ガイダンス」と呼ぶ）を2016年度より新入生全員を対象に開催している。2022年度は4月上旬の4日間にわたり、キャンパスの新たな国際交流拠点とされる施設で開催した。

キャンパスの新たな環境に飛び込み、学びのマインドが醸成されつつある新入生に入学時ガイダンスが提供しうる価値とは何か。この発表は、こうした問題意識のもとで企画・開催したガイダンスの実践の経験をもとに、入学時ガイダンスの役割・機能と期待される効果を紹介し報告を行うものである。

#### 1. ガイダンスの目標

このガイダンスは、東京工業大学が2016年度より始動した新教育体制に合わせ、新たなカリキュラムと学習環境の中で大学生活を円滑かつ充実に過ごしていくための心構えを伝えることを目的に、2016年度より始めたものである。2021年度にはガイダンスの目標を新たに策定した。すなわち、「大学学修へのスムーズな適応」「長期的な視点に立った計画作成」「東工大生としての連帯感とアイデンティティの確立」の3点である。

ガイダンスの企画・設計からコンテンツの作成まで一連の準備は、現役学生（学生支援センターに所属する「学修コンシェルジュ・ジュニア」スタッフ）が教職員および卒業生

と協働しながら主体的に行うことになっている。

#### 2. ガイダンスの特徴

2022年度のガイダンスは、上の目標に基づき、過去の開催をふまえてさらにアレンジを加え、次の順に行う5部で構成した90分を新入生約80名ずつを対象に計14回開催した。3年ぶりの対面での開催であり、学生主体の国際交流拠点としてグランドオープンした施設で初めて開催する試みでもある。

- ①学長への質問コーナー（10分）
- ②卒業生によるセミナー（15分）
- ③現役学生によるセミナー（25分）
- ④現役学生から卒業生へのインタビュー（15分）
- ⑤ユニット交流会（25分）

①では、新入生が「ぶっつけ本番」で活発に投げかけた質問に対し学長がその場で回答する。②と③はそれぞれ、卒業生が大学の歴史や研究実績を当時への回想とともに紹介するセミナーと、現役学生が大学生活のあり方・過ごし方について自身の実体験に基づき、アドバイスを交えながら紹介するセミナー。④では、進路の決め方や大学での学びの活かし方を、③の現役学生が②の卒業生にインタビューする。⑤は、新入生同士が自己紹介と入学に際しての抱負や展望の共有を、現役学生のファシリテーションのもとで行う交流会。

ガイダンス冒頭部では、「何のために大学で学ぶのか」「東工大へ入学した理由は」「何を実現していきたいのか」「東工大でどのように過ごしていきたいのか」の4つの問題をあら

## 入学前教育

かじめ提起した。そのヒントが提示された①から④を受け、新入生は⑤で考えを交換する。4つの問題はガイダンスの最後に再び提示した。このように、形態が大きく異なる5部が、統合されたプロセスの中で行われるものとして設計した。

こうした構成と内容の設計は、ガイダンスに次の特徴を持たせる。すなわち、(1)大学の理念・ポリシー、大学の位置づけ、履修・学修の計画、大学生活における多様な営みの展開、進路選択の心得、コロナ禍の乗り越え方、およびキャンパスライフのリソースなど、大学学修のスタート時に求められる情報を多面的かつ網羅的に取り上げて紹介すること、(2)その紹介を、教職員ではなく、もっぱら現役学生と卒業生による実体験と体感に基づき自ら内容を設計して行うこと、(3)学長への質問コーナーと卒業生へのインタビューという、セミナーとは異なる形態も組み入れ、新入生からすれば「遠い存在」にも思われうる立場の人たちがごく身近な事柄についてカジュアルでありながらメッセージ性に富んだ経験を共有すること、および(4)新入生同士の交流会をガイダンスに導入するとともに、開催の場所を学生交流の拠点施設とすることにより、今後の日常に行われる仲間との交流と何ら変わらない交流の体験をあらかじめガイダンスの場で提供したことの4点が挙げられる。

以上は、開催側の観点から見た特徴であるが、新入生の観点からは、次の特徴的な点が考えられる。すなわち、自らと共通する属性（自らと同じ「東工大生」としての現役学生、卒業生、学長、および新入生）の人物からの、異なる複数の形態（セミナー、質問コーナー、インタビュー、仲間との交流会）が用いられた多面的な情報の強力なインプットと、新入生同士の、そのインプットから刺激や触発を受けたアウトプットと対話のいずれも可能なガイダンスである。

## 3. ガイダンスの役割と効果

上の特徴を示す今回のガイダンスは、入学時のマインド醸成、および大学生活全体の傾向性や持続的な行動に影響を与えうるものとして期待できる。

現役学生や卒業生といったロールモデルからの、多様な体験や意見・価値観の紹介によるインプットにより、学修や大学生活の目標に対するイメージの形成と活性化と、複眼的視座に基づく計画作成に対する意識の喚起と促進が可能と考えられる。一方、全学生共有の交流施設で開催するガイダンスに交流会を導入することにより、学びの仲間とつながる対話の活動に対する意識づけも期待される。大学と「初対面」したタイミングで期待を膨らませる新入生が、ガイダンスを通して持ち始めたこうしたインパクトのあると思われるマインドやイメージは、その後の学修活動において深化され、長期的には主体的な行動につながっていくことも期待可能ではないかと思われる。

入学時ガイダンスが果たせる重要な機能として、学業の成功のための知識の枠組みの提示、学び合うコミュニティの構築、大学のキャンパス文化の明示が挙げられている（Jacobs, 2010）。また、入学時ガイダンスをも包含した存在としての初年次の諸セミナーで受けたインパクトは、長期的な学習活動の傾向性を決定する一要因とも指摘される（Padgett, Keup & Pascarella, 2013）。今回のガイダンスは、こうした入学時ガイダンスの役割と機能の実現に向けて実践した一步の例として位置づけられるものである。

### 参考文献

- Jacobs, B. C. (2010). Making the Case for Orientation: Is It Worth It. *Designing Successful Transitions: A Guide for Orienting Students to College*, 29-39.
- Padgett, R., Keup, J. & Pascarella, E. (2013). The Impact of First-Year Seminars on College Students' Life-long Learning Orientations. *Journal of Student Affairs Research and Practice*, 50(2), 133-151.

## 入学前教育への参加動機が取組み態度を媒介して成長実感に与える影響

○溝口 侑・森 朋子 (桐蔭横浜大学)

### 1. 問題の所在

大学進学者の多様化が進む中で、入学前教育が果たす役割は大きい。「各大学は、入学手続をとった者に対し、必要に応じ、これらの者の出身高等学校と協力しつつ、入学までに取り組むべき課題を課すなど、入学後の学修のための準備をあらかじめ講ずるよう努める」(文部科学省, 2021)とあるが、実施方法や内容について大学や学部・学科の特性によって様々である。文部科学省高等教育局(2017)やベネッセ教育総合研究所(2014)の調査では、入学前教育の実施の目的としては入学までの学習習慣の維持・継続がもっとも多く、高校までの基礎学力の増強・向上や、大学での専門的学びの基礎学習や大学での学びへの動機づけが続くことが明らかにされている。

たしかに基礎学力の増強・向上は重要な課題であるが(山岡, 2013)、入学予定者を大学での学びに向かわせ、意欲を喚起させることも重要である。入学予定者が学習意欲を持ってない要因の1つには、自分なりの将来の見通しを持ってないことがある。将来の見通しを持つことと学習意欲の高さには関連があることが明らかにされていることから(保田・溝上, 2014)、入学前に大学卒業後の将来の人生と職業について考え自分なりの見通しを持つことが、大学4年間で学ぶ目的を明確にすることにつながるとともに、学習意欲を喚起することにつながると考えられる。

### 2. 桐蔭横浜大学における入学前教育

桐蔭横浜大学では、総合型選抜及び学校推薦型選抜での合格者のうち、希望者を対象に、全7回から構成される全学共通の入学前教育

を実施している。プログラムの目的は、これまでの学びや経験をふりかえり、自分と身の回りの社会について理解することを通して、ライフキャリアについて考えることである。それにより、大学で学ぶ目的を明確にし、入学後の学習を動機づけること目指している。またプログラムを通して、入学前から共に学ぶ仲間を見つけることも重要な狙いである。

2022年度入学生を対象とするプログラムから、修了すると初年次必修のキャリア教育科目の単位として認定されることになった。2021年度の先行実施では、6割程度の参加者が「自分の成長につながる」ことを参加動機として挙げていたが(溝口ほか, 2021)、必修単位の互換プログラムとなったことで参加する動機にも変化が生じたもの考えられる。

### 3. 研究の目的

そこで本研究では、自主的な参加となる入学前教育プログラムへの参加動機が、プログラムへの取組み態度を媒介して、全7回のプログラムを通しての成長実感にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。

### 4. 方法

**調査対象** 2022年度入学予定者を対象とする入学前教育プログラムへの参加者189名のなかで、プレ・ポストの両時点でアンケートに回答した177名(男性132名、女性45名)を分析対象とした。

**調査時期・方法** 第1回の講座の冒頭(T1)と第7回の講座の終了時(T2)の2時点で、質問紙を配付し回収した。第1回はオンラインでの参加学生にはGoogle Formで回答するように求めた。倫理的配慮として、参加者に

## 入学前教育

は調査への回答がプログラムや入学後の成績には一切影響しない旨を説明した。

**調査内容** ①参加動機(「プログラムの内容が面白そうだったから(興味)」「大学での友人ができると思ったから(友人)」「桐蔭横浜大学がどんなところか知りたいと思ったから(大学)」など10項目、4件法; T1のみ), ②プログラムへの取組み態度(「まじめな取組み」「積極的交流」「課題への取組み」「深い学び」の4つの観点から取組み態度を捉えるための14項目、4件法; T2のみ), ③成長実感(本学のユニバーシティ・ポリシーに定める「人生と学びの基盤となる力」を参加者にわかりやすい表現で作成した6項目、6件法; T2のみ)を尋ねた。

## 5. 結果

参加動機を独立変数, 取組み態度を媒介変数, 成長実感を従属変数として, すべての変数間にパスを想定し, 共分散構造分析を行った(結果を図1に示す)。その結果, 「興味」「成長」「大学」の3つの参加動機が「まじめな取組み」に, 「友人」動機が「積極的交流」に正の影響を与えていた。「保護者」動機や「入学後に必修科目の単位になるから(単位)」という動機は成長実感への直接パスのみが有意であった。

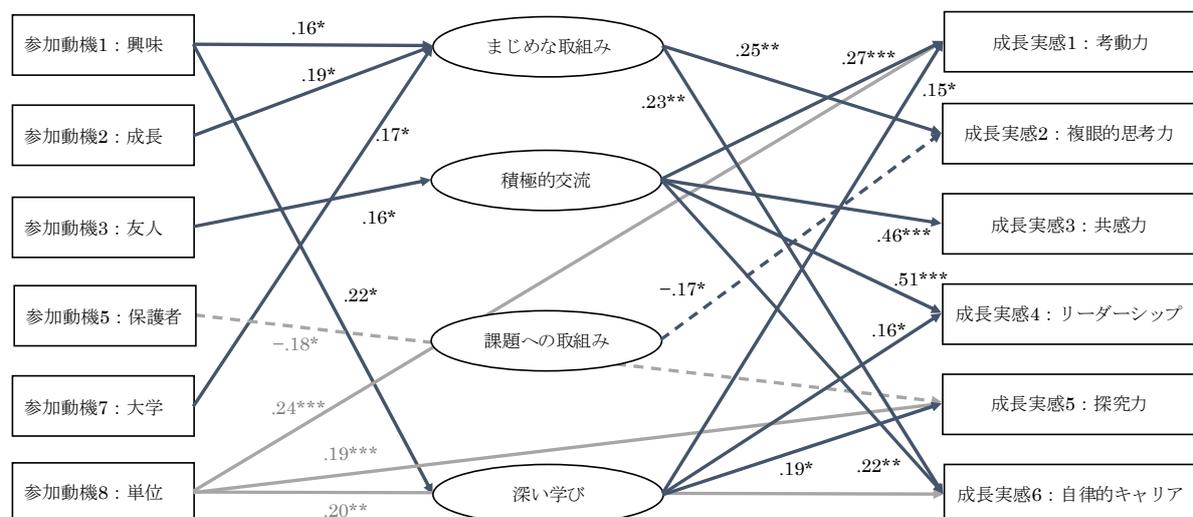
取組みから成長実感については, 「まじめな取組み」「積極的交流」「深い学び」はそれぞれ成長実感に正の影響を与えることが示された一方で, 主体的ではない「課題への取組み」は成長実感のなかでも「自分とは異なるものの見方や考え方があることを理解すること(複眼的思考力)」に対して負の影響があることが示された。

## 6. 考察

本研究では, 必修単位を入学前に先に修得できるという動機で入学前教育へ参加することが, 成長実感に直接影響があるという結果を得られたが, 実際には本研究では想定しなかった取組み態度や異なる要因を媒介して, 成長実感につながっている可能性もある。自主的な参加において, 単位を取れるということが意味することについては, 質的な調査も含めた総合的な検討が必要となる。

### 主な参考文献

- 溝口侑・清水栄子・原田章・田上正範・松井晋作・森朋子(2021)「入学前教育プログラムの可能性」『大学教育学会誌』43巻2号, 119-123.  
 文部科学省(2017)『大学入学者選抜にかかる最近の動向について』  
 文部科学省(2021)『令和4年度大学入学者選抜実施要項について(通知)』



注1: \*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ を表す。

注2: 参加動機は取組み態度, 成長実感に対して有意なパスが見られたものだけを記載している。

注3: 誤差及び変数間の共分散については紙面の関係上省略した。

図1 参加動機が取組み態度を媒介して成長実感に与える影響

## オンラインチームビルディングプログラムを入学前教育に活用する

### —実践内容とその成果の報告—

○川崎弘也（株式会社ラーニングバリュー）

#### 1. はじめに

弊社では、チームビルディングプログラムを活用して、主として大学入学初年次の学生の、モチベーション喚起や大学適応の支援を、全国の様々な大学や学部で行ってきた。またコロナ禍によって、2020年からZoomを活用した非対面リアルタイムオンラインでのチームビルディングプログラムの開発も進めた。結果、オンライン環境下でも対面と同様のプロセスでチームビルディングが進んで行くことが確認できた。<sup>1) 2)</sup>

今回は、オンラインの利点を活かした入学前教育としてのチームビルディングプログラムを新たに開発し、2つの大学で実施した。その具体的な取組内容と成果を報告する。

#### 2. チームビルディングプログラムとは

チームビルディングという言葉の響きからは、仲間づくりや友達づくりのプログラムを連想されることが多いが、北森は次のように定義している。

『自然発生的にできていくチームワークを待つのではなく、コミュニケーションやリーダーシップなどについて学びながら、自分をより深く理解し、チームメンバーとも相互理解を深め、目標を統合し、目標達成のために力を合わせていく— そのようなことを促進するための教育・訓練のプログラム』<sup>3)</sup>

効果的なチームビルディングプログラムの実施には、1日以上連続した時間を要する。また実施に当たっては、参加者40名程度に対して1名のファシリテーターを配置する。

プログラムの中で学生は6名～7名の小グ

ループに分かれ（1クラス6～7グループ）、連続した時間を同じグループで過ごしながら、様々な体験学習のコンテンツを活用して、自己理解・相互理解を深めていく（関係性）。その過程で自分の持ち味に気づき、ありのままの自分を受け容れられるようになる（有能感）。その間ファシリテーターはあまり介入せず、学生の自主性に依存した運営を行う（自律性）。すなわち自己決定理論<sup>4)</sup>の言うところの「自律性」「有能感」「関係性」に同時にアプローチする仕掛けとなっており、それが学生を集団的にモチベート（動機付け）することにつながっていく。

これを入学前教育に活用すれば、大学入学への動機を高め、不安を解消することが期待できると考えた。さらにオンラインの実施で全国どこからでも参加できることも、入学前に実施する際のメリットであると考えた。

#### 3. 入学前教育への応用

2年間の開発経験をもとに、リアルタイムオンライン環境下でのチームビルディングプログラムの主な利点と課題点を整理すると、以下のように考えられた。

（利点）①登校しなくても参加できる ②Zoomの機能の活用で、ランダムなグループやペアの交換が瞬時にできる

（課題点）③通信環境が整っている必要がある ④メインルームからブレイクアウトルームの様子を見ることができない（タイミングのいい介入の難易度が高い） ⑤途中で落ちた参加者の対応が必要

これらの利点を活かしながら入学前教育用

## 入学前教育

に開発したプログラムを図1に示す。

プログラム	
9:30	<b>①オリエンテーション</b> ①ネームプレート作成 ②グループ作り ③実習1「オンライン記者会見」 ④実習2「相互インタビュー」 昼食
15:30	⑤先輩の話 ⑥実習3「先輩・先生インタビュー」 ⑦まとめ「私の得たこと・学んだこと、大学生活への準備」 終了

(図1)

一方で④⑤の課題点を克服するために、在学生に事前研修を行ったうえでSAとして参加してもらい、各ブレイクアウトルームを巡回してグループワークのサポートをしたり、途中で落ちた参加者の対応したりなどの役割を担ってもらった。また課題点③を事前に明らかにするために、Zoomの接続テスト日を設けたが、その運営も学生SAの有志に手伝ってもらった。

### SA研修

— ファシリテーションと自己理解 —

なお学生

SAの研修は図2のように構成した。対面の環境で始め、本番と同じオンラインの環境で、全体の流れを確認しながら、SAのチームビルディングも進んで行くプログラムとして設計した。

プログラム	
9:30	<b>①オリエンテーション</b> ②実習1 「あなたの学習スタイル」 ・解説/グループビンゴ
対面	③実習2 「オンライン記者会見」 ・実習のふりかえり 昼食
オンライン	④実習3 「オンライン相互インタビュー」 ・実習のふりかえり ・オンラインプログラム全体の流れについて
オンライン	⑤実習4 「ロールプレイとフィードバック」
対面	⑥まとめ 終了
16:30	

(図2)

## 4. 結果と考察

今回は、開発した入学前教育用オンラインチームビルディングプログラムを、2つの大学で、いずれも12月に実施した。対象の大学の規模および対象者、参加者数、SAの参加者数は以下のとおりである。

### 【A大学】

・1学年定員1600名の総合大学 ・入学予定

者約470名が参加 ・SA参加者31名

### 【B大学】

・1学年定員470名の大学 ・入学予定者の約150名が参加 ・SA参加者24名

A,B大学とも、参加者の満足度は非常に高く(約98%)、当該大学への入学期待を高めたことが確認できた。(図3)

満足度	N	とても満足した	多少満足した	どちらともいえない	あまり満足しなかった	まったく満足しなかった
A大学	476	380 79.8%	84 17.6%	11 2.3%	1 0.2%	0 0.0%
B大学	144	109 75.7%	34 23.6%	1 0.7%	0 0.0%	0 0.0%

(図3)

またA大学では、半日のプログラムを2回の土曜日に分けて実施したため、両日の参加者、1回目だけの参加者、2回目だけの参加者に分かれた。2回目だけの参加者は、1回目のできたグループに途中から入ることになったが、その影響は、受講後のアンケート調査からはポジティブなものであったことがうかがえた。特に大学生活への不安は有意に小さくなっていったことがわかった。(図4)

	1回目のみ参加平均	2回目のみ参加平均	平均差	P値
受講前の期待度	4.11	4.08	-0.03	0.796
受講後の満足度	4.63	4.74	0.11	0.190
大学生活への不安度	3.01	3.36	0.35	0.029
大学生活への期待度	4.49	4.60	0.11	0.219

(図4)

このポジティブな影響は、グループのチームビルディングが進展していることによるものと考えられる。

### 【参考文献】

- 1) 本田, 川崎 (2020) 「大学適応を目指すチームビルディングプログラムのオンライン実施」 初年次教育学会第13回大会発表要旨集, pp. 52-53
- 2) 川崎, 本田 (2021) 「初年次生の学びのモチベーションをオンラインプログラムで喚起する」 初年次教育学会第14回大会発表要旨集, pp. 47-48
- 3) 北森義昭 (2008) 「組織が生きるチームビルディング」 (東洋経済新報社) pp. 5
- 4) Deci & Ryan (1991, 1993)

## 初年次教育と学生支援

### —学生支援の枠組みで出来ること—

○伊東幸子（東京工業大学）

#### 1. はじめに

本発表では、学生支援の枠組みで、初年次学生に対して働きかけている実践につき報告する。

#### 2. 初年次教育に必要な縦横の広がり

初年次教育は、高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学修及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的諸経験を成功させるべく、主に新生を対象に総合的につくられた教育プログラムである。日本では「教育」であるが、米国では First-Year Experience（初年次の「経験」）と言われている。その含意はまず、正課だけに焦点を当てるのではなく、初年次学生の生活や経験の全体を視野に入れて彼らの移行を応援する「横」の広がりが求められることである。さらに、そのアウトカムは学生達の在学中の学問的な達成だけではなく、卒業後の成功までを視野に入れることが望ましく、関わりの時間軸という観点で「縦」の広がりが求められる。

横の広がりのために必要な第一歩は、初年次学生の授業・学生生活に関わる教職員が、組織を超えて同じテーブルにつく仕組みづくりである。縦の広がりが必要な理由は、学生達が、個々に適したタイミングで、中等教育から高等教育への移行を果たすために必要な「良質な経験」に巡り合える仕組みを作るためである。

学生達との相談の中から見える「移行」は、必ずしも初年次のみ起こるわけではない。大学入学前から既に自ら課題を設定して意欲的に探究する経験を積んでいる学生もいる。初年次科目で触れた最先端研究の面白さに触発されて研究室を訪れる、日々の課題を一緒

にやる同級生の優秀さに触発される、学生実験の繰り返しで理工系的な考え方を会得する、研究室所属後に指導教員の一言にはっとする、文系科目・留学、他大学との単位互換などで自分の適性に気づく等々、学生達の心に灯がともる瞬間は人それぞれである。学生時代を悶々と過ごし、卒業後に花開く人もいる。大学生として、オトナとしての学業研究の面白さ、自分がこの先探求していく領域に目覚める時期は入学初年度に限らない。

いつの日かその目覚めにつながることを目指し、目覚めている学生は次につながるよう、そのための水路を作ることが、大学が初年次の学生に対して出来ることではないだろうか。

#### 3. 学生支援

平成12年に文部省が取りまとめた「大学における学生生活の充実方策について（報告）－学生の立場に立った大学づくりを目指して－」（通称廣中レポート）は冒頭で、昭和33年の学徒厚生審議会答申で重要性が強調された大学の正課外教育への取り組みが遅れていることを指摘し、今後の大学の在り方として「教員中心」の大学から「学生中心の大学」への視点の転換を提言した。学生への指導体制の充実については、学生相談、就職指導、修学指導、学生の自主的活動及び学生関係施設の5領域について改善方を述べている。

筆者が勤務する大学では、平成18年に設立された学生支援センターを令和3年に大幅に改組した。改組の方向は、廣中レポートが指摘した5領域を全学学生に対してよりよく提供できる体制の構築を目指し、既存の組織を学生相談部門（学生相談室、バリアフリー支援室）と未来人材育成部門（キャリア支援、

学生支援・ピアサポート

学生生活動支援、修学支援、国際交流支援)の2部門に統合した。未来人材育成部門は、令和3年に新設された学生交流施設の中に拠点を置いている。

この学生支援センターの特徴は、現場の専門スタッフ全員が何らかの学生個人相談(心理カウンセリング、キャリア相談、修学相談、学習相談、チュータリング等)の実務経験を有することである。現在のところ授業科目は持たず、正課外の支援に徹している。

学生との個人相談を通じて我々が疑似体験する初年次学生にとっての「初めての大学生生活」は、教壇から見える学生、大学とは異なる側面を見せる。

#### 4. 初年次学生にとっての大学

ある初年次学生は大学を「魔界」と表現した。伝統ある(旧)国立大学は敷地が広く校舎が多く、講義室の番号体系も標準化されておらず、まずは教室にたどり着くまでが一苦労になる。教務課はカリキュラムの仕組み・手続きは親切に教えてくれるが、「(他ならぬ)自分が、たくさんある選択科目の中から何をこの学期に履修したらよいのか」の助言はしてもらえない。第一線研究者の大学教員は、高校までの担任教員とは大幅に気質が異なって見え、「この先生があなたのアカデミックアドバイザーだから」と紹介されても、自分の初歩的な(かどうかもわからない)困りごとを相談するには少々ハードルが高い。同じ必修科目でも教員によって教科書や内容が異なり、難易度が高いクラスに当たるとなかなかつらい、サークルの勧誘は熱心で親切だが、高校と違ってすべてが大学公認ではなさそうで、さてついて行っても良いものか?若干の不安がある。。。

これらの困難をはらむ「魔界への招待」は、ある意味では、初年次教育が目指す中等教育から高等教育への移行、自律的に考えて動けるオトナの学び手になるための貴重な通過儀礼という面があり、過度に保護的に手出しを

すべきではない。とはいえ、通過儀礼には導き手が必要で、通過儀礼を脱落なく無事に通過してもらう仕掛け作りは重要である。

#### 5. 初年次学生への学生支援の実践

##### 1) 初年次担当教職員情報交換会

筆者が勤務する大学では、平成28年の教育改革により初年次学生の所属、カリキュラムが大幅に改革された。学生支援の面でも、初年次学生を主に支援する修学支援部門が新設され、全学の初年次担当教職員が集まって、入学時ガイダンス、オリエンテーションについて情報共有し内容の重複や抜け漏れをなくす会が初めて開催された。平成28年の初回開催以降、毎年2回の開催が続いている。

この情報交換会が、コロナ禍の令和2年4月の初年次学生に対して、「新入生 welcome 相談窓口」(初年次科目、所属学院、学務、保健管理、学生支援(学生によるピアサポートを含む)合計26のメール相談窓口のポータル)を開設する母体となった。

2) 入学時の学修ガイダンスの開催、その後のタイムリーな情報提供、Study Tipsの作成、在学中の進路決定(系所属、研究室所属等)のための情報提供。ガイダンス終了時受講生アンケートの一貫でTES(Transition Engagement Scale, Klause and Coates(2008))を測定し、ガイダンスの改善を行っている。

##### 3) 正課外交流イベント、セミナーの開催

4) 1)~3)を教職員と協業するピアサポート学生の育成

まだ始まったばかりの試みで、課題(長期的なアウトカムの測定方法、非常勤主体のスタッフ等)が多く悩みはつきない。ご意見を頂戴し、改善しつつ進めていきたい。

参考文献:

Gardner, J. N. et. al, (2005). Principles of Good Practice for the First College Year and Summary of Recommendations, *Challenging & supporting the First-Year Student - A Handbook for Improving the First Year of College*, pp. 515-523.

## 山梨学院大学ライティング・サポートデスクの取り組み

### —SA、サポーターの学びの場づくりの現状と課題—

○竹内はるか（山梨学院大学）・近藤裕子（山梨学院大学）・佐藤仕広（山梨学院大学）・佐野正子（山梨学院大学）

#### 1. はじめに

春日ほか（2019）などで示されているように、教員ではない立場にいるサポーターが授業の内外で授業を欠席した学生やレポート執筆に困難を感じる学生の対応を行うメリットは多い。山梨学院大学では学生が学生をサポートする役割として SA、サポーターという 2 種類の制度を設けている。授業時に学生のサポートをするのが SA、授業時間外に質問に来た学生のサポートをするのがサポーターである。本学のライティング・サポートデスクは、文章表現のサポートに関わる SA、サポーターが学びを共有するための場の一つである。本稿では、相談に来た学生のサポートをする学生の成長の場という観点から本学のライティング・サポートデスクにおける取り組みを報告する。

#### 2. 開室期間と日数、サポーターの配置

山梨学院大学におけるライティング・サポートデスクは、授業時間外に様々な種類の文章表現に関するアドバイスを受けられる場所として 2022 年 4 月から本格的に始動した。

昨年度は、週 4 日、昼休みのみの開室であったが、今年度からは授業がある平日の 2～4 限を開室時間とした。また、今年度は在室する担当者も増員された。担当は、専任教員 4 名（担当授業のある時間を除く）と、サポーター 5 名（各週 2 コマ）である。サポーターの業務は、ライティング・サポートデスクに決められた曜日時限に在室し、質問にきた学生にアドバイスを行うことである。

#### 3. サポートデスクの相談内容

本デスクで質問を受け付けるのは、主に「言語技術」の授業に関すること、大学の授業内外で提出が求められるエントリーシートや奨学金関連の文章についてである。

実際これまでに来室した学生の具体的な来室目的を確認すると「言語技術」の授業に関すること、その他授業で課題となったレポート、自己 PR 文、奨学金応募のための自己推薦書、公務員試験の小論文の作成相談等となっている。

#### 4. 利用学生の内訳

2022 年度の利用学生の内訳は以下のとおりである。4 月の初週の来室者が多い理由は、入学したばかりで大学システムに慣れていない学生が「言語技術」の課題提出方法の質問のために、本デスクを利用したからである。現在の体制となつてまだ間もないため、今後の利用者数については未知数であるが、2 か月ともにほぼ毎日 1 名以上が利用している。

4 月：計 76 名（開室日数 14 日）

5 月：計 38 名（開室日数 17 日）

表 1 2022 年 4 月来室者数

	11 日～	18 日～	25 日～	計
月	2	3	3	8
火	18	0	3	21
水	13	12	2	27
木	8	1	1	10
金	7	3	休校日	10
計	48	19	9	76

表2 2022年5月来室者数

	9日～	16日～	23日～	30日～	計
月	3	6	0	3	12
火	2	0	1	3	6
水	2	7	1	/	10
木	0	5	0		5
金	3	2	0		5
計	10	20	2	6	38

### 5. SA、サポーターの志望動機

SA、サポーター全員が昨年度の「言語技術」、もしくは「アクティブ・ライティング」の受講生である。いずれの学生も、もともとは文章を書くことに苦手意識を持っていたが、授業内での教員とのやりとりやライティング・サポートデスクにおけるアドバイスを通じ、自分の書いた文章をブラッシュアップできたという実感を持っている。そのような経験をふまえた上で、困っている後輩に寄り添うサポートを行うことを自身の目標に据える学生が多い。SA、サポーターが応募書類に記載した目標によると「役割は、一緒になって学ぶことであると考えています。(中略)私は後輩の履修生たちと共に成長するSAになりたいです。」「悩みを抱えている人と一緒に考え、解決策を共に導き出すお手伝いをしたい」のように、SA、サポーター自身が一緒に相談して成長する場としてライティング・サポートデスクを捉えていることがわかる。このことをふまえ、教員側としても相談に来た学生だけでなく、SA、サポーターもともに成長する場として本学のライティング・サポートデスクを位置づけ、幅広く活かすような運営方法を考えていく必要がある。

また、先述のとおり文章を書くことに関して成長したという実感をもっているSA、サポーターであるが、「知らない人の前で話すことが凄く苦手」「人と話すことは好きだが、自分の意見を言葉にするのが苦手で、言葉に出すときにかなりの時間を要してしまう」といったように、人との対話には苦手意識を抱い

ている人が多い。

大学や社会において必要とされる「言語技術」は文章を「書く」ことだけでなく「話す」「聞く」ことなども含まれる。学生の苦手意識があるコミュニケーション能力に重点を置いた研修計画を策定中である。

### 6. SA、サポーターの成長

5で示したように、2022年度のSA、サポーターに応募した学生は、自分自身の学びについても積極的な姿勢を示している。

たとえば、第3回「言語技術」はノートテイクに関する講義であった。サポーターはノートテイクの方法についてアドバイスをするために、授業時に解説されたノートテイクの方法を用い、サポーター同士の活動報告ノート<sup>i</sup>を記入している。これは教員側から指示したのではなくサポーターからうまれた自発的なものである。それを質問にきた学生に見本として提示もしており、質問した学生からは先輩の見本があることでよりわかりやすかったという声も聞かれた。

### 7. 終わりに

本稿では、相談に来た学生の成長の場としてのみではなく、そのサポートをする学生の成長の場となるような運営を目標にした本学のライティング・サポートデスクにおける取り組みを報告した。新体制になって間もないため、SA、サポーターの学生や、利用する学生の声をふまえ、場や研修について改善を加えていきたいと考える。

### 参考文献

春日美穂・近藤裕子・由井恭子・吉田俊弘  
(2019)「文章表現教育におけるTA(ティーチング・アシスタント)の養成と活用—大正大学共通科目「学びの基礎技法B」の実践をとおして—」『大正大学教育開発推進センター年報』第3号 pp.8-11

<sup>i</sup> サポーターは、情報交換のために、毎回の活動後に報告ノートの記入を行っている

## 短時間の初年次生交流プログラムを担当する上級生のグループ体験と リード体験とは ——上級生の大学適応への効果——

○関智子（玉川大学）

### 1. 問題と目的

新型コロナウイルス感染症（COVID19）感染予防のための様々な措置や行動自粛や制限は、大学生にどのような影響を与えたのか。全国大学生生活協同組合連合会（大学生協）による調査に、全国一万人以上が回答している（2021年10-11月実施）。学生生活充実度や状況については、2020年から2021年にかけて回復傾向にあるものの、コロナ禍以前、2019年度の数値までは戻っていない。友人関係の悩みは、2019年に、概算14%（初年次生）、13%（2年生）、10%（3年生）、8%（4年生）であったが、2021年では、23%（初年次生）、25%（2年生）、11%（3年生）、8%（4年生）となっている（全国大学生生活協同組合連合会、2022）。

初年次の大学適応では、関係性の悩みがあると回答する人が過半数おり、学修方法など他の悩みに比べて解消までに時間がかかることが指摘されている（濱名篤，2004）。上級生（在學生）に関しては、学生チューター（学生による他学生への個別支援）活動を通じての肯定的な変化が報告されている（例えば、清水栄子・山田剛史（2014））。

では、初年次生の交流を促進するための短時間のプログラムを在學生が行った場合は、提供した側にどのような効果があるのだろうか。上級生（新2-4年生）にグループワークによる関係性作りを行い、リーダー経験してもらった場合にはどのような学びがあるのだろうか。初年次教育に在學生の力を借りるだけでなく、その体験が上級生にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的

にする。

### 2. 方法

#### 2-1. グループ体験の概要

「グループ体験ワークショップ」を春休みの連続3日間（12時間）で実施した。参加者募集の際には新学期に初年次生向けに交流活動を指導する機会があることを明示した。

実施日時：2022/4/4-6、実施場所：大学内の教室

参加者：関東地域のA大学B学部13名（4年生7名、3年生4名、2年生2名（女性4名、男性9名））

#### 2-1-1. グループ体験ワークショップ

活動は参加者に適切なものと、交流プログラムでヒントになるものを選択している。

4/4, 4/5は、知り合う活動、一緒に楽しむ活動、課題解決型活動、心理的に安全なグループ作りを目的にした活動を各日10前後行った。4/6は交流プログラム（60分程度）を企画し、自分達を参加者として実際に行った。2日目4/5の活動リストである。

**知り合う活動**：2人組で名前共有、ラインアップ（誕生日、通学時間）、Make Two・数集まり→名前紹介+好きな食べ物、名前紹介+見えない共通点）

**一緒に楽しむ活動**：ジャンケン列車、ジェスチャーゲーム（全員バージョン）、アステロイド（めっちゃぶつけ）

**課題解決型活動**：3Dブロック（Duplicate）

**心理的に安全なグループ作り**：自分が見えない（誰かに頼る）バージョンでグループ分け）、Minefield,

## 2-2. 交流活動の概要

初年次教育カリキュラムのうち、基礎演習的授業（30人程度のクラス別）を選び、ファシリテーター希望の上級生10名が3グループに分かれて、新学期2回目授業で各クラスを短時間訪問した（10分程度）。簡単な交流を1-2個行うと同時にクラスの様子を観察した。同日中に、振り返りと交流プログラムを検討する機会を設けた。また、交流活動日2週間前（5月中旬）にミーティングし、プログラムの修正と担当確認をおこなった。

### 2-2-1. ファシリテーター体験

初年次教育授業の7回目/15回（5月末）の授業時間半分（50分）で、交流活動（20分程度）をリードし、少人数の初年次生グループに入って大学に関するディスカッションに参加した（20分程度）。6クラスを前半と後半の3つずつに分けたため、同じプログラムを2回行った。

### 2-2-2. グループ体験とファシリテーター体験の振り返り

交流プログラム終了後1ヶ月以内に、グループワークとファシリテーター体験の振り返りを実施する予定である

### 2-3. 効果に関する調査

対象：参加者のうち協力を申し出たもの

方法：半構造化面接法による効果測定を行う（2022年7～8月に予定）。主な質問項目は、グループ体験で最も印象深いこととどのような学びがあったか、ファシリテーター体験で最も印象深いこととどのような学びがあったかを予定している。インタビュー結果は、SCAT法（大谷尚，2019）を使用してコーディングし、分析する予定である。

## 3. 結果と考察

### 3-1. グループ体験についての感想

グループ体験終了時には、維持すべきこと（KEEP）、問題だったこと

（PROBLEM）、疑問（QUESTION）を尋ねた。代表的なものは以下の通りである。

維持すべきこと（KEEP）
全員が個性を出して楽しめた
初日、2日目の遊びを通じた関係性づくり
ただゲームをするだけでなく、グループの発展の話とか面白い

問題だったこと（PROBLEM）
人数が不足していたこと、もう少し人がいた方が活発になった
意見が固まらず、もっとみんな（全員）から意見が出るとより良い
もう少しプログラム作りの時間が欲しかった

疑問（QUESTION）
グループを見るとときに何を大切にしているのか

### 引用文献リスト

濱名篤（2004）．初年次教育の日本的課題ー拡大するFYEの解釈（下），アルカディア学報No. 155，日本私立大学協会．

大谷尚（2019）．第II部SCATによる質的データ分析，質的研究の考え方：研究方法論からSCATによる分析まで，pp. 269-365，名古屋大学出版会．

清水栄子・山田剛史（2014）．高等教育機関におけるピア・サポートの現状と課題：教育的効果の視点から，リメディアル教育研究，9(2)，pp. 8-15．

全国大学生生活協同組合連合会（2022）．第57回学生生活実態調査概要報告，<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>（2022/5/30閲覧）．

## 薬学生の成績とジェネリック・スキルの関係についての検討

—専門科目 GPA と GPS-Academic—

○福留誠 (神戸学院大学)・日置和人 (神戸学院大学)

### 1. はじめに

ジェネリック・スキル (汎用的技能) とは、各専攻分野を通じて培う学士力の内、知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能と定義されている。ジェネリック・スキルは、創造性、柔軟性、自立性、チームワーク力、コミュニケーション力、批判的思考力、時間管理、リーダーシップ、計画性、自己管理能力など、特定の文脈を越えて、さまざまな状況のもとでも適用できる高次のスキルのことである<sup>1</sup>。大学のユニバーサル化が進む中で、情報化の一層の進展、科学技術の急速な進歩が予想される現代においては、学生に対し大量の知識を大学だけで伝授することは現実的ではない。むしろ、状況に応じて自らに必要な知識を取捨選択し、社会の中で活用する汎用的技能を身に付けていることが、大学を卒業した学士には求められる。ところで、「学士力」、「就職基礎能力」、及び「社会人基礎力」などと呼ばれる能力を構成しているジェネリック・スキルの涵養が大学に求められる背景には、産業界主導の能力論と学校教育・生涯教育を基盤とした能力論があるとされる<sup>2</sup>。産業界主導の能力論では、ジェネリック・スキルは、雇用可能性と関連付けられるため、これまでよりも高度な人材選抜「ハイパー・メリトクラシー化」<sup>3</sup>の恐れがあると指摘される。一方、生涯学習の研究が進展する中で、ジェネリック・スキルが進歩的なコミュニティを発展させる基礎としても注目されている<sup>2</sup>。大学生のジェネリック・スキル涵養を考えるにあたっては、常にリスクにも目を向けるべきであろう。

薬学部においては、薬学に関連する新しい知識がつかない速いスピードで発見・報告され続けており、個人が全ての知識を身に付けることは不可能である。例えば、米国化学会が運営する世界最大の化学物質データベース Chemical Abstracts Service (CAS) に、2014年に登録された新規化合物は、1965年から1990年の25年間で登録された数よりも多かった。知識量がつかない速さで増加している一方、医療現場において薬剤師に求められる能力にも変化が起こると考えられる。例えば、多職種からなる医療従事者の協働は、患者への好ましいケアの提供につながり、その死亡率を低くすることが明らかとなっていることから、薬剤師がチーム医療の中で貢献することに期待が持たれている。このように、薬剤師は単に薬についての知識を身に付けているだけではなく、高い情報処理能力やコミュニケーション能力を身に付けていることが必要となる。したがって、薬学部においてもジェネリック・スキルの涵養につながる教育システムを構築することが急務である。

### 2. 本研究の目的

ベネッセ i-キャリアは、「大学教育を通じて身につけるべき能力」を客観的に評価するテストの開発に取り組み、アセスメント・テスト GPS-Academic (GPS: Global Proficiency Skills program、以下 GPSA と略す) を2016年から開始した。このテストは、客観的な能力として「思考力」の評価、学生の主観的な姿勢・態度や経験の「行動的評価」、学生の満足度など意識を測る「アンケート」から構成される<sup>4</sup>。平成30年時点での公表値として、

## 学習意欲・学習成果

年間 20 万人以上が受験しているが、GPS-Academic を実施し、その結果を確認したら終わりという大学も多いという。ベネッセ i-キャリアとしては、アセスメント・テストだけを実施して終わりにするのではなく、他の学内情報と組み合わせて分析して欲しいと考えているようである<sup>4</sup>。そこで、本研究では、薬学部において実施した GPSA 得点が、学修成績 (GPA) と関連するのかを調査することとした。

### 3. 方法

調査対象は、201X 年度に神戸学院大学薬学部に入学者 233 (男性 100、女性 133) 名であった。調査では、まず、ジェネリック・スキルとして GPSA の得点を確認し、その探索的因子分析を行った。次に、学修成績として GPA を用い、その GPSA の各調査項目との関連を確認した。全入学生に本アセスメント受験を求めたが、未受験であったとしても成績等には一切影響しなかった。また、倫理的配慮として、個人を特定できない匿名化を施した上で、全てのデータは分析に利用された。GPSA のデータを成績等と関連付け、学会発表することは、GPSA 利用約款にて認められていることを確認した。

### 3. 結果と考察

GPSA からは、29 項目についてデータが得られた。すなわち、「思考力 (A-01~A-04)」、「姿勢・態度 (B-01~B-11)」、「経験 (C-01~C-13)」、及び「学びへの意欲 (D-01)」である。GPA は、GPSA 受験年度 (201X)、及び翌年度 (201Y) のデータを用いた。比較のため、各変数は学部内偏差値に変換された。本学薬学生のデータを用い、GPSA 調査項目について、7 因子を想定して探索的因子分析 (最尤法、オブリン回転) を行った。統計処理には、JASP を利用した。結果として、D-01 を除く 7 因子 (思考力 : A-01~A-04、姿勢・態度・レジリエンス : B-01~B-04、姿勢・態度・リーダーシップ : B-05~B-08、姿

勢・態度・コラボレーション : B-09~B-11、経験・自己管理 : C-02~C-05、経験・対人関係 : C-06~C-09、経験・総合及び計画・実行 : C-01+C-10~C-13) からなる単純構造が得られた。累積寄与率は、81%であった。因子分析によって明らかにした 7 因子について、GPSA の項目名を因子名として、因子間関連を確認した結果、思考力の項目は、他の項目と関連がないことが分かった。一方で、他の 6 項目は相互に弱い相関を示す場合があることが確認できた。GPA (201X) と GPSA29 項目との相関 (ピアソンの積率相関係数) を確認すると、A-01「思考力\_総合」、B-05「姿勢・態度・リーダーシップ」、B-08「姿勢・態度・リーダーシップ\_粘り強くやり抜く力 (持続力・誠実性・勤勉性)」、C-04「経験・自己管理\_続ける経験」、及び C-13「経験・計画・実行\_実行・検証する経験」が 1%水準で正の相関 ( $r=0.181, 0.176, 0.334, 0.253,$  及び  $0.174$ ) を示した。201Y 年度も同様の傾向であることが確認できた。相対的に相関係数の大きかった項目 B-08 は、ベネッセ i-キャリアによって誠実性、及び勤勉性という因子名が追記されていることから、パーソナリティ特性 5 因子 (Big Five) における誠実性 (勤勉性) と関連付けられるのかもしれない。全体として GPSA の複数項目が GPA と中程度ないし弱い相関を示すことを確認できた。

### 4. 参考文献

1. 川嶋太津夫、アルカディア学報 No242、2006
2. 清水禎文、東北大学大学院教育学研究科研究年報第 61 集・第 1 号、2012
3. 本田由紀、多元化する「能力」と日本社会 ハイパー・メリトクラシー化のなかで、2005
4. 文部科学省委託調査「大学教育改革の実態把握及び分析等に関する調査研究」、2018

## 能動的先延ばしと班活動等の授業外学習に対する受け止め方との関連

### —リーダーシップ行動・達成目標志向との関連を含めた検討—

○井上晴菜（法政大学大学院）・藤田哲也（法政大学）

#### 1. 問題と目的

学士課程教育（中教審，2008）の1年次に行う初年次教育の目標には，基礎的な学習スキルの修得以外にも，望ましい学習態度の育成も含めるべきと考えられる。育成すべき学士力の中の「自己管理能力」に対応する具体的な学習行動の一つとして，「課題を期限内に提出する」ことを挙げることができる。

従来は否定的な側面が取り上げられることが多かった課題への取り組みの先延ばしに関して，近年では必ずしもネガティブな側面だけでなく，意図的に行い，課題を促進する能動的先延ばしにも着目されるようになってきた。吉田（2017）が作成した能動的先延ばし尺度を用いて，井上と藤田（藤田・井上，2021，日心；井上・藤田，2021，日教心）は反転授業における予習課題提出行動との関連を検討し，単純に「課題提出の際の期限までの時間的猶予」と先延ばし尺度得点には関連が見られない一方で，予習動画の視聴から提出までの課題従事時間は関連することを報告している。本研究は，能動的先延ばし尺度の得点と，初年次教育において班活動を行う際に影響を及ぼすと考えられる達成目標志向（中川・藤田，2018）とリーダーシップ行動（木村他，2019）との関連，および，質問紙調査による受講生の授業外学習の受け止め方との関連を検討することを目的とする。

#### 2. 方法

**分析対象** 法政大学心理学科1年生対象の初年次教育科目「基礎ゼミII」で2021年度に実施された。秋学期（後期）に班活動を行い，二回の発表（構想発表・本発表）が評価の対

象となった。発表課題は「大学のオープンキャンパスで，高校生にこの大学の心理学科の魅力伝える」というものであった。最終回の授業で Google フォームにより実施した質問紙調査のすべての尺度に回答した40名を尺度構成のための因子分析の対象とした。その後の相関分析および分散分析では回答に欠損のあった2名を除いた38名を対象にした。

**能動的先延ばし尺度** 吉田（2017）の作成した尺度のうち6項目のワーディングを適切に修正した全27項目（6件法）を用いた（井上・藤田，2021）。本研究での因子分析（最小残差法，プロマックス回転，以下同様）の結果，「プレッシャーの悪影響（例：締切が迫っているとうまくいかない）7項目」，「計画的先延ばし（例：時間を有効に活用するために，課題をあえて後に行う）5項目」，「時間的な見通しの失敗（例：物事を仕上げるとき，遅れることが多い）5項目」，「柔軟な切り替え（例：気分転換が得意である）3項目」の4つの下位尺度を構成した（削除項目7）。

**達成目標志向** 中川・藤田（2018）の用いた17項目について因子分析を行い，「遂行目標（例：この授業で，人より低くみられるのが嫌なので勉強する）9項目」と「習得目標（例：この授業からできるだけ多くのことを学びたい）6項目」の2つの下位尺度を構成した（削除項目2）。6件法。

**リーダーシップ行動** 元の尺度（木村他，2019）では全30項目（例：私は，メンバーのやる気を引き出している）が6つの下位尺度に構成されていたが，本研究では1因子解を採用した（削除項目2）。6件法。

学習意欲・学習成果

**授業外学習** 「教科書で予習する」「それまでの授業内容を復習する」「課題（宿題等）に取り組む」「授業時間外に班で集まったり班活動の準備をする」という4種類の授業外学習それぞれについて、「基礎ゼミ II 以外の授業でおこなっている」「基礎ゼミ II でおこなった」「効果的であると思う」「面倒であると思う」の4つの項目に6段階で回答を求めた。

**3. 結果と考察**

**尺度間のピアソンの相関係数** 各尺度の下位尺度ごとに評定平均値（可能得点範囲1-6）を求め、相関係数を算出した（Table 1）。

能動的先延ばしの各下位尺度得点は、他の尺度得点とは有意な相関を示さなかった。達成目標志向およびリーダーシップ行動は「基礎ゼミ」の授業について回答を求めたのに対して、能動的先延ばしについては、特に授業を特定せずにこれまでの行動全般についての回答を求めたために、関連が見られなかった可能性がある。

**能動的先延ばしと授業外学習の関連** 先延ばしの4つの下位尺度得点それぞれに基づき、高・中・低の3群を構成し、授業外学習の各項目の評定平均値を従属変数とした1要因参加者間分散分析を行った。主効果が有意になったのは、「プレッシャーの悪影響」を要因とした場合（高13, 中13, 低12）には、「班活動の準備が面倒」のみであった（高≧中・低）。先延ばしによるプレッシャーに弱い受講生ほど班活動準備を面倒と感じていた。

「計画的先延ばし」を要因とした場合（高13, 中12, 低13）には、班活動準備を「基礎ゼミ以外でおこなっている（高≡低≧中）」、「基礎ゼミでおこなった（高≡低>中）」で主効果が有意であった。授業外で班活動に積極的だったのは、能動的先延ばしの中核をなす、計画的先延ばし得点が高いか低い場合、すなわちパフォーマンスを高めるために意図的に先延ばしするか、先延ばしせずに早めに取りかかろうとする場合であるといえる。

「時間的な見通しの失敗」を要因とした場合（高13, 中13, 低12）で主効果が有意になったのは、基礎ゼミ以外の授業での「教科書で予習（低>高；低≧中）」「復習（低≧中≡高）」「課題（低≡中>高）」と、基礎ゼミでの「課題（低>高）」であった。いずれも時間的な見通しの失敗が少ないと自認する者が授業外学習によく取り組んでいた。

「柔軟な切り替え」を要因とした場合（高12, 中12, 低14）には、「班活動準備が効果的（高≡中>低）のみで主効果が有意であり、気分等の切り替えがうまくできると自認する者が、班活動準備を肯定的に捉えていた。

**4. 全体的考察**

本研究における能動的先延ばし尺度の得点の高低は、授業外学習の受け止め方の違いを、少なくとも部分的には合理的に説明できた。今後は実際の先延ばしの行動指標としての課題提出状況や、学業成績との関連を検討する必要があるだろう。

Table 1

能動的先延ばし(1-4), 達成目標志向(5-6), およびリーダーシップ行動(7)の下位尺度ごとの平均(M)および標準偏差(SD)と, 下位尺度間のピアソンの相関係数(n=38)

	M	SD	1	2	3	4	5	6
1.プレッシャーの悪影響	3.95	1.06	—					
2.計画的先延ばし	2.81	1.14	-.02	—				
3.時間的な見通しの失敗	3.49	1.12	.11	-.09	—			
4.柔軟な切り替え	4.11	1.14	.05	.10	.13	—		
5.遂行目標	3.52	1.18	.11	.12	.02	.04	—	
6.習得目標	4.83	0.82	.14	-.08	-.07	.16	.57 ***	—
7.リーダーシップ行動	4.25	0.85	.19	.21	-.40 *	.02	.60 ***	.58 ***

可能得点範囲は1-6

\* p < .05, \*\* p < .01, \*\*\* p < .001

## ポストコロナの授業評価に関する考察

### —オンライン授業と対面授業の授業評価の比較から—

○小西英行（多摩大学）

#### 1. はじめに

本研究は、コロナ禍の2020年度より実施されたオンライン授業と、それ以前の対面授業、そしてオンライン授業を経験した後の（ポストコロナの）対面授業のそれぞれにおいて、授業評価アンケートがどのように変化するか比較分析を行う。また、初年次教育科目とそれ以外の科目について、オンライン授業による授業評価アンケートの変化についても比較分析を行う。

いわゆるオンライン授業には、「資料を読み、ネットで質問や課題提出などを行う方法」である「講義資料型」、「LMS（Learning Management System）を活用し、事前に録画された授業動画を見る方法」である「オンデマンド型」、「Google Meet や Zoom 等で、授業の生中継を見る方法」である「リアルタイム型」の3形態があるが、これらのタイプ別における授業評価アンケートの各項目の値は、リアルタイムがやや良いものの、その差は小さいという報告がある（松河ほか2022）。また、オンライン授業とリアルタイム型と対面授業との比較においては、オンライン授業と対面授業の授業満足度の値は、対面授業がリアルタイム・オンデマンドいずれのオンライン授業よりも有意に高いという報告もある（江口ほか2022）。しかしながら、オンライン授業・対面授業といった授業形態と授業評価の関係の分析の多くは、同じ学期や年度内での比較であることが多く、コロナ以前の対面授業と、コロナ禍のオンライン授業、そしてオンライン授業を経験した後の対面授業において授業評価を比較した研究は、まだほとんどない。

また、グループワーク等のアクティブラー

ニングを活用した授業マネジメントにおいてはリアルタイム・オンライン授業よりも対面授業の方が勝り、授業資料の配布（配信）や課題のフィードバックなどの授業マネジメントにおいては、オンライン（オンデマンド）が勝っており、LMS等のオンライン（オンデマンド）を活用した授業マネジメントを併用することが、オンライン授業を経験した後の（ポストコロナの）対面授業においては重要となる。そしてあらゆるオンライン授業の形態や対面授業においても、教員からのフィードバックがあるほど授業評価の全体満足度が高い（西本2021b）。

#### 2. 授業形態別の授業評価データの分析

対象として、2つの大学（首都圏文系私立大学と、首都圏理系私立大学）において、2019年度（対面\_オンライン経験前）、2020年度（オンライン）、2021年度（対面\_オンライン経験後）のそれぞれ春学期に開講され、かつ3年間とも担当教員が同一であった科目に対して、授業評価の各項目について分析をおこなった（文系 n=53、理系 n=68）。科目担当者は常勤・非常勤講師のどちらも含まれていた。なお、データは教員名を伏せたものを使用している。

まず、各授業形態間の授業評価の関係を調べるため、年度間の個別の授業評価スコアの相関係数を算出した結果、もともと対面で授業評価が高い科目は、オンライン授業でも、オンライン後の対面授業でも評価が高いという関係が示された。一方、オンライン授業で評価が高い科目が、オンライン後の対面授業での評価に与える影響は、理系大学ではその影響が顕著であったのに対し、文系大学では

## 学習意欲・学習成果

ほとんど影響していないことも示された。この解釈にはさらなる分析が必要であろう。

また、オンライン授業時に予習・復習時間に多くの時間を費やしたと評価された科目は、オンライン後の対面授業でも予習・復習に時間をかけたと評価されたことも示されて、オンライン授業での経験が、適切な予習・復習課題の設定につながった可能性が考えられる。

さらに、授業形態別の全体評価を比較するため、2019年度～2021年度の授業評価スコアの全科目平均を算出した。全体的な傾向として、オンライン授業であった2020年度は授業評価が下がっていることが示された。オンライン授業でも対面授業と同じ質を保つことは難しい可能性がある。また、オンライン後の対面授業では、コロナ前の対面授業と同程度に評価されていた。

また、初年次教育科目とそれ以外の科目において、オンライン授業による授業評価の影響について、現時点では有意な結果は示されず、この点については今後の課題としたい。

### 3. まとめ

以上みてきたように、コロナ禍前の対面授業で授業評価の高い教員の多くは、コロナ禍のオンライン授業でも、そしてオンライン後の対面授業でも高い評価を得ている。そしてあらゆるオンライン授業の形態や対面授業においても、教員からのフィードバックがあるほど授業評価の全体満足度が高い(西本2021b)ことから、こうした授業評価の高い教員の多くは、オンライン授業下で適切にLMS等を活用したフィードバックを行ったと推測される。これらの検証については、今後の課題としたい。

なお、本研究におけるデータ分析において、多摩大学経営情報学部の田中友理専任講師に助言をいただいた。ここに謝意を表したい。

#### <参考文献>

・江口晶子, 廣瀬允美, 影山孝子, 小川典子, 根岸隆介, 大熊泰之(2022):” COVID-19 パンデ

ミック下におけるオンライン授業の評価”, 順天堂保健看護研究 第10巻)P43-49

・河内彩香, 村田晶子, 長谷川由香, 竹山直子, 池田幸弘(2021a):”【実践報告】教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか: ZoomとGoogle Classroomを併用した日本語教育”, 法政大学グローバル教育センター日本語教育プログラム 多文化社会と言語教育第1巻 P30-45, 2021-03-31

・河内彩香, 村田晶子, 長谷川由香, 竹山直子, 池田幸弘(2021b)“【実践報告】教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか ZoomとGoogle Classroomを併用した日本語教育”, 法政大学グローバル教育センター日本語教育プログラム 多文化社会と言語教育 第1巻 P30-45, 2021-03-31

・中村哲之(2021a):”オンライン授業(オンデマンド型)における教育効果: 教育心理学的観点からの実践的検討”, 東洋学園大学教職課程年報第3号 2021-03-20 P1-P14

・中村哲之(2021b):”オンライン授業(オンデマンド型)における教育効果—教育心理学的観点からの実践的検討—”, 東洋学園大学教職課程年報第3号 P1-14, 2021-03-20

・西本裕輝(2021a):”授業評価の自由記述から見る遠隔授業の課題とその対応“, 琉球大学教育センター報 23号, 2021-05-26

・西本裕輝(2021b):”令和2年度前学期共通教育等科目における「学生による授業評価」の分析結果”, 琉球大学グローバル教育支援機構 琉球大学教育センター報 23号 P18-45, 2021-05-26

・樋口勝一(2021):”学生の出席状況と授業評価の関係～情報処理演習Ⅱの結果から～”, 甲子園短期大学紀要 39号 P7-13. 2021

・松河秀哉, 串本剛, 杉本和弘(2022):”東北大学の全学教育における授業形態の影響—授業評価アンケートの結果から—”, 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要 第8巻 P3-12, 2022-03

## 初年次授業で実践するプロジェクト活動の学習効果

### —グループワークで期待される学びと成長の差異—

○村瀬博昭（奈良県立大学）

#### 1. 研究背景

PBL<sup>1</sup> やアクティブラーニングの導入が加速する中、実践的な授業自体が目的化され、学生の学習効果については十分に確認されないまま実践されるなど授業の形骸化の懸念が生じている。教育機関の中には、PBL やアクティブラーニングの導入推進のため、学校単位や学部単位でPBLを推進している。組織単位でのPBLの推進は授業の多様性を損なう恐れがあり、さらにPBLやアクティブラーニングの実施件数を教育の質として計るなど、評価指標に振り回された取組みにより、学生不在の教育が行われる恐れもある。湯川ら（2016）は、アクティブラーニングの課題について、活動主義に陥りがちで実質を伴わない実践になりかねないこと、フリーライダーの出現、グループ活動の不活性化など、数々の問題点を指摘しており、実施しても十分な学習効果が得られないこともある。

PBLによる学習効果に関する先行研究は、河西ら（2006）及び河西・丸山（2010）が行った理学療法科の学生を対象とした研究において、PBLは学生の記述問題への回答のほか、自主的に学習する時間が長くなったという報告がされている。土生ら（2020）の研究では、薬学部の学生に対してジグソー法を用いて学生同士で授業内容の理解を促したところ、講義が課題を解く参考になったというグループ学習の有用性が示されている。

PBL教育は1969年にカナダ・ハミルトンで誕生し、1980年代に欧米の複数の医学校のなかで手法の採否や体系的知識習得型学習との教育効果の優劣をめぐる論争を巻き起こし

たが、現在では社会科学の教育分野ではほぼ定着している（池田，2009）。PBLは医療分野から誕生した経緯もあり、他にも看護や介護など医療分野に関する研究が多くある。

一方、社会科学分野で学ぶ学生を対象として行われたものとして、山岡ら（2016）は学生に消費者教育を行う中でPBLを導入し、消費者教育への関心が高まり、消費社会に対する問題意識が醸成されたとしている。しかし学習効果については十分な確認ができておらず残された課題となっている。PBLにより習得できる能力、習得が困難な能力はどのようなものか、PBLが注目される中、学習効果や特性を明らかにすることが求められる。

#### 2. 研究目的及び研究方法

PBLやアクティブラーニングの効果的な導入に寄与するため、PBLで向上しやすいと考えられる能力について調査及び分析を行い、明らかにすることを試みる。PBLが不向きな能力向上の学習については座学など他の教育手法の方が適している可能性がある。

研究方法は、A大学の社会科学系の1年次配当授業を受講した47名の学生を調査対象者として、プロジェクト形式で2カ月間のPBLの開始時と終了時の合計2回、能力向上に関するアンケート調査を行い、PBL実施前に学生が期待する成長と、実際後に感じられた成長との差異を調査した<sup>2</sup>。実施方法はLMSのWebアンケート機能を用いて行った。プロジェクトの内容は、企業B社の経営課題を解決するための新商品提案や広報戦略などを学生が5～6名1組で検討する内容で、2か月後に

## 学習意欲・学習成果

は企業の代表者を授業に招いて報告会を開催するものであった。プロジェクト活動は学生同士が授業外の時間を調整して進め、授業では専門知識に関する小テストと座学の講義のほか、専門知識を応用して行うグループディスカッションを実施した<sup>3)</sup>。学生の主体的な学びを体現するため、授業内でプロジェクト活動の時間を確保せずに実施した。

### 3. 調査結果／考察

学生がプロジェクト活動を通じて身についた能力は、ディスカッション力と発言能力といった、対話に関する能力の向上が多くの学生にみられた。一方、リーダーシップとコミュニケーション力は伸び悩んだ。また、身につけようと意識せずに身についた能力では、発言能力と情報収集・分析力が多くの学生にみられ、リーダーシップと論理的思考力にはあまり見られなかった。人前で意見を述べる力や、情報収集や分析をする力は、PBL を通じて比較的身につけやすいと考えられる。

学生がプロジェクト活動を通して身につけたい能力では論理的思考力とサポート力が多かった。しかし、実際に能力が身についたと回答した学生は、望んだ学生のうち論理的思考力 50.0%、サポート力 60.0%にとどまった。成績別にみると、80 点以上の成績の学生では論理的思考力とサポート力が身につけなかったと回答する傾向が見られた。一方、79 点以下の成績の学生は、これら 2 項目については 80 点以上の学生よりも能力が身についたと回答する割合が高かった。しかし学生にレポートの提出を求めて内容を確認したところ、80 点以上の成績の学生の方が記述の論理性が顕著に高い結果となった。論理的思考力については座学等で補完学習をすることが望ましいと考えられるほか、PBL の実践によって能力が向上したと錯覚することにも注意する必要がある。

### 4. 脚注

1. PBL は「Project Based Learning」または「Problem Based Learning」の 2 種類があり、研究者により使い分けがされることがあるが、本稿では一般的に用いられる「課題解決型学習」の意味として同義として扱う。
2. 発言能力、ディスカッション力、リーダーシップ、サポート力、情報収集・分析力、論理的思考力、コミュニケーション力、以上 7 項目について調査した。
3. プロジェクト活動のチームとは異なるメンバーで毎回グループディスカッションを実施した。

### 5. 参考文献

1. 池田光穂, 2009 「保健医療社会学における『問題にもとづく学習』手法の可能性について」第 35 回日本保健医療社会学大会, 熊本大学, 2009/5/16
2. 河西理恵, 杉本和彦, 内山靖, 2006 「理学療法学教育における PBL(Project )学習効果」理学療法科学 21 (2) p. 143-150
3. 河西理恵, 丸山仁司, 2010 「PBL の学習効果と学生因子の関係について」理学療法科学 25 (2) p203-208
4. 土生康司, 水谷暢明, 宮田興子, 2020 「基礎系分野を臨床的課題の理解に繋ぐ思考プロセスを体験するためのジグソー型学習の実施」薬学教育 第 4 巻
5. 山岡義卓, 小野由美子, 上村協子, 2016 「持続可能な消費を目指した企業との連携による プロジェクト型授業(PBL)の学習効果」消費者教育 vol. 36, p159-170
6. 湯川恵子, 木村尚仁, 碓山恵子, 2016 「学びへのコミットメントを引き出す学習者主体のルーブリック作成と自己評価」国際経営フォーラ, Vol. 27, p217-236

## 初年次生を対象とした「言語技術」教育の取り組み

—生きるためのスキル習得を目指して—

○近藤裕子（山梨学院大学）・佐藤壮広（山梨学院大学）・竹内はるか（山梨学院大学）・佐野正子（山梨学院大学）

### 1. はじめに

近年、文章表現教育は多くの大学で導入されている。その内容は多様であるが、まずはアカデミック・ライティング対策として、レポート・論文の書き方指導が主だと言える。しかし一方で、現場の教員からは、それらのライティングスキルが専門科目に活かされることは難しいという指摘もあり、初年次から専門教育への接続という点での課題も残している。また、大学生が書くことを求められる文章は、レポート・論文だけでなく、授業関連では、リフレクションシート、PBL型授業やインターンシップの企画書および報告書等、学生生活では、奨学金等の申請書や就職活動に必要な自己PR文、志望動機書、小論文なども挙げられる。これらの文章においてもレポートや論文と同様、学生にとっては書いた経験のないものも含まれることは想像に難くない。

このように、学生の求められる文章は多様である。そうであるならば、大学における文章表現教育は、レポート・論文の書き方指導に終始してよいのだろうか。

上記の問いを起点に、初年次生の文章表現教育の見直しを行った。大学生、そして、その先の実社会で必要とされる言語スキルの共通性を整理し、その核となる部分を発表者らの携わる教育の現場で実践を試みた。本発表では、それら「言語技術」教育について、その内容と実践、および、学生の振り返りからその効果を報告する。

### 2. 「言語技術」教育で何を学ぶか

まず、「言語技術」とは何か。三森（2013）は、「言語技術（Language Arts）」とは、言語の4機能＋思考の方法の訓練であり、クリティカル・シンキングができること、建設的に考えを掘り下げつつ議論ができること、考えたことがらを誰もが理解できるように記述できることは、大学生だけではなく、社会人として身につけるべき言語運用能力だと述べている。ここから、発表者らは「言語技術」教育を「大学での学び、および、実社会で自立して生きていくために必要な日本語運用能力を身につけ、高めていくことを目標」とし、書く・話す・読む・聴くの4技能に加え、考えることを重視した総合的な言語スキルの習得を目指すものとした。

### 3. 「言語技術」教育の実践

#### 1) 「言語技術」教育の内容

次に、初年次生を対象とした「言語技術」の実践について報告する。

山梨学院大学では、初年次生を対象に、総合基礎科目の一つとして科目設置し、履修推奨している。2021年度より経営学部、2022年度には法学部が加わり、現在計21クラス（1クラス30人以内で編成）で展開している。1年次前期に「言語技術Ⅰ」（90分×15回）、後期に「言語技術Ⅱ」（90分×15回）が開講されている。前期「言語技術Ⅰ」では、アカデミックスキル習得とレポート作成（調査報告型レポート）に取り組んでいるが、その特徴は、クラスを実社会と見立て、学生同士の対話をとおして、学生自身が主体的に学ぶことを促す授業デザインに設計していることが挙

## 学士課程教育②

げられる。特に、レポートの作成では、その作成プロセスを通じて、課題発見、課題解決能力を鍛えることを狙いとしている。井下(2008)が「学生自らが主体的に書くこと考えることによって、学びをメタ的に俯瞰し、自分にとって意味ある知識として再構築することができる」と指摘しているように、主体的にレポートを作成するプロセスを踏む体験が、後にレポートなどの文章を書く際に、活かせることを目指している。

一方、後期「言語技術Ⅱ」では、“言語化”をキーワードとして、視覚・聴覚による情報、例えば、映像、講演、インタビューなどから得た情報を説明する、まとめる、報告するなど、目的に応じて言語化することや、自らの体験などを話す・書くなどして言語化し、分かりやすく伝えるといった実践を行っている。

### 2) 「言語技術」教育の核

上述の「言語技術Ⅰ」「言語技術Ⅱ」の実践内容は、一見すると、関連性が薄いように捉えられるかもしれない。しかし、両者に共通するエッセンスとして、「事実を伝える」、特に、「事実を客観的に記述する」という点が挙げられる。これは、渡辺(2021)が社会人の仕事の文書も小・中学校で学ぶ「説明的な文章」も、本質的にはみな同じ「事実を伝え、意見を述べる」ライティング技術の所産であるという提言にも通じるものである。

また同時に、この「言語技術」教育を実践する中で、初年次の学生が事実を客観的に記述することに非常に不慣れであり、多くはそういった記述の仕方を意識したり、経験したりしたことがないことが明らかになった。これは、「言語技術Ⅱ」で行った視覚情報を言語化する取り組みの中で、写真に写し出された事実ではなく、その写真を撮影したときの状況や心境など、「自分」を軸として、自分の言動や感情を含めた記述をしがちであるという傾向が大きく読み取れたことによる。つまり、客観的に記述すべき事実と感想・意見を区別

して記述する力を身につける必要が確認された。これらは、文章のタイプのカテゴリーを超えた共通の課題だと言えよう。

### 4. 「言語技術」教育の効果

以上の実践をとおしての学生の振り返りでは、「(書く・話す際の)構成への意識」「伝える工夫」「コミュニケーション力の向上」が自分で意識するようになり、さらには「社会に出てからも生きるスキル」だと認識していることが分かった。

「言語技術」教育は、文章を書くプロセスをとおして、物事を観察し、対話し、思考する体験を重視している。さらに、論を組み立て、抽象的・具体的な表現の言い換えなど、相手に分かりやすく伝えるための力の習得を目指している。こうして培われた力は、レポートを書く以外にも、例えば、プレゼンテーションや議論などにおいても、客観的に情報を伝え、意見を述べるという点で共通したスキルとして発揮できよう。

#### 参考文献

- 井下千以子(2008)『大学における書く力考える力：認知心理学の知見をもとに』東信堂
- 近藤裕子他(2021)「社会接続型ライティング教育に向けて—説明文作成にみる現状と課題—」日本リメディアル教育学会第16回全国大会予稿集
- 近藤裕子(2021)『高大接続と専門科目・社会接続に向けたライティング教育』シンポジウム ライティングの高大接続について考える—新時代の教育に向けて」科研費研究成果報告「大学・高等学校における文章表現教育の調査分析を基にしたカリキュラム研究」
- 三森ゆりか(2013)『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』(大修館)
- 渡辺哲司編著(2021)『木下是雄と学習院「言語技術の会」—日本初、小、中、高、大、社を貫く言葉の教育に挑む』Next Publishing Authors Press

## 初年次教育科目で文系学生を対象に行った統計学の実践報告

○寺島哲平（常磐大学）

### 1. はじめに

近年、スマートフォンの普及や情報処理技術の発達から収集可能なデータが増大し、このような大規模データを活用できるデータサイエンティストの養成が求められている。しかしながら、我が国では教育体制の整備が遅れている状況が続いており、このような状況を解消するために、数理・データサイエンス・AI 教育に対応する到達目標が設定され、数理・データサイエンス教育強化コンソーシアムは、リテラシーレベルでのモデルカリキュラムが提案した[1]。同資料の基本的な考え方には、データサイエンティストを養成するために、各大学や高等専門学校の教育目的、分野の特性、個々の学生の学習歴や習熟度合い等に応じて適切な教育を行う必要性が明記されている。

そのうえで前述の資料[1]では、教育方法にグループワークやグループディスカッションといった学び方が書かれている。グループワークやディスカッションで適切な学習効果を得るためには、主体的・積極的な態度で授業に参加することで必要であり、このようなことが可能な学生は、人間関係面において積極的に開放的な態度であると言われている。一方、人間関係の特性の弱いあるいは持たない学生にとって、グループワークやディスカッションは適切な学習効果を得ることが難しく、むしろ苦痛を感じる可能性も指摘されている

[2]。またアクティブラーニングに関する他の問題(基礎学力が原因で授業に対して意欲や態度の格差が生じるなど)を指摘する資料もある[3]。

このような状況を前提として、本稿では「数学に苦手意識を持っている」と言われる文系大学生に対して、数理・データサイエンス・AI 教育(リテラシーレベル)を想定した科目「統計の基礎」で実施した内容を報告する。

### 2. 「統計の基礎」の授業について

本稿で紹介する科目「統計の基礎」は、全学部(3 学部, 9 学科)の1 年生を対象とした必修科目である。筆者は9 学科中 3 学科(2022 年度の履修人数は 82 人, 107 人, 119 人)を担当している。「統計の基礎」は対面授業だが、100 人前後の履修者を相手に授業を行うため、資料配布や課題管理などの労力軽減を考え、Google Classroom を用いている。全 15 回の授業で取り扱う内容は「データ解析の考え方」「平均値・中央値」から始まり「t 検定やカイ二乗検定の結果を文章形式で説明する」までを扱う。各回における授業の流れを図 1 に示す。それでは I~III までの内容について詳しく説明する。

#### I. 講義(約 30 分)について

アバターの質問に対して教員が回答するという対話形式で統計学を説明した。元々、新生を対象にした時間割作成ガイダンスで行

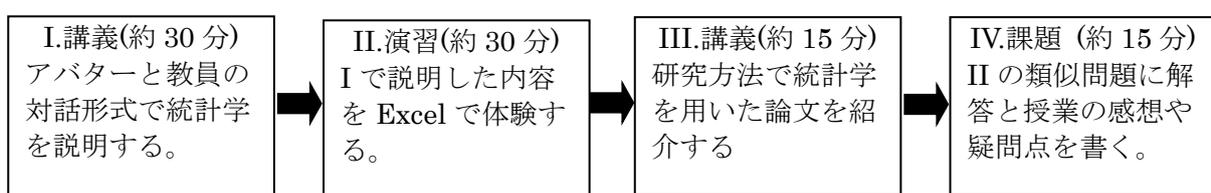


図 1. 授業の流れ

## 学士課程教育②

った方法であったが、このガイダンスを受けた新入生から「私のわからないことをアバターが質問してくれるため、ガイダンス内容を理解しやすかった」という感想が多かった。そのため科目「統計の基礎」でも新入生ガイダンスと同様の方法で説明することにした。

### II. 演習(約 30 分)について

学生は持参したパソコンやタブレットなど ICT 端末を用いて Excel を操作することで、I の講義で学んだ統計学を体験した。具体的には、平均を学ぶ単元であれば AVERAGE 関数を、標準偏差を学ぶ単元であれば、データが母集団の場合 STDEV.P 関数を、データが標本の場合 STDEV.S 関数を用いて、学生は統計学を体験した。なお欠席や予習復習のために、Excel の操作方法を解説した動画を、Google Classroom 上で視聴することができる。

上述の資料[1]において「実データ(あるいは模擬データ)を用いた講義を行うことが望ましい」と書かれているため、科目「統計の基礎」では、Kaggle[4]でダウンロードした 200KB 以内のデータセットを使用した。200KB 以内のデータセットであっても、500 件以上のデータとなるため、大学 1 年生にとっては大規模なデータを Excel で操作することになった。

### III. 講義(約 15 分)について

I の講義または II の演習で扱った内容とは無関係に、III の講義では研究方法に統計学を用いた人文学系または社会学系の論文を紹介した。これらの分野の論文を紹介する理由としては「卒業論文を作成する時に統計学を用いる可能性」や「2 年生以降で統計学に関する科目を選択する可能性」に学生が気づく機会を提供するためである。III の講義で使用した論文の一部を紹介する。

- 歴史系として「魔女狩りと気温の関係」や「なぜ奴隷は船上で反乱を起こさなかったのか」など。
- 時事問題として「ゲイを公表した男性の

履歴書の通過率」や「中国政府におけるインターネットの検閲システムや投稿」など。

### 3. 「統計の授業」の感想について

IV の課題は、「II の類似問題への解答」と「今回の授業について 150 字以上の感想を書く」であった。この課題に書かれた内容を参考にして、科目「統計の基礎」に対する学生からの感想を検証する。ただし本稿では紙面都合上、I の講義の感想を簡単に記し、他の感想については学会発表時に報告する。アバターの質問に対して教員が回答するという対話形式により統計学を説明する方法については、第 1 回目で最も多くの感想が書かれていたが、第 3 回目以降では感想が書かれることはなかった。それよりも授業で扱った内容について「高校までに学んだ内容を復習することができた」や「今回の授業で学んだ内容は難しい」という感想が多く書かれていた。

#### 参考資料

[1] 数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアム(2020), 『数理・データサイエンス・AI(リテラシーレベル)モデルカリキュラム～データ思考の涵養～』, <http://www.mi.u-tokyo.ac.jp/consortium/>,

閲覧日: 2022 年 5 月 13 日

[2] 樋口健(2014), 『誰がアクティブ・ラーニングの恩恵を受けているのか?—大学 1 年生の友人関係の特性から考える—』, [https://berd.benesse.jp/koutou/topics/index\\_2.php?id=4125](https://berd.benesse.jp/koutou/topics/index_2.php?id=4125), 閲覧日: 2022 年 5 月 13 日

[3] 小針誠(2018), 「第 5 章 未来のアクティブラーニングに向けて」, 『アクティブラーニング 学校教育の理想と現実』, 講談社

[4] Kaggle, <https://www.kaggle.com/>, 取得日: 2022 年 5 月 13 日

## 初年次教育をデジタルトランスフォーメーション（DX）の視点で捉え直す —教育の質保証のためのリフレクション—

○高松邦彦(神戸常盤大学・東京工業大学)・伴仲謙欣(神戸常盤大学)・  
光成研一郎(神戸常盤大学)・中田康夫(神戸常盤大学)

### 1. はじめに

本学は保健科学部の医療検査学科、看護学科、診療放射線学科(2020年度開設)、口腔保健学科(2021年度開設)、教育学部のこども教育学科の計5学科(通信制課程は除く)から成る、専門職養成の中規模大学である。新入生の合計は430名前後となっている。

この新入生に対して、全学科合同で受講する初年次教育科目「まなぶる▶ときわびとI(前期)&II(後期)」を必修科目として開講している[1]。

この5学科430名の学生を、全5学科の学生が混在する5~6名からなる(6名から構成されるチームは1つ学科が重複する)85チーム前後を無作為に作成する。教員は2名1組となり、教員1人あたり3チーム(学生数の合計15名~18名)、1つの教室あたり2名の教員で6チームを担当する[2]。

### 2. デジタルトランスフォーメーション(DX)

デジタルトランスフォーメーション(Digital Transformation、DX)は、約20年前にE. Stolterman博士らが提案した「IT技術が人々の生活をよりよくする」という概念である[3]。DXは、単なるデジタル化とは異なる概念である。DXに至るには、アナログをデジタル化する「デジタルイゼーション(Digitization)」やデジタル化により効率化する「デジタルライゼーション(Digitalization)」がある[4]。つまり、単にデジタル化したり、効率化したりするだけではなく、DXというためには、Transformationが起こる必要がある。

### 3. 初年次教育におけるDX

本学の初年次教育授業は、2016年に始まった第1次大学改革から、大学全体のプロトタイプ授業として開発されてきた[5]。2017年の開講当初から、Learning Management System(LMS)を活用するだけではなく、LMS以外にも積極的にICTツールを導入してきた[6]。

その理由の1つは、初年次教育の運営においてSustainability(持続可能性)を向上させるためであり、特定の教員だけに負担をかける、あるいは任せきりにするのではなく、担当教員全員が主体的にかつ協働して授業運営に参画することを目指したからである。その結果、ルーブリック評価に関するデータをはじめ、多くのデータが集積された。

これは数理データサイエンスの文脈でいえば、従来の仮説駆動形の研究ではなく、データが先に存在するデータ駆動型の研究の土壌が(期せずして)整ったということのである。

この集積されたデータを用いて、われわれが近年提唱しているEducationとInformaticsの学際分野であるEduinformatics[7]をもとに、数理解析[8]や機械学習(AI)[9]を用いた解析をすることで、結果的には教育の変革につながることができた。

2017年当初は、DXを意図してICTツールの積極的導入を図ったわけではなかったが、ふりかえてみると、このことはここ数年急速に謳われ始めた教育におけるデジタルイゼーションとデジタルライゼーションを経由したデジタルトランスフォーメーション(DX)の流れになっていた。

## 学士課程教育②

LMS の活用はデジタイゼーションにあたり、ICT ツールの導入はデジタイゼーションにあたる。そして、このデジタイゼーションとデジタイゼーションによって得られた大量のデータに対して、Eduinformatics による解析を行うことで、教育に関するエビデンスが明らかにでき、得られたエビデンスに基づき評価方法・内容を含めた教育方法・内容の変革と改善を行うに至った。このことはまさにエビデンスに基づく教育であり、教育における真の DX になっていた。つまり、教育のデジタル化を進めたことで、従来のアナログ的な授業運営・方法では行えなかった教育研究をなし得たことで、初年次教育のみならず、大学全体の教育の質保証に繋がっている[8]。

具体的には、われわれが近年 Institutional Research (IR) の分野で提唱してる学生データについての新クライテリアである「プライマリーデータ」と「セカンダリーデータ」という 2 水準[9]を基準として、教員間の評価について解析し[10]、その結果をもとに、授業前後に毎回行われる 30~60 分程度の準備とふりかえりにより、持続可能性を担保したうえで教員全員がルーブリックにもとづいた学生評価ができていることを明らかにしてきたことが挙げられる[11]。

また、本学における初年次教育は、教員歴がない実務家教員は必ず参加しなければならず、LMS の使い方やアクティブラーニング型の授業方法を学び、教員の教育力を担保するための FD として機能している[12]。

教員は 2 人 1 組となり、1 つの教室を担当する。5 年間の教員ペアをネットワーク解析した結果、学科に依存しない人的ネットワークが構築されていたことから、初年次教育が学内の人的ネットワークの構築に貢献していることが示唆されたことから、本学における初年次教育の重要性を示しているといえる[13]。

本研究では、従来本学で行われてきた初年次教育を DX という新たな視点で捉え直した。

その結果、初年次教育における DX は、初年次教育の変革のみならず、教員の FD、ひいては大学全体の教育の質保証に寄与することが示唆された。

## 参考文献

- [1] 桐村豪文, 高松邦彦, 伴仲謙欣, 野田育宏, 光成研一郎, 中田康夫, “学科横断型の初年次教育科目「まなぶるときわびと」の実践報告,” 高等教育質保証学会第7回大会予稿集, pp. 49–50, 2017.
- [2] 伴仲謙欣, 高松邦彦, 川崎弘也, 近藤みづき, 溝越祐志, 三浦真希子, 光成研一郎, 中田康夫, “「チーム医療」「チーム学校」を念頭においた初年次教育: 初年次教育科目「まなぶるときわびと」への「チームビルディング」の手法の導入,” 神戸常盤大学紀要, vol. 12, pp. 47–56, 2019.
- [3] E. Stolterman and A. C. Fors, “Information technology and the good life,” *Information systems research*, Springer, 2004, pp. 687–692.
- [4] 木村弘志 and others, “大学職員調査の過去と未来-先行調査の整理・分析および、今後求められる調査の提案,” 大学アドミニストレーション研究, vol. 6, pp. 57–70, 2016.
- [5] 高松邦彦, 光成研一郎, 中田康夫, 伴仲謙欣, 濱田道夫, “初年次教育科目をもとにした基盤教育科目の設計と評価,” 初年次教育学会第12回大会 発表要旨集, 2019, pp. 86–87.
- [6] 中田康夫, 高松邦彦, 伴仲謙欣, 光成研一郎, “全学合同初年次教育科目における質保証の取り組み—アナログ的・デジタル的手法を織り交ぜて—,” 第25回大学教育研究フォーラム予稿集, 2019, p. 133.
- [7] K. Takamatsu, M. Katsuhiko, Y. Kozaki, K. Bannaka, I. Noda, K. Mitsunari, M. Omori, and Y. Nakata, “Eduinformatics: A New Academic Field Needed in the Age of Information and Communication Technology,” *Intelligent Sustainable Systems: Selected Papers of WorldS4 2021, Volume 1 (Lecture Notes in Networks and Systems Book 333)*, 2022, pp. 139–147.
- [8] Y. Nakata, K. Bannaka, K. Murakami, Y. Kozaki, K. Mitsunari, and K. Takamatsu, “Evaluation of a First-Year Course Using Factor Analysis,” *Advanced Applied Informatics (IAI-AAI), 2020 9th International Institute of Applied Informatics (IAI) International Congress on. Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE)*, 2020, pp. 385–390.
- [9] 高松邦彦, 伊藤彰, 桐村豪文, 村上勝彦, 野田育宏, 市川尚, 伴仲謙欣, 大森雅人, 中田康夫, “IRにおけるマスキングの新提案,” 第10回大学情報・機関調査研究会 (MJIR2021), 2021, pp. 124–127.

## 賛助会員広告一覧

(申込受付順)

株式会社 **KEI** アドバンス

日本データパシフィック 株式会社

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

ラインズ 株式会社

玉川大学出版部

株式会社 ワークアカデミー noa 出版

株式会社 くろしお出版

株式会社 世界思想社教学社

# ジェネリックスキル育成・評価プログラム

## プログラム 「PROGテスト」のご案内

昨今の高大接続改革の中で、学力の3要素をバランス良く育成する事が求められる中で、「思考力・判断力・表現力」はリテラシーの力として、「主体性や協働性」はコンピテンシーの力として「PROG（プログラム）テスト」が貴学で学ぶ学生の現状把握、更に新たな課題発見やプラン作成のきっかけになればと考えております。汎用的能力の測定・育成については是非ご検討いただきますようお願いいたします。

### リテラシー

新しい問題や、これまでの経験のない問題に対して知識を活用して課題を解決する力  
\* 習得した知識を現実問題に活用する事で育成

知識を学ぶ

知的コンピテンス

学び続ける力の要素

### コンピテンシー

周囲の状況に上手に対応するために身に付けた決意決定・行動指針などの特性  
\* 経験を振り返りモデルを意識して行動する事で育成

経験を積む

社会的コミュニケーションコンピテンス

どんな仕事にも転移可能な力の要素

### リテラシーテスト

### コンピテンシーテスト

	リテラシーテスト	コンピテンシーテスト
実施形態	選択式（紙またはWeb受験）	
問題数	30問	195問（両側選択形式）
実施時間	45分	40分
測定領域	(1)問題解決力（情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力） (2)言語処理、非言語処理能力	対人基礎力、對自己基礎力、対課題基礎力
結果納品	①個人向け結果報告書、②教職員向け報告書（要約版）、③成績一覧、④PROGの強化書、⑤全体傾向報告書 【オプション/別途有料】①学生向け解説会、②他の教学データとの組み合わせ分析	

### 実施の流れ

#### ①お申込み

・テスト実施予定日の最低14日前迄にご連絡ください

#### ②テスト実施

・実施時間85分（リテラシー+コンピテンシー）  
・運営マニュアルの用意あり

#### ③結果納品

・受験者向け→結果報告書,テキスト（強化書）  
・学校様向け→要約版,成績一覧,全体傾向報告書

#### ④結果分析報告（受験者向け・学校様向け）

・全体傾向の説明/能力育成のアドバイス

### 実施条件

#### ①料金（リテラシー、コンピテンシー両方）

@3,000円（税込3,300円）

※実受験者数毎に団体割引がございます。

※PROGテストはリテラシーもしくはコンピテンシーの片方のみ受験も可能です。

#### ②受験対象

・高等教育機関の学生  
（大学、短期大学、高等専門学校、専門学校）

### お問い合わせ先

河合塾グループ  
株式会社 KEIアドバンス

TEL : 03-5276-2731（代表）

受付時間 : 9:00~18:00（土日・祝日除く）

URL : <http://www.52school.co.jp/>

# データサイエンスの基本

これから  
学び始める皆さんへ

新発売  
11月  
リリース



これからデータサイエンスを学ぶ初心者が、知っておいた方がいい知識をまとめた教材です。

## 特徴

### PC・タブレット・スマートフォン対応

データサイエンスの分野は多岐にわたるため、本格的に学ぶ前に、eラーニングで前提となる知識をつけることで、その後の学習をスムーズに進めることを目的としています。

データサイエンスで使うツール、統計、AIなどのさわりをまとめた、入門の入門といった位置づけの教材です。

## 内容

- 第1章 社会環境の変化
- 第2章 データを扱うためのツール
- 第3章 統計の基礎
- 第4章 データリテラシー
- 第5章 人工知能
- 第6章 データサイエンスの社会的課題
- 修了テスト1
- 修了テスト2

無料



### コンテンツのモニター利用ができます！

弊社リモートアクセス用サーバに接続していただき、実際にコンテンツをご覧いただけます。インターネット環境があればご利用いただけます。お気軽にお申し込み下さい。

お申し込みはこちら <https://www.datapacific.co.jp/contact/monitor>





文部科学省後援事業

# 日本語検定

社会人として必要な日本語力が身に付きます!

日本語検定は敬語、文法、語彙、言葉の意味、表記、漢字の6領域と総合問題で日本語の総合的な知識と運用能力を測ります。全国約200の大学・短大で、リメディアル教育、初年次教育等で活用されています。100以上の企業が採用にあたって日本語検定合格者を優遇しており、就職までに一定レベルの日本語力が求められています。

【Q】のような場面で、それぞれの( )部分はどのような言い方をすればよいでしょうか。最も適切なものを選んで、番号で教えてください。(2020年度第2回日本語検定 3級 敬語)

【大学の演劇サークルの公演で、受付係が招待客に】

本日はご来場ありがとうございます。お席には係の者が( )。

- 1 ご案内になります
- 2 ご案内します
- 3 案内して差し上げます

公式キャラクター  
にはごん



A 正答 2

ステップアップ  
日本語講座

初級 4・5級対応



定価 660円(本体600円)ISBN 978-4-487-60705-1

ステップアップ  
日本語講座

中級 3・4級対応



定価 660円(本体600円)ISBN 978-4-487-60706-8

ステップアップ  
日本語講座

上級 2・3級対応



定価 770円(本体700円)ISBN 978-4-487-60709-9

### 教師用指導書

指導のポイントと問題の解説を詳細に記した、教師用指導書を用意しています。(原則として、テキストを20冊以上ご購入いただくと、指導書が1冊付きます)



### シラバス

「通年用」と「前期後期用」のシラバスを用意しております。詳細は日本語検定委員会事務局(下記)までお問い合わせください。



### オンデマンド版

学校名を入れたオリジナルデザインのテキストの作成も可能です。(原則として、50冊以上から承ります)ご注文は、東京書籍(株)の各支社及び検定事業部(03-5390-7495)にご連絡下さい。



令和4(2022)年度 第2回(通算第32回)

申込期間 8/1(月) ~ 10/14(金) 10/15(土) 消印有効

一般会場 11/12(土) …… 準会場 11/11(金)・12(土)

※団体受検の場合のみ、学校や企業を検定会場(=準会場)として受検できます。

特定非営利活動法人

日本語検定委員会

お問い合わせ 〒114-8524 東京都北区堀船 2-17-1

☎ 0120-55-2858 ●午前9:30~午後4:30 (土・日・祝日を除く)



【特別協賛】読売新聞社 【協賛】時事通信社/東京書籍

【後援】文部科学省/日本商工会議所/経団連事業サービス/全国連合小学校長会/全日本中学校長会/全国高等学校長協会/全国工業高等学校長協会/全国商業高等学校長協会/全国高等学校国語教育研究連合会/日本PTA全国協議会/全国高等学校PTA連合会/日本青少年育成協会 他

基礎を学び直せる教材ないかなあ。  
SPI対策にもつなげられないかなあ…。



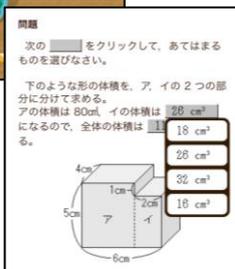
そのお悩み、**ラインズ**が解決します！

## ラインズドリル リメディアル教育用eラーニング



▲PC画面

スマホ画面▶



### ✓スマートフォンでできる！

スマホに対応しているため、ログイン率の高さにつながります。

### ✓効率よく学習できる！

テストで理解度を判定し、苦手な分野を中心に学習できます。

### ✓学習状況を一目で把握できる！

管理画面から学生の状況をリアルタイムで把握できます。

## ラインズSPI 基礎から学べるSPI対策eラーニング



▲PC画面

スマホ画面▶



### ✓実践的にできる！

本番同様の画面で、実践的に模擬試験が受けられます。

### ✓演習問題は2000問以上！

豊富な問題量で力をつけられます。

### ✓初年次教育でも活用できる！

初年次の基礎教育として、ラインズSPIを取り入れている大学もあります。

## ■お問い合わせはこちらから

ラインズ株式会社 リメディアル教育グループ  
<https://www.education.jp/education02/jafye2022>



体験サイトも  
ご利用いただけます！

# 大学の学習支援 Q&A

清水栄子・中井俊樹 編  
A5判並製・178頁 定価2200円

学習支援の現場で、学生が抱える多様な課題の支援のためにどう対応すればよいのか。面談の基本から学習支援者の能力開発、専門組織の運営まで、豊富な経験をもつ執筆者が実践に生かせる100の課題とその解決策を紹介する。学習支援に携わる教職員必携の書。



# 学びの技

## 14歳からの探究・論文・プレゼンテーション

後藤芳文、伊藤史織、登本洋子 著  
A5判並製・152頁 定価1760円

研究テーマの決め方から情報収集の方法、マインドマップや探究マップなどのツールを活用した論文やプレゼンテーションの効果的な工夫まで。ラーニング・スキルの基本を見開き形式で紹介する。中高生の探究型学習に好適。



# 大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法 改訂第二版

松本茂、河野哲也 著  
A5判並製・160頁 定価1650円

大学生、社会人必携！「読む・書く・プレゼン・ディベート」は知的生活活動に必須のコミュニケーション行為。本書は情報収集・整理から主張・議論の仕方までの本質を、内容・形式両面から実践的に伝授する。待望の改訂版出来。



# 学びのティップス 大学で鍛える思考法

近田政博 著  
A5判並製・104頁 定価1320円

大学での学習法・思考法や自発的に学ぶ習慣をつけるコツを紹介する。高校とは異なる大学のスタイルへの適応の仕方を詳しく解説。

# 大学で勉強する方法

A・W・コーンハウザー 著 D・M・エナソン 改訂  
山口栄一 訳

B6判並製・96頁 定価1068円

シカゴ大学の新生入生用として作成され、数十年にわたって全米で使用されてきた簡潔かつ実践的、単刀直入な勉強法のガイドブック。

# 大学生生活ナビ 第二版

小原芳明 監修 玉川大学 編  
B5判並製・244頁 定価2420円

大学はどこなところか。高校を卒業したばかりの新生入生向けに、大学生活の基本スキルを解説。初版を大幅に改訂した第二版。

# 大学SD講座2 大学教育と学生支援

中井俊樹 編  
A5判並製・216頁 定価2200円

大学職員が大学教育と学生支援に関する知識や技能を身につけられるよう、業務に役立つ内容をその背後にある理論や原理と関連付けて紹介する。巻末資料も豊富に掲載。

# シリーズ大学教育の質保証1 カリキュラムの編成

中井俊樹 編  
A5判並製・190頁 定価2200円

大学教育の質保証を推進する教職員として必要な知識を提供するシリーズ。大学が主体的に、特色あるカリキュラムを編成するための実践的な方法を体系的に解説する。

文系学生にもわかりやすい！  
数理・データサイエンス・AI(リテラシーレベル)  
モデルカリキュラム対応！

全 Section 対応の  
ポイント解説動画  
セットも販売予定！



- 講師用資料も充実
- 事例で体験し実践につながる
- 練習問題 54 問
- 役立つ One Point も充実

<編者> 保本 正芳

近畿大学総合社会学部 講師 (博士 (工学))

<販売価格> 2,200 円 (税込)

B5 / フルカラー

※ オプション動画 (68 点) 600 円

献本ご希望の方は、  
フォームよりお申込み  
ください。



#### 目次

1. 社会で起きている変化
2. データ活用を知る
3. データを分析する
4. データ活用を実践する
5. データを表現する

## オンライン、オンデマンド授業に使える Web コンテンツも多数！

— 入学前 —

— 初年次 —

— 効果測定 —

### Rasti-Learning

受講者の強み・弱みに合わせた学習が可能！ 論理力、数値分析、ビジュアル表現など 12 講座で基礎トレーニング、苦手な補強に！

デモサイトはこちら

<http://rasti.jp/rl-demo/start.html>

アカデミックプライス

1 講座：1,039 円

### Web テスト

意識づけや理解度チェックに！ 気軽に実施できる Web テストあり

◆ 2022 年度版情報倫理ハンドブック Web テストセット

【定価】577 円



### NESS

テキストと連動して繰り返し学習できる Web 教材。学生の知識の定着に！

◆ イチからしっかり学ぶ！ Office 基礎と情報モラル (NESS 付き)

【定価】1,677 円



### 情報活用力診断テスト Rasti(ラスティ)

「学生の成長」の数値化で、情報授業の効果測定が可能。

● 活用シーンを問題として出題。情報活用の実践力が試される。

● テスト終了後、強み・弱みがわかるスピード診断。

アカデミックプライス

1 回・3,137 円

### リファレンス動画

リファレンス動画は、Office の操作方法を動画で学ぶことが出来るコンテンツ。課題作成を進める中でわからないことがあれば、検索して学習者自身が自主的に学び進めることが可能。テキスト専用動画サイトもあり、授業も進めやすい。



※ 価格はすべて税込

# noa 出版

お問い合わせはこちらから

☎ 06-6377-9500

✉ [info@noa-prolab.co.jp](mailto:info@noa-prolab.co.jp)



<http://noa-prolab.co.jp/>

noa 出版は情報教育・キャリア教育関連の授業用教材を制作・出版しています。

# くろしお出版

## 読んで考える日本語 10のトピック 中上級

■森美子[著]／B5判／本体2,200円＋税

大野晋、金田一春彦、鈴木孝夫などの「生の」文章を軸に、読解、語彙練習、ディスカッション、考察、表現活動などを通して、日本語の分析力と運用力を養う。漢字、敬語、カタカナ語など「日本語」をテーマとした読み物で楽しく学ぶ。



## 語彙ドン！ [vol.2] 大学で学ぶためのことば

■石澤徹/岩下真澄/桜木ともみ/松下達彦[著]／A5判／本体1,500円＋税

大学や専門学校で講義を受けるために必要なことばを、効率良く集中的に学習する語彙教材のシリーズ第2巻。Vol.1に続き、日本語学術共通語彙のうち600語を、様々な練習方法で楽しく繰り返し身につける。



## 留学生のための考えを伝え合うプレゼンテーション

■仁科浩美[著]／B5判／本体1,800円＋税

プレゼンテーションに関する基本的な構成や具体的で豊富な日本語表現を、タスクを通して学ぶ。質疑応答も丁寧に触れ、相手に配慮する態度を重んじコミュニケーション能力も高める。文理対応で発表例動画あり。中級後半～上級向け。



## 読む力 初中級

■奥田純子[監修] 竹田悦子/久次優子/丸山友子/矢田まり子/内田さつき[編著]／B5判／本体1,800円＋税

大好評『読む力』の初中級編。書き下ろしから生の文章まで多様な読み物に触れ、ことばを理解する「言語タスク」と、筆者の考えなどを読み取る「認知タスク」を通して、アカデミックで深い読みを身につける。日本語能力試験N3から。



## 基礎からわかる書く技術

■森口稔/中山詢子[著]／A5判／本体1,300円＋税

論理的に考える力を養い、わかりやすい文章を書くための教科書。高校までの国語で習ったことも含めて基礎から解説する。基礎編と練習編の2部構成。自習にも、教科書にも。2015年刊行『基礎からわかる日本語表現法』を大幅改訂。



## 知へのステップ 第5版 大学生からのスタディ・スキルズ

■学習技術研究会[編著]／B5判／本体1,800円＋税

「大学での勉強の仕方がわかる」と支持を受け続ける、大学1年生の必携書籍。Windows 10、Microsoft Office 2016に対応改訂。ダウンロードデータ有。



## リサーチ入門 知的な論文・レポートのための

■竹田茂生/藤木清[著]／A5判／本体1,800円＋税

アンケートやインタビュー等で多くのデータを集めて分析する「調査」は、ビジネスプレゼン・研究論文に不可欠。「調査」の基礎を社会調査とマーケティングリサーチ双方の視点からやさしく解説。切り離して提出できるワークシート付。



# 大学生 学びのハンドブック

5訂版

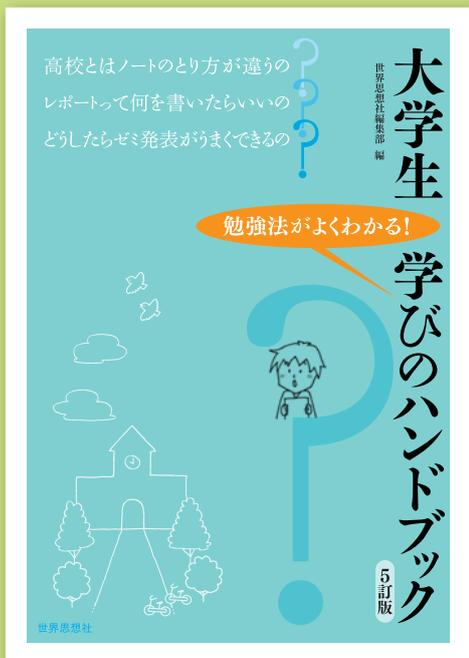
人気の初年次教育テキスト、最新版

ノートのとり方、レポートの書き方、ゼミ発表の仕方など、大学生に必要なスタディ・スキルを、イラストで具体例を示してわかりやすく解説。

定価1,320円(10%税込) A5判/128ページ/2色刷 ISBN 978-4-7907-1707-2

改訂で、さらに読みやすく、使いやすくなりました!

- メールと SNS の違いや注意点についてのページ新設
- 読解のヒントや文の流れがわかりやすく示された「テキストの読み方」
- 大学生による取組例で、イメージしやすい「レポートの書き方」
- 最新版の画面キャプチャーで、操作法がすぐわかる Word, Excel



## 違いがわかりやすい表

### メールを活用しよう

#### コミュニケーションの方法を使い分ける

高校までは、自分をよく知る人とのコミュニケーションが中心ですが、大学生になると、人間関係が広がります。また、高校までの先生と異なり、大学の先生は、数百人の学生を相手に複数の授業を担当することもあります。連絡をするときは、相手の状況や相手との関係性を考慮し、丁寧に伝えることを心がけましょう。文面とともにツールの使い分けも重要です。

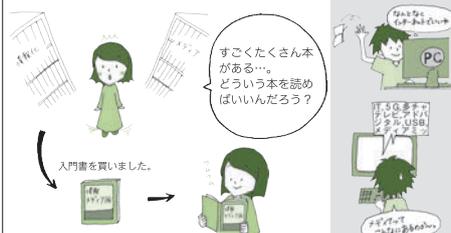
▶大学の先生  
1つの大学で  
兼任講師として  
大学で教える方です。

#### SNS (チャット機能) とメールの違い

SNS (チャット機能)	件名	メール
なし。	宛名と自分の所属・名前をはじめに書く。	件名を一言で示す。
いきなり件名を書く。	本文	ひとまとまりの文章を書く。手紙に近い。
短文のやりとりが多い。会話に近い。	適した場面	フォーマルで、丁寧なやりとり。

## 取組例がわかるイラストと吹き出し

### ①本を読んで情報を集める



最初の1冊は、比較的短時間で基本的な知識を得られる「入門書」や「新書」がおすすです。巻末に「参考文献」がつけられているば、より詳しい本を探す手がかりになります。

インターネットは情報が整理されておらず、信頼性の低い情報もまじっています。情報が整理された本を足がかりにする方が確実です。

### ②疑問や発見から「問い」をたてる

疑問に思ったところや発見したことをメモしながら読み、そこから自分なりの「問い」を設定しましょう。「問い」はあなたの問題意識であり、レポートの核になります。

スマホなどのメディア機器を介したコミュニケーションでは確かな情報

## 操作法がわかる画面キャプチャー

### ✓割合を計算して、パーセントで表示する

近畿二府四県の人口比を計算してみましょう。割合は個々の数字を全体の数字(合計)で割って求めます。

総務省統計局(2020)人口推計(2019年10月1日現在)より

各府県の人口を入力し、SUM関数で合計を出しておきます。

「=C2/C8」は「C2の値をC8の値で割りなさい」という意味です。セルの最初を「=」にすると、そのセルは値ではなく、計算式として扱われます。

- ①「=」を入力
- ②C2をクリック
- ③「/」を入力
- ④C8をクリック
- ⑤Enterで入力できます。

▶Excelでの計算  
Excelでかけ算、割り算をするときは、「×」は「\*」、「÷」は「/」と入力します。計算式は必ず半角で入力しましょう。



## 貴学専用の「入学前／初年次教育テキスト」をお作りします



低コスト 短期間 省手間

履修案内 施設紹介  
危機管理 大学用語

定評ある市販のテキストから

カスタマイズ

選んで

加えて

貴学専用テキスト

献本申込受付中

サンプル公開中

# 初年次教育学会 第15回大会 運営関係者名簿

## 【初年次教育学会会長】

藤田 哲也 (法政大学)

## 【初年次教育学会大会運営委員会】

委員長 藤波 潔 (沖縄国際大学)

委員 清水 栄子 (追手門学院大学)

西村 秀雄 (金沢工業大学)

藤田 哲也 (法政大学)

藤本 元啓 (崇城大学)

加藤 みずき (多摩大学)

## 【多摩大学大会実行委員会】

委員長 小西 英行 (多摩大学)

副委員長 加藤 みずき (多摩大学)

委員 公平 正一 (多摩大学)

江藤 伸吾 (多摩大学)

福井 佑典 (多摩大学)

矢内 直美 (多摩大学)

表紙ロゴデザイン 山田 慧美

初年次教育学会第15回大会発表要旨集

発行日：2022年9月5日

発行者：初年次教育学会大会運営委員会

初年次教育学会第15回大会事務局

(国際文献社 初年次教育学会大会ヘルプデスク)

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

E-mail：jafye-desk@bunken.co.jp

第15回大会 HP： <http://www.jafye.org/conf/conf2022/>